

## 表紙, 目次, 抄録, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38521">http://hdl.handle.net/2297/38521</a>

明治四十年十一月十六日發行

# 十全會雜誌

第十四號



(非賣品)

全澤醫學專門學校十全會

# 十全會雜誌第四十八號目次

## ○原著及實驗

○肉羹汁ノ消化機能ニ對スル試驗  
Experimentelle Untersuchungen über die  
Bedeutung der Estraktivstoffe des Fleisches  
für die Magenverdaunung.

特別會員 佐々木 達

○慢性下痢ノ療法ト牛乳ノ關係

Verhalten der Milchdiät bei chronischer Diarrhoe.

特別會員 佐々木 達

○晚發性遺傳梅毒ノ一例

Ein Fall der Syphilis hereditaria tarda.

特別會員 齋藤 義雄

○富士山ノ細菌

特別會員 松王 數男

## ○抄錄

○一般外科ニ於ケル浸潤麻醉ニ就テ.....伊 藤 抄

○ハセド―氏病ニ就テ.....伊 藤 抄

## ○漫錄

○字 草.....薔 薇 公 子

## ○會報

○特別會員動靜錄○叙任及辭令○新入學者○新入學生諸君を迎ふ○始業式  
○十全會々報○振風會の創立○四高に於ける我校の來賓競漕を觀る○一中  
に於ける我校來賓競漕を觀る○縣下各校に於ける我が撰手○痛惜山本長助  
君○高島一二三君ノ訃○故東長平君

## ○通信

○綴民賢雜觀○松原三郎氏北米給端書便○敷波重治郎氏通信○加藤寛氏通  
信○月原秀範君通信

## ○會告

○寄贈及交換書目○校外十全會費納付調書○三十九年度十全會校外特別會  
員會費收支決算報告○三十九年度十全會費收入決算報告

## ○廣告

○數件

## ○附錄

○佛典中の醫術.....佐 藤 巖 英



## 故東良平君遺子獎學資金募集

曩キニ石川縣金澤病院ニ醫員タリ且ツ金澤醫學專門學校ニ講師タリシ東良平君忽然痾  
ヲ得テ箆ヲ易エラル哀惜何ゾ耐ユルヲ得ンヤ

君ハ才德高潔ノ士ニシテ同窓中錚々タル有爲ノ材タリ日露ノ役ニ從ヒ殊勳ヲ奏シタル  
ハ固ヨリ當然今ヤ將サニ雄飛セントシタル高岡診療院ハ空シク經營ノ主ヲ喪フテ轉タ  
斷腸ノ種トナレリ噫君ハ又至誠信義ノ人所謂今世稀ナル聖人ノ風アリ夙ニ大志ヲ抱キ  
勤勉鞠行醫界ニ貢獻セシコト多ク平素得ル所ノモノアレハ直チニ之ヲ斯道研鑽ノ資ト  
ナシテ顧ミス不慮ノ災後餘ス所ノモノハ唯ニ遺子ノミ噫

嗚呼天道是乎非乎君ノ如キ德行篤學ノ仁士ヲ奪フテ尙未タ東西ヲ辨セサル幼稚ノ二子  
ヲ遺セリ人世悲慘ノ極恬然之ヲ顧ミサルニ於テハ遂ニ人倫ノ大義ヲ如何ニセンヤ即チ  
茲ニ相議シ先ツ君ノ遺子ニ對シテ吊慰ノ誠意ヲ以テ獎學ノ万一ヲ資セント欲ス希クハ  
慈心厚キ同情ノ諸士奮テ協賛アラシムコトヲ

一、出金額ハ一人金壹圓以上トス但シ團體トシテノ出金ハ此限りニアラス

一、締切期日ハ本年十二月三十一日限トシ送金ハ石川縣金澤病院外科田中一次郎又ハ越中高岡市千木屋町大澤五月宛ニセラレタシ

一、出金額ハ十全會雜誌ニ報告シ領収ノ證トス

發起人

石川喜直	飯森益太郎	八田智証	羽根田信次
沖野彌一郎	大澤五月	加藤慶三	高安右人
高岡榮	田中正一	田中一次郎	上田計二
野口詮太郎	野嶽利七	山田孝太郎	藤井伊之吉
深美貞之助	澤田定信	齋藤義雄	木村孝藏
木津太郎平	北川健三	宮田篤郎	三木恒男
三木榮末	三木三郎	下平用彩	島田吉三郎

此レ等ノ浸潤ハ實ニ一般外科ニ於テ非常ナル功獻ヲナスモノナリ

シユライヒ氏ハコカインノ非常ニ稀薄ナル液ト雖モ注射セル組織ヲ麻酔セシムルニ足ルコトヲ發見シ氏ハ次ノ處方ヲ稱用ス

強液 中液 弱液

〇、二 〇、一 〇、〇一……………鹽酸コカイン

〇、二五 〇、二五 〇、〇〇五……………鹽酸モルヒン

〇、二 〇、二 〇、二……………食鹽

一〇〇、〇 一〇〇、〇 一〇〇、〇……………蒸溜水

彼ハ強液ハ炎症アル部又ハ他ノ過敏性ノ組織ニ注射シ強液ハ大量ヲ要スル個所ニ應用ス

局量即四分ノ一瓦ハ顧慮ヲ要セズシテ注射シ得ベシ。然シ此レ等量ハ過量スルモ害アルコトナシ。

コカイン中毒ヲ浸潤ニヨリテ起ルコトハ。手術野ノ血行ヲ阻害スル時ニ防禦シ得ルナリ(即エスマルヒ驅血帶又ハ氷嚢應用ニヨル)

スアラレナル越幾斯即現時用キラル、浸潤液ノ一成分ハ手術野ノ局所貧血ヲ起サシムルニハ有功ナリ (Suppare-nal Extract)

コカイン中毒ハ注射サレタル處ニ長時間留リシ液ハ一部分ハ手術創ヨリ溢出シ其殘部ハ組織内ニ漸次吸收サルニヨリテ防ガル。

猶スバレナルXハ強心藥ニシテコカイン中毒ニ對スル生理的消毒藥ナリ

プトレル氏ハ八頭ノ豚ニ拾五回コカイン溶液ノ中毒量ヲ注射セシニ(アドレナリンヲ混合シテ)毫モ激烈ナル症狀ヲ認ムルコトヲ得ザリキ

シユライヒ氏液ノ功果ハ約二三十分間持續ス  
スバラレナルXヲ加フル時ハ局所ハ實ニ一時ヨリ一時間半麻酔ノ状態ニ在リ

アドレナリン加ノ比例ハ二万分ノ一又ハ三万分ノ一丈ケ浸潤液ニ加フベシ。時トシテハ四万分又ハ五万分ノ一ノ稀薄液ニテ十分ナルコトアリ

強液注射ニハ注意ヲ拂フヲ要ス。少數多量ヲ注射セルニ著者ハ被手術者ハ手指ヲ使用シ得ザリシヲ實見セリキ彼ハ衰弱ノ感ヲ起コシ内心苦痛ヲ感ジ嘔吐ヲ伴ヒ心機ハ亢進セリ。腹部疼痛ヲ起コシ卒倒セリキ。顔面蒼白色ヲ呈シ。脈搏ハ迅速細少且不正ナリ。此結果ハ拾分間繼續セリ。

コカインノ代用ニハオイカインハ猶安全ナリ。著者ハオイカイン液ノニグレイン半又ハ三グレインヲ實驗上何等ノ症狀ナシニ使用スルヲ得タリキ。

浸潤麻酔ノ安全ハ猶弱度ノコカイン又ハオイカイン液ニテ有功ナルコトノ証セラル、アラバ長足ノ進歩ヲ遂グルナルベシ。故ニ著者ハ食鹽、コカイン、オイカイン、水ヲ各種ノ量ニ混シテ之レヲ大腿ニ注射シテ以テ實驗的解決ヲ下サントセリ

二プロセントノ食鹽溶液ハ輕度ノ疼痛ヲ伴フ。然シテ若シモ液ヲ早急ニ注射スル時ハ疼痛増激ス。

注射セル平面ノ皮膚ハ少數過敏ニシテ麻痺セズ

通常ノ食鹽溶液ハ徐々ニ注射スル時ハ苦痛ハ少ナカリキ然シテ注射セル平面ハ全然鈍覺 (benumb) アルモ然シテラ麻酔セザリキ (not anesthetic)

二%ヨリ三%迄ノ食鹽溶液ハ拾分モ續ク疼痛ヲ起コスモ通常ノ食鹽水ヲ用キタル時ヨリモ鈍覺ハ増加セズ  
次ニ余ハ蒸溜水ヲ皮下ニ注入シタルニ二分間苦痛ヲ感ジタルモ其後二十分間繼續セル麻酔ヲ生ジタリキ

故ニ余ハ浸潤麻酔ノ完成ニハ組織液ト同質ノ液ヲ要スト  
決論スルヲ得タリ。

一%ノコカイン溶液注射ハ迅速ニシテ完全ナル麻酔ヲ全浸潤平面ニ起コサシムルヲ得タリ。然シテ其ハ約二十分間ヨリ三十分間繼續ス。強液ハ特種ノ利益アルコトハ認め得ズ。

一%ヨリモ弱キ液ニテハ浸潤セル平面ハ或ル點ハ麻酔セルモ他ノ部ハ或ハ過敏ニシテ其効果ハ拾分モ繼續スルコトナシ

通常ノ食鹽水中ニコカインヲ加フルハ蒸溜水ニコカイン

ヲ加フルニ勝レリ。其ハ後者ハ後果トシテ灼熱ト疼痛ヲ殘スニヨル。

コカインノ代リニオイカインヲ用キタル時ハ其結果相同ジ。實驗上確實ナル麻醉ヲ起コサシメントスルニハ大約一%ノコカイン又ハオイカイント六%ノ食鹽ヲ要ス。

左ノ處方ヲ費用ス

鹽酸コカイン又ハオイカイン

〇、一

食 鹽

〇、六

スバラレナルX(一一一〇〇〇、〇)五、〇一〇、〇

蒸溜水

一〇〇、〇

溶液ハ常ニ新敷作ルベシ。アドレナリンヲ加フル前煮沸消毒スベシ。オイカインハ煮沸ニ對シテハ無限抗力ヲ有ス然シテコカインハ是レ迄人ニ信ゼラレタルヨリモ抵抗力强シ。

一%ノ溶液ハ其能力ヲ變化サスコトナク約三十分間ノ煮沸ニ堪フ

適當ナル方式ハ浸潤麻醉ノ有功ナル應用ニ要用ナリ。最

モ要用ナルハ少ナク $\frac{1}{2}$ ヲ含有スルニ足ル注射器ナリ。然シテソハ活栓ト接合部ハ漏隙ナキ様完全ニ構成セルモノナルヲ要ス。注射針ハ長且少シク一端ハ曲尺ヲ呈セル小口徑針ナルヲ要ス。

モルヒンノ豫備的皮下注射ハ時トシテハ要用トス

注射針ノ第一挿入ニ際シテハ石炭酸ノ一滴カ鹽酸エチルヲ皮膚ニ應用シテ無痛トナスヲ可トス

針ノ先端ハ皮下ニ挿入サレテ。其一二滴ヲ注射セル時其滴ニテ先端ノ曲尺ハ覆ハル位ヲ度トス

然ル時ハ針ノ達スル度迄浸潤ハ無痛ニ豫期セル切開線ニ沿ヒテ續行ス。次ニ針ヲ抜キ去リテ麻醉野ノ他ノ限界線ニ再ビ挿入ス。此ノ如クニシテ順次今手術セントスル全局面ニ渡ルヲ要ス

麻醉ノ敏速ニ且完全ニ現レ來ル時直ニ切開ヲ加フ。全組織ハ切開切除スルニ際シテ輕度ニ浸潤サレ居ルヲ要ス。

若シモ疼痛ヲ訴フル時ハ速ニ再注射ヲナス。

浸潤麻醉ハ急性炎症アル組織ニハ時々組織ノ知覺過敏性



ノ爲メ失敗スルコトアリトス。

注射ハ他ノ麻酔セザル部ニ壓迫的疼痛ヲ起サシメザルコトニ注意シテ徐々ニ行フ。

切開ハ銳利ナル小刀ノ撃打ヲ以テナスベシ。膿瘍切開孔ニハ五%ノコカイン溶液ヲ十滿セルガーゼヲ挿入ス。一二分間後銳匙ヲ以テ輕ク膿瘍壁ヲ完全ニ搔破シ得ベシ。

痔核手術ニハ浸潤ヲ肛門周圍ニ行ヒ。注射針ハ直腸外側ニ密接シテ上行シ全肛門周圍組織ニ浸潤シ得。然ル時ハ肛門括約筋ハ無痛ニ擴張シ得

痔核ヲ動カスゴトクナサン時ハ注射針ヲ其基底ニ挿入シ腫瘍ヲ拾分浸潤セシムル時ハ何レノ方向ニモ望ム如ク動カシ得ベシ

數多ノ大手術ハ小手術ト同様ニ局所麻酔ニテ十分行ヒ得殊ニ攝護腺切除術瘰癧ニハ可。切斷術(四肢ノ)筋筋切除術モ行ヒ得。多數ノ開腹術モ始終局所麻酔ノミニテ決行シ得ベシ。此レ等ハ一部局所麻酔ニ應シ時宜ニ應ジテコロールフォルムトエーテルヲ用ユルモ可ナリ。

浸潤麻酔ノ禁忌  
イ、患者器械使用ヲ恐ル、トキ  
ロ、筋ノ弛緩ヲ要スルトキ  
ハ、成形手術ニハ浸潤ニヨリテ該組織的關係ヲ破ルヲ恐ル、トキ

浸潤麻酔ノ禁忌

イ、患者器械使用ヲ恐ル、トキ  
ロ、筋ノ弛緩ヲ要スルトキ  
ハ、成形手術ニハ浸潤ニヨリテ該組織的關係ヲ破ルヲ恐ル、トキ

浸潤麻酔ノ故障  
イ、コカイン中毒ノ危險ナルコト(アドレナリンノ應用トオイカイン代用ニテ防ギ得)

ロ、注射後組織腐敗ヲ稀レニ伴フコト  
ハ、二次の出血ノアルコト(アドレナリンニテ防ギ得)

浸潤麻酔ノ利益  
イ、手術臺上ノ死亡數ノ減少セルコト  
ロ、全身麻酔ニ生ズル心、肝、腎、肺ノ後害ナキコト  
ハ、嘔吐、吐瀉、知覺脫失ナキコト  
ニ、糞汁排泄ノ如キコトナキコト  
ホ、患者ハ自ラ外科醫ノ助手タルコト  
ヘ、患者ノ手術同意ヲ得易キコト

浸潤麻酔ノ利益  
イ、手術臺上ノ死亡數ノ減少セルコト  
ロ、全身麻酔ニ生ズル心、肝、腎、肺ノ後害ナキコト  
ハ、嘔吐、吐瀉、知覺脫失ナキコト  
ニ、糞汁排泄ノ如キコトナキコト  
ホ、患者ハ自ラ外科醫ノ助手タルコト  
ヘ、患者ノ手術同意ヲ得易キコト

ト、麻酔ノ心持ヲヨキコト  
 ナ、助手ノ要少ナキコト (伊藤抄)

## ○バセドー氏病ニ就テ

(コツヘル、ブリチッシユ、メチチニシエ  
 ジヨナル)

バセドー氏病ハ甲状腺ノ病理的變化ヲ來タス。然シテ同  
 疾病ノ初期ニ脈管性甲状腺腫ノ起ラザルモノハバセドー  
 氏病ニアラズ。眼球突出ハ時ニ全ク起ラザルコトアリ假  
 令ヒ起ルモ遅キコトアリ。

グレーフエ徴候、震戦、軽度發汗、顔面潮紅ハ初期徴候  
 トシテ要用ニ心臟悸動ハ常ニ存ス。

猶同氏ハバセドー氏病ハ甲状腺腫張ト心臟悸動ノ併發シ  
 タルモノトセリ。氏ハバセドー氏病ヲ三種トス

### 第一 脈管甲状腺腫

### 第二 膠樣性甲状腺腫

### 第三 バセドー氏甲状腺腫

一部切除、甲状腺動脈結紮等ニヨリテ良好ノ結果アリ。  
 同氏ハ説ヲナシテ曰ク甲状腺ガ或ル他ノ關係ヨリ非常ニ  
 過度ニ働キタルノ結果自家中毒ニ陥リタルニアラズヤ  
 甲状腺ヲ切ル時ハ多數ノ血管アルト甲状腺細胞ノ著明ノ  
 發達ト、甲状腺近部ノ淋巴腺ハ常ニ腫張シ且血液ノ検査  
 ヲナス時ハ淋巴細胞ハ多數ニ増加シ居ルヲ知ルベシ白血  
 球ハ寧ロ減少。只淋巴細胞ノ増加ハ甚シ

バセドー氏病重症ナル場合ハ甲状腺ヲ切除シタル後ヨリ  
 検査スル時ハ腺細胞ハ全ク欠除シ居ルガ如クニシテ沃度  
 ノ少量ヲ含有スルカ又ハ含有セヌコトアリ。併シ膠樣性  
 甲状腺腫ニ有リテハ、甚ダ多クノ沃度ヲ含有スルコトヲ  
 知ル

手術ノ前ニハ磷酸曹達一日二、〇—一、〇、〇内服可、  
 手術ノ消毒嚴重且手術ハ可及的速ニナス。即逡巡ノ間毒  
 素ノ吸收セラル、慮アルニヨル。是レニハ上部甲状腺動  
 脈結紮ハ可ナリ。(伊藤抄)

漫 録

○字 き 草 (都の人に)

薔 薇 公 子

序

翠の帳、紅の閨のうち戀人の琴の如き小さき玉手にのせらるべき歌に侍らむかし。春は歡樂の花雲、秋は晶明の天津空に高うかゝる無弦の琴はわがすがきに候。優になつかしく、したはしきは大自然の力とこそ知り侍りしか。未だきびわなる頃にや、掌合せたむとらて西の方極樂浄土を祈りしまゝの夢に栴檀の香木に迦陵頻迦のとまれるを見て祖母上を聲を限りに咽元までよべる事こそあれ。醒めての後の語り草には汝がいつくしき眉してわか膝に居凭れる、あまりに心なきなう、なごめる様のいとほしくて、かくやあらましと笑ひ給ひしも今尙心にどめられぬ。あはれこひしきは生命なりけりと存じ候、幾年かはた幾年の葎のさだめなき身のつゞきは末如何に及ばんとすらむ。胸にはありと知られし琴の緒の古きをわぶとし

にはあらねども、ねもひは何となう嘆きの古沼にひぢけむ心地侍り候。げにやレモンの花さく南國の騷人をまねばんに、切に嘆かるは、悲しき時に其かみの樂しさを思ふ事にころ候へ。今しも愚かに記憶の糸を小田巻に繰りかへし、かくは水莖のあと果敢なく行く水になき名を忍が、むに本意こそなけれ、胸に得て胸に秘めしものゝやがては歌にのぼりし名無草、花さくもまゝよ、枯れなばまゝよ、とわが甘とせあまりの榮として參せ申候。想へば日に追はれ、月に驅られて、遠く昔は逝にけりな、やがて人恥かしき若うどの心に蒔かれし戀草や、歌は戀に、愛は歌にと、情の園のくさくもこそあり候はめ。さいへ古りしは卑しき戀、新しきは聖き神、拾四の無邪氣と十七の賢者振と十九の戀との過ぎし世は闇中の犠牲たれ、願ふは來ん世の強き光明に眩惑たらざれ、而かも身も世も永久の命につながれこそぞ。

さらば。

花一つ靄のうちよりほの見ると君こゝろみむ日になれるかな  
わがなげき海永劫に高浪の琴緒を張りてすがくといふ  
紀伊の國柑子の影に乙女子と語りし思へ夏の夜の月。  
白鷗磯回よざりぬ其后に無心の眼して沖見る人よ。

濱の風はつれかゝげて沖を見る朝髪の人と夢語りゆく。  
 春雨の足音可愛ゆしうなゐ子が訪ひよるごとく門に降る  
 かな。  
 其名こそ知らでありけれいろがひの片戀なりや白き花咲  
 く。

あれ歌ふ、これや聞ゆる、山の旅草刈唄の主はいづく  
 ぞ。

慢心に袂つらねて夜も出で月に誇ると怨じける女よ。

面はゆしかゝる路にて君も又あへなし何をのがれ家とせ  
 む。

天日に面えむけず夜に入りて小さき春の月見て語る。

夜戸出こそ癡れたれ心飢ゑにさとかごとがましくわれね  
 びしかな。

夜は月晝は伏眼の人をつれ、空華咲く野邊をさすらふと  
 かや。

つれなき男、執ねき女とすならびゆく人幾つれや野らの  
 春風。

夜の二階ものなど讀めるさゝとゑをあくび交りに聞きて  
 更けゆく。

紫の小傘がくれに夏の野やほの見て居れば白き花さく。  
 春の戸を櫻しきりにうち散るを家なる子等よものを歌へ  
 な。

女さかし笑てふ弓に媚の矢しぬ、男かへさの心まどこへや。  
 白粉や、臙脂や夜の香にたゞよひる柳櫻の朧の夜の路。  
 嬉しさに思はぬ方に歩をむけて許さぬ心見られけらしな  
 東雲の鳥ならなくにわか心早く歌ひぬ君を見しとき。  
 春七たび返りぬ花の夢拾ひ乙女なりて人を待ち居る。

夕ながめ一日は終の別ちもひ一日は來ん世の常春うかぶ  
 前髪に去年のまねして花ささむ、花さすとても君笑はめ  
 や。

女てふ百千の鳥やまたしても喙み來る香具の大樹に。

姫は今琴の終れり灌木の廣きみ庭を眺め給ひぬ。

夕まぐれ暫しは人の名を訪はで細戸まつまの蟋蟀の聲。

人を見てのどかになりぬ例へなば花は梢に安するごと。  
 嬉しさの言云はでもよ契りけむあいなのだのみも春の夜頃  
 や。

ぬも堪へすわれにぬかづくろの眉根、その黒髪を犠牲に  
 だにすと。

光あれ、暗あれ神のつくれりし萬象の中に戀はなりけり。  
 あがほとけ思はぬ中に見出でぬと朧月なる樹の暗の聲。

戀碇君を待ち得て帆をあげぬわか生涯の海に浮ぶと。  
 柔き脈たつものど手握りやあゝ總身に花咲き匂ふ。

曙の海とも見つれ君が頬の波紅に相搏ちしとき。  
 夜の花ほのに匂ひるさまにして君をぬすめば心おのこく

若うして知りしならねど紅玉の唇秘むる黒髪の家。  
とこしへにかくあれ雲は天空を海は地を捲けわれをろだ  
てい。

金翅鳥雲を唾ばみ曙の巢をこそつくれ日出でんとす。

羅針盤心のうれをいましめむ何處の海に君を指すべき。

沈丁花曉のほごは夢を守れ、夕のひまは髪に香を吹け。

八重環環東ねし情もてわれ等が生は捲かれけらしな。

思ふとや非すとやいふわかうどのさかしら口に心あざみ  
ぬ。

黒き死の花に眩きわか心摘まんとしたり冥府の岩床。

億萬のうちに神なし一人の胸の愛より養はれて來ぬ。

若かりし世や思出の八千草に乱れし花のいたましきか  
な。

鳥の名も知らず千種の花に名も負はず若く來ける今日  
かな。

勇ましく千引の岩を曳きて來し剛者かあらず戀に勝つ  
み。

眼光らせ黙してのみう何かせむ砂漠のみゆく人にあらね  
ば。

垢域の土わが貪瞋癡を埋めなむ塚のあれかし秋の風ふく  
あゝ鐘鳴る、日は周章げに落ちてゆき遠方空に夜ころ喚  
び居れ。

君に二尺さりて鶯聞くものか空たぼれしてあるべきもの  
か。

永劫の暗の御座に星ませり小さき誇の我は地にたつ。

かゝやかに瑠璃の空照る夏の日や、此野また見ず、君を  
憑まず。

目を放つ野邊も御空も青のべて影追ふらしき白き雲ゆく  
地は俯して天を仰ぎつ衰のうちに抱ける我にあのゝく。

瑠璃の宮事やあるらし天地のあはてげ秋の乱葉をして。  
びたひたと春の水ゆくわか胸の岸に花咲くたけなはにし  
て。

雲は今白き翼をひるがへし野ゆき水こぼ日の宮へゆく。  
行く雲や流るゝ水や野にたてばわか肩をさる初夏の風。

路遠み愁何處ゆひきて來し日は秋に伏し人も通らず。  
愁とみに忘れ兼ねて思出の小さき泉にくみてころ居れ

晝の笑み執ねき情にもほほはす溺れんとしぬ春の夜の星  
泣きぬとて燃々にし灰の殻なれや雲吹く風のおとなひも  
なし。

伏目にう見給ふるれに壓されける雄力何處あざみよべど  
も。

夕づくの眼さしたの戀とこそ始めて地の二人照せれ。  
荒吹雪天の扉はこぼたれて地の百日は冬盛なり。

眞百合君に添はましかなはずは神の台にひとり待たま

し。

高空や遠海廣野はてもなく風のゆくごと君思ふかな。

白き日の幻追へば天かそも囁き聞きて君に樂しむ。

狩り暮れて冬の日ざしに風さむく落葉林に角の音聞く。

木枯や萬象のかぎりを滅ぼして残れる己か靈をふくかな

一片の枯葉落つごと思ほぬず涙す戀の嵐の後に。

瑠璃空の秋を響かしたましく梢けづりて葉落ちてく

る。

胸にすむ鳥の名知らず君も見て終日花を啗はみて居る。

夢の門に淡くも君は立ちてあれ逸り羽うちて疾くよばま

しを。

くごと友を唄ぶ白鳩のちとなしう思なく摘む愛の花草。

美しき日よ樂かる幸の月さて來ん年を言ひ難んずる。

いと小さき世界ありける此處に又若き願う短かゝりけ

る。

あざれ心再びよせ來洪水に堤したまへ小さきみ胸に。

夜の寂若きが妻のいと細き息びきに勝る誇りあらむや。

「物とはむ」「誰や」「使女」「さらばよし」櫻美々しさ

薄月の路

あとなしう地に抱かれ花咲きぬ、君に教ゆるこゝらの時

よ。  
時計鳴る、かねての時よ今花に歩める月に誘はれてや來

る。

花散らむとす、社頭漸く人薄れいざりの足に春の日の落

つ。

驚破來る、眩しき眼もて君探し警戒若う鐘を唱しぬ。

高く澄む空にリボンをそよがせてあれ來給ふよ初夏の風

銀の琴をしらべて泉湧き姫の寝るてふ百合の花床。

刻み足君は笑み來るあら懶迦鳴くよ薔薇咲く野邊の幻。

黙しては樂しきものよ目語り心化粧に春をくらさむ。

春の風君は袖ふり水見れば魚鱗ふるとはやされにけり。

眼しひてはまるふ小兎山を出て戀の花野をゆく物語。

戀語り面はてりして何といふ人にや知らずまことかわか

ず。

ぬすみ足わとこそ双眼蔽ひやりぬらしろの人よものな言

ひそね。

鬢そくけ瘦せたる人よ室咲の花の影にて秋の琴弾く。

梅の王宮居深うてそらだきす此の如月は戀する月よ。

雨晴れて花咲く時ようかへば春風君が髪にそよげる。

白菖蒲髪にかざしてしめやかに語る夜なり軒に雨ふる。

内心のいましめろれも何かせむ君が乱打の鐘ひびくと

さ。

躑躅影五ツ計りの子をつれし昔の人をかくれ見しかな。  
連翹や硝子戸越しに蝶ゆくを見つ語り居る人妻の影。

悲きつゝ地に抱かれ人戀ひぬ若き力のいざなひにして。  
 胸の草焼けぬいらだつ烟して息しもあへず君をながむ  
 る。  
 息づきてこの一塊ひとくれの土にだも咲かなば君に贈らむとする  
 花。

夏逝きぬ隣の國の武藏より雲の使に雨をそほ降る。  
 雲とびて世は秋となる湖にたちてしづかに物思ふかな。  
 深林に木蛩こたむ響かせ歌の聲、玉杵の音と初秋の風  
 地は眠り夜天の燭の星蔭に靜かに歌ふ讚美歌の聲。  
 天地のうちに憂の鐘を鳴る、其處に生れしわが心なく。  
 一樹の蔭のゆくりなう君にしたしめり殊に若きが性なる  
 かして。(以上百十首舊作)

\* \* \* \* \*

會 報

○特別會員動靜錄 (次第不順)

○飯森益太郎氏 醫學の趨勢は滔々として日を逐ひ月に

進みて底止する所を知らず、見聞を廣め智識を新にせん  
 か爲に直接と間接とを問はず我校に關係を有する士にし  
 て西歐に學ぶ者前後幾許人、通信雜報時に紙上を飾り競  
 ふて讀了せしむるものありと雖、未だ彼地の消息を盡く  
 して細大漏さず電めて餘す所なきものに至ては蓋し飯森  
 ドクトルに如くなきなり、幾多の雜觀幾多の旅行記面目  
 躍如として錦上花を添へざるはなく一として大に後學子  
 弟を裨益せざるなき、ドクトル今や歸朝、八月一日より  
 從來の場所を擴張して再ひ業を開き治を乞ひ診を需むる  
 者常に門に滿ち、前途洋々正に春の如きものあり

○土田久三郎氏 中軍醫先きに磐手乗組被免佐世保海兵  
 團附に轉せしが、三野中軍醫には今回同團附被免磐手乗  
 組に補せられたり

○越野義三郎氏 日露戰役中縣の希望を容れ特に金澤病  
 院婦人科を辭し石川縣衛生巡視員兼技手に轉せられ、日  
 夜東奔西走殆んど寧日なく精勵頗る縣下衛生に貢獻する  
 所多かりしが、今回十月廿一日附を以て石川縣技師に任  
 せられたり

○清水秀夫氏 工兵第九大隊附なる氏には一等軍醫職務  
 心得被仰附基隆要塞砲兵大隊附として去七月二十日當地  
 出發全廿七日無事着臺せられたるが、暑氣は内地も想像  
 する程なく凡ての進歩發達の狀當地を凌ぐものありと云

へり(追記、改正令により基隆重砲兵大隊附となる)

○久保武氏 韓國京城大韓醫院教育部解剖學教授として先きに愛知醫學專門學校教諭を辞し、暑中京都醫科大學に在りて病理學を研究せられつゝありしが、去る九月五日京都出發赴任の途に上り十一日京城安着の報あり、創設の事とて何も無き由なるも萬事好都合なりと云ひ、宿所は左の如くにして當分病理學教授をも兼ねらるゝと云ふ

京城南山町二丁目二十番地九號

○諸角友平氏 凱旋後郷里鳳至郡宇出津町に於て再び開業、門前常に市を爲す光景なりしが、去八月愛妻を亡はれたり、衷情誠に察すべく爰に深く吊意を表す

因に氏は松浪と號し松原三郎(鐵腸)久保武(輪濤)兩氏と共に本誌創刊の任に當り拮据地盤を作り經營基礎を堅め本誌の今日ある亦三氏か勞に歸する所多しとす

○北豐吉氏 戦局未だ戢らず、折から歸朝、直に召集軍務に服せられつゝありしが出征將士の凱旋するや萬般の設計殆んど其創意に成たる陸軍神戸檢疫所に在りて理想的檢疫事業を全ふして令名あり、戦後市立大坂衛生試験所長となり愈敏腕を振はれ、今回宏壯なる新築所舎に移轉せらるゝ前途の多望また以て慶すべし

○島田吉三郎氏 金城療病院内科主任として令聞あり、

囊錐の器人をして其の韜晦の狀に少なからず全情の思ひに暮れしむるものありしが、先きに診斷學講師をも辞し房州に轉地療養せられたり、さるにても此の人にして此の疾ある眞個嘆又嘆の至りならずや、切に加養快癒を祈る

○岡本京太郎氏 金城療病院の重鎮として創業以來絶えず一汎開業醫の弊習を逐はず孜孜として學に篤く懇切丁寧常に怡々として嬰兒の如かりし氏には、去八月西町尾崎神社向(舊藥館の跡)にて小兒科専門を以て獨立開業せられたり

○木村博士 蒙古來る北より來るの語は泣く兒をして止めしむるの力あり先生來る大坂より來るの聲は知友子弟をして欣舞其慈顔に接せんことを希はしむるの徳あり、先生には展慕の爲め令室同伴八月十六日來澤、翌夕山の尾に於て晚餐會あり、集ふ者三十、山田(孝)發起人の揆に應へて云く「來る毎に厚き御款待を忝ふし御禮の申様も御座いませぬが斯る御手厚き御懇情を思ひますと來られずには居られませぬ」と、語簡にして意味深長温情まことに掬すべきものあり、而して先般「南區鹽町一丁目三十番地」に移られたるが、育英の傍ら需に應じて自宅診療をもせらるゝ事となれりと云ふ

○時國良作氏 能州鳳至郡西時國村に開業既に年あり、



今回業務擴張の爲め病室並に診察所を新築し大に發展の道を講せらる、又樂からずや

○八牧政孝氏 去九月金澤病院内科部(細菌主任)を辞し郷里珠洲郡上戸村(飯田附近)に於て開業せられたり

○羽根田信次氏 歩兵第卅五聯隊附なる二等軍醫には、曩に木村博士(本誌第廿六、廿七號登載)を傳して衆評嘖々一世の推稱する所となりしが、此度博士が高弟故東良平氏を傳して縱横す所なく之を不朽に傳へ之を后昆に垂れて人をして其遺風を瞻仰せしめらる、願くは地下の英靈また正に瞑するに足るべく、之を傳ふ洵に能き人を獲たりと謂ふへし、軍醫にはかねて鵬志の熟するものあり、期年ならずして歐山水清き處日夕研究の人たらんとす云ふ、欣羨の至りなる哉

○増田貞吉氏 第九師團軍醫部々員なりしが此程一等軍醫職務心得被仰附歩兵七聯隊附に轉補せられたり

○田中一次郎氏 金澤病院外科一部勤務の傍ら外科學及皮膚病梅毒學講師として精勤の評ある氏には、去八月十九日笠糸橋に身を堅め草鞋脚絆に足並勇しく八田氏外一名と共に能州行脚を試みられたるが、道程赤毛布的滑稽を演せられたること不尠と云ふ

○齋藤義雄氏 陽春四月東京大學皮膚病室を辞し翌月吳市東本通天章堂に赴任して専ら皮膚病泌尿生殖器科診療

に従事せらる、本號載する所の一篇切に讀者の再讀を勸む

○林篤氏 佐々木内科醫員として又藥物學講師として衆望の歸する所、春暮令閨を迎へ伉儷殊の外纏綿たるものあり、今回島田吉三郎氏辞任の爲め診斷學講師をも兼ねられたるが篤學なる小原病理と共に眞に雙璧の觀ありと謂ふへき也

○小川教授 八月下旬以來脚氣と肛圍膿瘍の爲に自宅引籠靜養、日に宮田教授の診療を受けられしか目出度快癒の上九月二日より出校せられたり、褥中八田助手に送られたる文中左の如きものあり、以て教授か實驗的疼痛に對する所感の一端を窺ふに足るべし

宮先生云々中々に面白し余は痛に就て嘗て説けり此般は皮膚のイタミ筋のイタミ粘膜のイタミ健時のイタミ病的のイタミ麻酔劑後のイタミ藥液のイタミ器械的のイタミ曰く何曰く何其 *qualitas* と其 *quantitas* とを實驗したり他日尙此以外のイタミを實驗するの機を樂むものなり(マツにあらす).....

仰臥五週竹庵居士を偲ひけり

吾家のカンナテオナの音よりも

香林坊の太鼓かしまし

而して宮先生云々とは宮田教授が所謂「小川さんは痛い

居士は故近藤醫學士  
仰臥三年の著者

三

四

五

六

七

八

のてなくて痛がりである」この語を傳へたるに依るものにして、そか邸宅は長町一番丁五番地なり

○八田智証氏 荒れすさびたる雪をれかして東良平氏の葬儀に參し、車中同行の上田宮田兩教授並に藤井島田の兩氏と「此次は誰の番だ」など寂しさ餘る某教授の言に花を咲かして歸られたるか、幾許もなく病床の人となり仰臥十週欠勤前後約一百、山崎教授が温き治療により七月一日より出院執務せられつゝあり、八月田中氏と共に能登一周をなし體力恢復程度試験を爲されしが、頃日山田(孝)氏に致されたる書中左の一節あり……………「世には太く短きあり細く長きあり而も小生の如く細く短くは一向物にならず候其上囊中無一物と來ては餘生を食るも亦一苦痛に候……………迷句あり―地上地下六尺の身のいぢらしき―人間様の威麗尊嚴なる生きては地上六尺を出てす死しては地下六尺を入らず殘生を貪り殘屍を藏む樂其裡にありとでも申すべきや之も「ノイロ」のせいかなれ共一に「ノイロ」と御速斷被下候は深く痛む處に候……………

- 今回陸軍軍醫學校に入學せられたる本校出身者左の如し
- |          |      |       |
|----------|------|-------|
| 歩兵第三十五聯隊 | 一等軍醫 | 竹下麗三郎 |
| 歩兵第十七聯隊  | 一等軍醫 | 佐伯亮齋  |
| 歩兵第一聯隊   | 二等軍醫 | 藤 溟 謙 |

第一東京衛戍病院 二等軍醫 太田長作

工兵第九大隊 二等軍醫 春田久太郎

廣島衛戍病院 三等軍醫 吉田幡誠

歩兵第三十六聯隊 三等軍醫 英 軒 二

右の内太田氏は專攻學生として赤十字社病院にて内科を修むへく(エハケ月)、他の六氏は普通學生として入學せらるゝものなり、

因云赤十字病院醫員には他校出身者多く、我校出身には僅に宇敷元氏勤務せらるゝに過ぎすと云ふ

○福岡喜洋氏 市立櫻木病院醫員なる氏には今回細菌學講師として兼務せらるゝことゝなれり、敏達にして有爲なる、前途括目して見るべきものあらん

○早瀬三求氏 歩兵第七聯隊附一等軍醫職務心得なりしが今回歩兵第六十九聯隊附被仰付る

○高桑勇次郎氏 歩兵第三十五聯隊附三等軍醫にも全しく六十九聯隊附被仰付る

○小西俊三氏 戰役中豫備二等軍醫として留守第九師團軍醫部々員となり事を理する頗る精整召集解除後淺野川病院呼吸器科主任として理想的診療に其第一歩を進みつゝありしが今回就職を許され歩兵第七聯隊附となられたり

○林京次郎氏 曩に三年兵役を終へて醫に入り、金澤病

院調劑部員として勤務中、會々戰役に際して三等藥劑官となり北韓よ屯せしが昨年七月凱旋して高岡診療院に在り、今春東氏の逝かるゝや再び金澤病院に奉職、今回就職を許され敦賀衛戍病院附被仰付たり

○北川光雄氏 東京醫科大學整形外科勤務中なるが、今夏田代博士に隨ひ富山縣下に尙僕病調査を爲し、博士が第八回北陸聯合醫會並に石川縣醫會總會に各一場の實驗的演説を試みられたるに當り共に出席し、旅程二週無事歸東せられたり

因に全科には助手として丸山(村田)讓氏勤務せらる  
○永江直之氏 今夏私立山田病院を辭し能美郡小松町字本折にて開業せられたり

○鳥誠郁氏 來春融雪の候を俟て市内石屋小路(故中川啓次氏跡)に於て開業せらるへしと云ふ

○高伊三郎氏 三等軍醫には弘前より更に野戰砲兵第十七聯隊附(下總市川町)に轉せられたり

○谷澤一郎氏 歩兵第五十六聯隊附三等軍醫には滿洲守備軍配置變更と共に公主嶺より遼陽に移られたるが今回鐵嶺衛戍病院附被仰付たり

○松村魁氏 戰役中疾病の爲め后送歸還、次て台南衛戍病院附に補せられたる二等軍醫には初夏東京第一衛戍病院附となり、當地を過ぎり華岡の典を擧げ東上せられた

るが今回輻重兵第五大隊附一等軍醫職務心得仰付られたり

○菊地文岱氏 初夏の候秋田縣雄勝郡幡野村字金谷に於て父祖の業を嗣き開業せられたるが、恬澹素懷頗る衆の愛敬する所となり、加ふるに金澤土産として令闈當さに第二の慶を擧げらるべしと云ふ、只近信に依るに「開業以來未だ目醒しき事も致さず開業醫の体裁練習の外餘念なく候」とは氏が謙遜の辭と見るべきものなり

○上野忠氏 去六月外科一部を辭し函館横山病院赴任、幸にも大火災には前夜他に轉居したる爲め病院共々其慘害を免れたりと云ふ、而も焼失したる他の病院等より一時に患者集來し非常の多忙に惱殺されたりとは左もあるべし

○秋野定吉氏 客臘來外科二部勤務の處去九月辭職歸郷せられたり

○鷺山他三郎氏 凱旋後或人の勸に任せ能州鳳至の里に開業せられつゝありしが、去四月下旬突然勝脱出血(?)を爲し外科部入院外來既に半歳を経るも尙全治するに至らず原因亦不明なるに予醫を學ひたる身の憂の種子なる哉幸に頃日頗る可良、其治療を止むるの期も何れ遠からざるべしと云へは又慶せざるへからざるなり

○加納景成氏 昨夏富山市諏訪河原町に於て耳鼻咽喉科

専門を以て開業、日尙淺しと雖氣焔中々當るべからざるものありと云へり

○横井嘉亟氏 召集解除後郷里に於て廣く診療にいろいろ所あり、今春東上、九月より青山内科に勤務せらる

(以上病餘生記)

○柴原氏 特別會員たる柴原外男氏は先般神戸縣立病院眼科に奉職せられたり

○駒井氏 特別會員たる陸軍二等軍醫駒井定哉氏は先頃鳥取歩兵第四十聯隊へ轉勤せられたり

○佐野氏 特別會員たる佐野爲明氏は曩に補充輸卒として應召輜重兵第九大隊へ勤務の處先頃滿期除隊の上郷里富山縣小杉町に於て開業せられたり

○上田氏 特別會員たる上田茂氏は大坂東區今橋三丁目一番地胃腸病院に勤務せらる

○平原氏 特別會員たる平原雲新氏は鹿兒島市西千石町二百五十三番地舊赤星病院跡に於て眼科専門にて開業せられたり

○片山氏 特別會員たる片山良作氏は富山市南田町田上眼療院に奉職せられたり

○山本氏 特別會員たる陸軍三等軍醫山本幹雄氏は滿洲に勤務の處先頃歸隊現今名古屋第三師團軍醫部に勤務せらる

○森田氏 特別會員たる東京慈惠院醫學專門學校教諭森田齊次氏は今般小石川區竹早町三十四番地へ轉居せらる

○赤倉氏 特別會員たる赤倉喜久雄氏は今般東京淺草區馬道町一丁目三號三十三番地へ轉居せらる

○毛利氏 特別會員たる毛利德基氏は東京帝國醫科大學藥學教室に於て研究中

○屋富祖 特別會員たる屋富祖德次郎氏能美郡白峰村に於て開業の處先般沖繩縣病院醫員兼醫士教習所教員を拜命勤務せられたり

○久保田氏 特別會員たる久保田保次氏は東京帝國醫科大學に於て研究中の處先般歸國目下福井市錦下町に於て眼科専門にて開業せられたり

○吉住氏 特別會員たる吉住保氏は東京帝國大學醫科大學皮膚病科に於て専ら研究中現今東京本郷駒込區西片町十番地はノ二十一號峯岸勘造方に住居せらる

○富田氏 特別會員たる富田寛氏は昨年歩兵第二十七聯隊へ一年志願兵として入營の處先般除隊目下札幌逸見病院に奉職せられたり

○長村氏 特別會員たる長村義一氏は山田病院へ勤務の處先般辭職一旦歸郷の上先月頃より岐阜市岐阜病院へ奉職せられたり

○滿洲在勤軍醫の動靜 特別會員たる陸軍三等軍醫山

下飯吾氏は今般奉天歩兵第四十聯隊第三大隊附に轉隊せらたり尙同州煙台には二等軍醫石橋四郎氏鉄嶺には三等軍醫谷澤一郎氏遼陽には三等軍醫佐々木純一郎氏勤務の旨山下軍醫より通信ありたり

### ○叙任及辭令其他

金澤醫學專門學校長醫學博士

高安 右人

賜二級俸

金澤醫學專門學校教授

山 碯 幹

三級俸下

金澤醫學專門學校教授

櫻井小平太

金澤醫學專門學校教授

金子治郎

五級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

村上庄太

七級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

石川喜直

八級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

高山基重

十級俸下賜

金澤醫學專門學校助教授

金原三郎

四級俸給與

六級俸給與

金澤醫學專門學校助教授

林 常 雄

(以上六月七日文部省)

金澤醫學專門學校教授從六位

高山基重

叙勳六等賜瑞寶章

(以上六月三十日賞勳局)

金澤醫學專門學校教授

上田計二

細菌學上取調ノ爲上京ヲ命ス

(以上七月十五日日本校)

金澤醫學專門學校助教授

林 常 雄

藥用植物採集トシテ加賀國白山地方へ出張ヲ命ス

(以上八月一日日本校)

金澤醫學專門學校教授從六位

上田計二

陞叙高等官四等

(八月十九日內閣)

加藤 靜 雄

講師ヲ囑託ス年手當金九百圓給與

(以上九月二日日本校)

金澤醫學專門學校履

安達 友 直

自今月俸金拾四圓給與

金澤醫學專門學校履

崎田誠四郎

自今月俸金拾六圓給與

助手ヲ囑託ス(手當金ナシ)  
(以上九月十六日本校)  
俵 他喜三郎

福岡 喜洋

講師ヲ囑託ス(手當金拾五圓給與)  
(以上九月十九日本校)

金澤醫學專門學校書記

増野 與三九

八級俸給與

(以上九月二十七日文部省)

河合 義文

入學志願者選抜試験數學科試験委員ヲ委囑ス

宮川 熊三郎

入學志願者選抜試験漢文科試験委員ヲ委囑ス

西 英盛

入學志願者選抜試験物理學科試験委員ヲ委囑ス

林 竝木

入學志願者選抜試験英語學科試験委員ヲ委囑ス

八波 則吉

入學志願者選抜試験國語學科試験委員ヲ委囑ス

教授 高山 基重

化學科選抜試験委員ヲ命ス

助教授 金原 三郎

獨乙語學科選抜試験委員ヲ命ス

教授 宮田 篤郎

入學志願者體格検査醫員長ヲ命ス

副手 堀田 圭三

齊藤 房治

鳴脚 光榮

村山 常三郎

丸谷 熊二郎

芦澤 孝治

入學志願者體格検査醫員ヲ命ス

(以上六月二十日)

教授 佐々木 遼

醫學科第四年級々長ヲ命ス

教授 宮田 篤郎

醫學科第三年級々長ヲ命ス

教授 上田 計二

醫學科第二一年級々長ヲ命ス

教授 石川 喜直

醫學科第一一年級々長ヲ命ス

教授 櫻井 小平太

藥學科第三年級々長ヲ命ス

教授 高山 基重

藥學科第二年級々々長ヲ命ス

助教授 林 常 雄

藥學科第一年級々々長ヲ命ス

(以上九月五日本校)

醫學得業士

奈 良 八 郎

校務ノ都合ニ依リ眼科學無給副手ヲ免ス

(以上九月十一日本校)

教授 佐々木 達

教授 村上 庄 太

教授 高山 基 重

本學年間懲罰委員ヲ命ス

教授 櫻井 小 平 太

教授 村上 庄 太

書記 高柳 鎌 次 郎

物品檢閲委員ヲ命ス

(以上九月十六日本校)

陸軍二等藥劑官 高 多 久 正

補由良衛戍病院附

(以上六月十日陸軍省)

東京第一衛戍病院附陸軍一等藥劑官 橋 本 安 吉

免本職山口衛戍病院附被仰付

(以上六月六日陸軍省)

休職被仰付

(以上六月二十四日陸軍省)

近衛歩兵第三聯隊附陸軍三等軍醫

免本職補鐵道大隊附

(以上六月二十八日陸軍省)

海軍少軍醫

休職被仰付

橫須賀海軍病院附海軍少軍醫

免本職補大湊要港部附

(以上七月一日海軍省)

橫須賀水雷團附海軍大軍醫

免本職補音羽軍醫長

(以上七月三日海軍省)

海軍々醫少監

補海軍水雷學校軍醫長

(以上七月九日海軍省)

海軍少軍醫

海軍軍醫學校練習學生被仰付

(以上七月十一日海軍省)

七級俸下賜

臺灣總督府醫院醫員

鐵道大隊附陸軍三等軍醫

吉 田 東 秀

竝 河 權 六

佐々木 辰 實

長 井 運 男

武 田 正 壽

鈴 木 寬 之 助

小 出 貞 次 郎

高 柳 元 六 郎

高 柳 元 六 郎

文官文限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ス

(以上七月七日臺灣總督府)

臺灣守備步兵第三大隊附陸軍三等軍醫

小原德太郎

免本職補臺北衛戍病院附兼臺灣守備混成第一旅團司令部

步兵第六十聯隊附三等軍醫

內海定男

附 免本職補步兵第六十四聯隊附

(以上七月十八日陸軍省)

近衛野戰砲兵聯隊附陸軍三等軍醫

下村義二郎

步兵第七聯隊附陸軍三等軍醫

江藤潤一

步兵第三十五聯隊附陸軍三等軍醫

松井源長

步兵第三十六聯隊附陸軍三等軍醫

朝倉重敏

免本職韓國駐劄軍司令部附被仰付

(以上七月二十九日陸軍省)

步兵第七聯隊附陸軍二等軍醫

吉井康次郎

免本職補步兵第三十六聯隊附

陸軍三等軍醫

木下節三

近衛步兵第四聯隊附被免

步兵第三十一聯隊附陸軍三等軍醫

高伊三郎

免本職補野戰砲兵第十七聯隊附

陸軍三等軍醫

松原氏獻

步兵第八聯隊附被免

(以上八月一日陸軍省)

兼補高雄軍醫長

音羽軍醫長海軍大軍醫

武田正壽

(以上八月八日海軍省)

第九師團軍醫部部長陸軍二等軍醫

增田貞吉

免本職步兵第七聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

(以上八月二十七日陸軍省)

金澤衛戍病院附陸軍二等軍醫

瓜生尹重

免本職補第九師團軍醫部々員

(以上九月二日陸軍省)

陸軍三等軍醫

永井學造

廣島衛戍病院附被免小倉衛戍病院附被仰付

(以上九月七日陸軍省)

陸軍一等軍醫

澁谷孝慶

補臺灣步兵第一聯隊附

陸軍三等軍醫

佐野愛二

補臺灣步兵第二聯隊附

弘前衛戍病院附陸軍一等藥劑官

市村鐵外

免本職補韓國駐劄陸軍倉庫附

(以上九月十六日陸軍省)

臺北衛戍病院附陸軍三等軍醫

小原德太郎

兼補臺灣第一守備隊司令部附

(以上九月十四日陸軍省)



步兵第一聯隊附陸軍二等軍醫 藤 浪 謙  
 免本職步兵第一聯隊附一等軍醫職務心得被仰付  
 (以上九月二十八日陸軍省)

音羽軍醫長兼高雄軍醫長海軍大軍醫 武田 正 壽

免本職 佐世保海兵團附海軍中軍醫 三 野 賢 吉

免本職盤手乘組被仰付 海軍中軍醫 伊 藤 顯 德

免葛城乘組補海軍工機學校附 騎兵第十三聯隊附陸軍三等軍醫 小 町 環

免本職騎兵第十三聯隊附被仰付 (以上九月三十日陸海軍省)

弘前衛戍病院附被免補工兵第八大隊附 陸軍三等軍醫 齋 藤 賢 德

東京第一病院附被免輜重兵第五大隊附一等軍醫職務心得 陸軍二等軍醫 松 村 魁

被仰付 (以上十月二日陸軍省)

○新入學者 本年本校に於ける入學者は醫學科入學志願者四百五十人藥學科三千九人の内より去る七月體格検査及學術試驗により撰拔の上醫學科へ百十人藥學科へ二十

六人入學を許可せられたり其族籍氏名を左に記す

新瀉	全	山梨	新瀉	山形	福井	福岡	大阪	三重	島根	新瀉	福井	長野	京都	静岡	福岡	山口	富山	香川	岐阜	岐阜
佐藤 進	坪井 清澄	寺本 於菟男	三國 範三	小泉 與四郎	平泉 泰藏	松尾 整	秦 正胤	寺尾 敬三	廣兼 育三郎	加瀬 順之助	南部 健一	中原 德彌	加藤 末吉	楠野 末太郎	島中 勝壽	戸澤 和一	小泉 義久	篠原 治良	高橋 壽朔	豐田 今吉郎
富山	長野	奈良	新瀉	福井	鹿兒島	岐阜	群馬	福井	大阪	愛媛	長野	富山	石川	石川	全上	山形	兵庫	長野	新瀉	石川
東堂 久範	室賀 哲太郎	大中 貞治郎	小林 龜之丞	宇賀治 元造	益滿 行豐	大野 雅譽	中澤 百祐	井土 又吉	武田 良海	村上 仲太郎	松田 武千代	阿波加 德次郎	渡邊 八之進	國田 武雄	菱川 瀧太	池口 道夫	楠田 利一郎	延川 靖	米山 健	棚田 喜久雄

富山	住田立	岐阜	垣内昇	全	武内勉二	新潟	古山忠順
茨城	仙波宏造	三重	星合二郎	埼玉	清水憲策	福岡	豐田銳
富山	沖爲次郎	富山	阿波加憲吉	京都	富永富久三	北海道	石川清治
奈良	中堀孫一	愛知	中野亮之	福井	畑千尋	岐阜	中島十作
福井	鈴木忍	富山	米多外男	石川	志賀以寛	福井	吉田稔
新潟	川上操一	兵庫	小島隆義	全	荻原忠	愛媛	高橋房太郎
香川	馬場稠	富山	廣瀬竹次郎	島根	田村實	埼玉	竹越太三郎
石川	村松純吉	三重	藤井藤太郎	石川	大武罔治	京都	磯田昇平
德島	岩瀬國義	滋賀	高畑伊平	廣島	田邊光	福井	三上儉治
長野	田中嘉一	石川	栗本保身	奈良	片岡正雄	石川	池上豊
新潟	小俣幹翁	全	島田靜男	山口	黒川實助	石川	滿田光規
三重	駒田作之進	滋賀	重森平一郎	大阪	奥野源治	静岡	米元正雄
埼玉	加藤信作	三重	中原重吉	以上醫學科			
愛知	大脇彌平	岐阜	横田議助	長野	住山伊衛	鳥取	大村政太郎
石川	内藤一郎	石川	廣田賢藏	山形	五十嵐健太	愛知	後藤重彦
愛知	荒川修藏	新潟	井澤篤治	大阪	川崎幾左右	石川	柴野昇
三重	岩間定雄	埼玉	新八郎	香川	森尹賢	福井	田中退三
高知	安澤一清	愛知	淺井泰雲	東京	松崎鐵五郎	富山	横江宇三郎
秋田	湊久助	長野	若槻芳隆	石川	大島時	愛知	牧野新之丞
石川	大場市男	京都	西川佐吉	香川	和泉松次郎	東京	井上廉太郎
富山	小西眞清	新潟	島津最澄	石川	御影藤太郎	大阪	笠上由松
福井	的場周造	大阪	高橋義直	廣島	深瀬源造	富山	多田實

岡山	安藤 千秋	山形	柳町 茂家
新潟	林 精一	石川	鹽谷 直作
石川	岡部 千太郎	愛媛	矢能 孝次
福井	宮 川 濱	富山	栗山 周作

以上藥學科

○最近三年間に於ける入學志願者

	醫志願者	入學者	藥志願者	入學者
三十八年	三七六	一三〇	七一	二七
三十九年	三九六	一一七	四〇	二七
四十年	四五〇	一一〇	三九	二六

○新入學生諸君を迎ふ

入學の報を得し諸君が心はいかなりし乎、物みな喜びの色に輝き、聲すなはち賞賛の響に通ひしならん、九月初旬いよ／＼鹿島立ちの曉は父母の情に名残の袖を露ほし少時の別れを山河に惜み給ひやしけん、諸君を待つ可く金澤は燃ゆるが如き炎威を沈めて北海清涼の風を送り、公園の樹葉は綠陰を形つて逍遙の領となりぬ、入學の榮を負ひし醫學科一百十七名藥學科二十六名の諸君は東より西より北上の瀛車に投じ尾山城下の夢いまだ新らしきに九月十日の宣誓式は本校濟々堂にて開かれつ、是

に於て諸君はM A 旗下の健兒となり、また我等が至親の友として未來の行動と運動とを共にすべく廣き世の一團となれり

此日校長は本校學生として暫くも忘るべからざる訓戒を諭され式は終りぬ

願者諸君勿半途蹉跌、自己及び國民としての見地より精勵せられんことを。

○始業式

九月十一日第二級以上の各年級は各級々長より服膺すべき個條を訓諭せられたり、之より多望なる新學年は始まり尙ほ深き科學の殿堂はその一扉を開きて縱横探るに任せんとす。

○十全會々報

明治四十年九月五日

十全會理事ヲ委囑ス

十全會雜誌部長ヲ委囑ス

十全會講話部長ヲ委囑ス

山 碕 幹

宮 田 篤 郎

上 田 計 二

十全會ロンテニス部長ヲ委囑ス

金原三郎

十全會弓術部長ヲ委囑ス

村上庄太

十全會劍道部長ヲ委囑ス

高山基重

十全會柔道部長ヲ委囑ス

石川喜直

十全會學術實習部長ヲ委囑ス  
明治四十年十月十六日

小川勝陳

十全會雜誌部委員ヲ委囑ス

雜誌部委員ヲ委囑ス

松田菊治  
宇野益之  
加藤靜雄  
小原芳雄

十全會講話部委員ヲ委囑ス

佐々城清臣

十全會學術實習部司療醫ヲ委囑ス

小原芳雄  
鴨脚光榮

三木榮末

十全會學術實習部調劑司ヲ委囑ス

醫學科第四年級

伊藤哲一

全 全

池部正鑒

全 第三年級

津田次助

全 全

山本直枝

全 第二年級

森田圓磨

全 全

鈴木英男

全 第一年級

寺本於菟男

全 全

三岡範三

藥學科第三年級

瀧澤忠一郎

全 第二年級

中山富次郎

全 第一年級

井上廉太郎

醫學科第四年級

酒井碩治

全 全

廣瀨淵龍

全 第三年級

長井敬孝

全 全

小野澤庄桂

全 第二年級

黒田孝夫

全 全

近藤益成

全 第一年級

小泉與四郎

全 全

平泉泰藏

藥學科第三年級

吉野積三

講話部委員ヲ委囑ス

全 第二年級 中村重好  
全 第一年級 柳町茂家

醫學科第四年級 鳴脚光榮  
金子義長

全 第三年級 高儀京治  
全 第二年級 杉谷外之助

全 第一年級 益滿行豐  
岩田利三郎

醫學科第三年級 三野泰次郎  
全 第二年級 牧野新之丞

全 第一年級 田中三彌  
本仙太郎

醫學科第四年級 絹川義温  
全 第三年級 米多外男

全 第二年級 關戸辰次郎  
全 第一年級 大橋太一郎

醫學科第三年級 大村政太郎  
全 第一年級

醫學科第四年級 影山清美  
中川善松

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

醫學科第四年級 醫學科第四年級

ロンテニス部委員ヲ委囑ス

劍道部委員ヲ委囑ス

弓術部委員ヲ委囑ス

柔道部委員ヲ委囑ス

茶話會委員ヲ委囑ス

全 第三年級 茨木忠俊  
全 第二年級 角田真一  
全 第一年級 島中勝壽

醫學科第三年級 宮野侍之  
全 第二年級 田中儀一

全 第一年級 田中退三  
醫學科第四年級 吉川友信

全 全 佐竹秀一  
全 第三年級 北村裕壽

全 第二年級 志村猪藏  
全 第一年級 原直壽

醫學科第三年級 廣瀬玄哉  
全 第二年級 矢能孝次

醫學科第四年級 岡勝重  
全 第三年級 國吉真才

全 第二年級 奥山義盛  
全 第一年級 牧田泰

醫學科第三年級 坪井清澄  
全 第二年級 西原純一

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第三年級 醫學科第三年級

醫學科第四年級 加藤健之助  
 全 全 伊藤哲一  
 醫學科第三年級 松村光一  
 全 全 津垣直吉  
 醫學科第四年級 酒井碩治  
 全 第三年級 吉田正謹  
 全 第二年級 中村喜太郎  
 全 第一年級 佐藤進  
 醫學科第三年級 大岩小一郎  
 全 第二年級 楠本晋平  
 全 第一年級 徳山伊衛

代議員ヲ委囑ス

小關 教 政

十全會劔道部師範ヲ委囑ス

楠 正 可

十全會弓術部師範ヲ委囑ス

藤 善 稀 雄

十全會柔道部師範ヲ委囑ス

小川 勝 陳

十全會茶話會委員長ヲ委囑ス

山本兵三郎

十全會茶話會委員ヲ委囑ス

山本兵三郎  
 崎田誠四郎  
 高柳鎌次郎  
 安達友直

十全會書記ヲ委囑ス

### ○振風會の創立

本年五月十全會講話大會に際し校風振肅の一手段として振風會創設の宣言をなし太田、佐口両君が本會に對する説明と共に吉田宗一氏が發起者を代表し朗讀したるもの今全會の承諾を經主旨書の全文を掲ぐ

#### 振風會創立趣意書

近時學生の風儀頽廢せりとの非難は社會一般の風評となりて少からず學生の品位を害ひつゝあり何が故に然るか、由來浮言流説は多く信憑するの價値なしと雖も直接吾人に利害關係ある這般の流言に至りては白刃を舉げて吾人に肉迫するもの豈默過するに忍びんや。

吾人不幸にして此の論点の中渦に立てり社會の觀察誤まれるか、吾人學生の品位實際に低下したるか之れ深く

究むべきの問題也

然れ共この研究に先ち風評の根源を探索するは病根を治するに適切なれど諸君既に眞想明案の賢者なるが故に吾人茲に警せず

試みに思へ日本幾十万の學生は其數に於て決して少しとなさずかの不良者の下に一を算し千方に五を算するが如きは輕卒なる判定を全般の上に與ふべからず之れ解し易き疑問にして最も人の陥り易き弱点なり破戒の僧一人出れば全宗教界は腐敗せりと罵り一人の收賄官吏を出せば直ちに官海溷濁を叫ぶ如く世人は罪惡の批判に於て飽くまで積極にして善行に對し最も冷淡に看過するを

然り而して文明の光は日に益々輝き教育の道は邊陲の濱に及び人倫道德の要旨は至る所に講せられて學生の品行爲今昔相若かざるの理を誰れか常識の耳に聽かん然りと雖も事實は之に反せり悲しむ可き哉此に於て吾人は自ら品位開拓に務め社會の風評をして惡聲に換ふるに賞辭を以てせしめざるべからず之れ吾人が今日諸君に謀る所以のもの也

吾人は北陸に於て最高の學府にあり從て社會注目の對境となり些少の缺點が事々しく彼等によりて非難せらるゝは亦免れ得ざる所なり諸君は往々本校學生に對する世評の頗る慊らざるものあるを聞しならん是れ遠き過去に

於ける本校組織の狀態が未だ確立せざりし當時青年客氣の輩が比較的の自由なる行動をなせしにやらんか而して誹謗は後裔たる諸君と吾人とに輪廻す何ぞ不測の禍なるや然るに近年校規整然として張り學生は全國の雄を抜くに至り着々として校風發揚の曙光は北天に朗かに今や社會は本校の眞價を認むるに至り専門學校の旗幟は將に幾段の光彩を放たんとす之れ我國教育制度而して直接に諸先生の黨育に基けると學生自己の自治自尊の道義的精神が各個の胸裡に閃き期せず相率ひて純乎たる校風を形りしものたらすんばあらず之れ最も喜ぶべき現象にしてまた尤も慎重に保育せざるべからざる發芽の時季なり嘗て社會に印象せられたる妄評は吾人に何等の痛痒を感せしめずと雖も之を好評に換ふるは容易ならんや、失墜せる名譽を光榮となすは容易ならんや、然るに吾人は挽回の勇を振ひて成効に近からんとす、若し一步を過まつて自ら戒むるを忘れん乎九轉直下光明は忽焉暗中に消へ去りて再び点するの法なけん振風會此に於てか起る

本會は四年三年の主唱にして全校の學生を網羅し相共に戒めて誤ちなからしめ逆境に陥れる友を救ひ風聞の主義に反するや之を諫め之を正し飽くまで穩當の方法を以て覺醒し忠告し偏に學校の處罰以前に改善の實を擧げしむるにあり、人誰れか過なからんされどその過は最も親し

き友によりて正さに正路を踏まざらんと欲するもうれ得んや實に吾人の理想とする所は全校の一大兄弟團が融合して校風の振興に力め罰則は一の空文となりて本校規則中より削除せられ金澤醫學專門學校學生の品位を最も高潔ならしむるを得ば吾人の目的は達したるものと云ふ可く而して之れ學校の名譽なり學生が國家に奉つるの道也終に臨み吾人は本校教官諸先生が自治の權を吾人の上に許し効果の顯はるゝ日を靜かに期待し給はん事を冀ふ

明治四十年五月

振風會發起者一同

右發起人

醫學科第四年

吉田宗一 佐口榮

赤尾肇三 太田勘市

高野宗重 岡田秀三

中村欣一郎 高木琢磨

佐藤武 野村義雄

醫學科第三年

吉川友信 田中三彌

酒井碩治 金子義長

關根平 池部正鹽

加藤健之介 岡勝重

宮村誠一郎 才田猶次  
中川善松

醫學科第二年

小野澤庄桂 山本直枝

平野郷次郎 佐々木茂樹

宮城篤珍 高儀京治

佐竹秀一 天野彦次

佐々木龜次 米永勇作

醫學科第三年

津田弘

醫學科第二年

上遠野興作

○四高に於ける我校の

來賓競漕を觀る

傍觀生

尾山城下の櫻花既に散り綠影いとこく大野河畔菜花今をさかりと黄金の色を競ふの時我校招きを四高の端艇會にうく

舵手 紅(醫三、四年) 白(醫一、二年) 青(藥學科)  
西 宇忠太 山本直枝 高 保二



整調	吉川友信	小野澤庄桂	三野泰二郎
五番	金子義長	絹川義温	日下部秀太郎
四番	吉田宗一	近藤時男	村垣梅市
三番	中川善松	高儀京二	瀧澤忠一郎
二番	赤祖父廉三	角田眞一	松永清一
舳手	宮村誠一郎	杉山貞二	荒井倉三郎

コース 三 二 一  
艇名 千鳥 隼

赤白青の各三艇の猛烈なる漕手オールを手にとりスタートラインまでつきぬ其の間聲援者の歡呼のさけびのもとに送られぬ、

舵公號砲今を遅しどツイを握りて待ちぬ、忽ち轟然一發天にひびくや三艇共に滑り出でぬ、スタートに於ける赤ピッチ卅六白青共に卅九を引き三艇共にスタートの力漕を以て競ふ赤最も美事にして他二艇は始めよりあせり氣味であつた、見る／＼赤は白青の二艇を抜く事一艇身餘なりき白は青をぬく事半艇身であつた三艇その差を保ち漸くこぎ第二ツイに近寄りぬ此の時紅は二艇身餘の差を以て先鋒に進み白青之れに従ふ、白青は非常なる乱調となり益々狼狽し赤は能くピッチを乱ださずこぎ第二ウエを通過するやスタートをかけ約三艇身半抜きスローに移りぬ、約四百五十米突許り来るや白

青は少しも漕法にかなはず乱調は益々甚だしくなり漕手は皆疲勞し殊に白艇にオールを流したる失態ありしを見うけたり之れに反し赤艇は猛烈なる精銳の漕夫だけあつて實に美事であつた

さて赤艇は燒場の邊に來ると整調は十八番の猛漕を起し各漕手も之れにつゞく此の最後の力漕は非常に功を奏し見事六艇半の差を以て目出度ツイニングラインに躍り入りぬ、

### ○一中に於ける我が校

#### 來賓競漕を觀る

五月十日金澤第一中學校の短艇會に招待をうけ廿一名のボートメンと余と粟ヶ崎の會場さして行きぬ、

舳手	金子義長	高保二	田中三彌
整調	磯貝一篋	吉川友信	山本直枝
五番	雨宮孫一	宮城篤珍	絹川義温
四番	赤祖父廉三	吉田宗一	近藤時男
三番	山崎虎治	重松威勝	中川善松
二番	今井篤	石川玄知	角田眞一
舳手	武者素行	宮村誠一郎	谷道清

コース 三 二 一

スタート共に見事滑り出でしも百五十米突の頃紅白共に差なく青半艇身の差にて後方より来る俄然茲に於て紅白二艇接觸し其際青よき機會にがさじとステアーデをかけ抜き一着となる總評とて別に記す程の事なければ是れにて筆をとめぬ、

### ○縣下各校に於ける我が撰手

學高く術難きが故に日夜研鑽の机邊離れ兼ねるを、世は我等の意氣を疑ふ、誤まれるの甚しきや、隻手劍を執り他手笛を握るの風流はなく共、一度び成書を閉ぢて起ち、中原に呼號すれば、見よ、勝利の神は常に花環を我が校選手に捧ぐるなるを、いまその勇名を譽れの空に掲げむ

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 師範 (五月十七日)  | 一着 副田 實成  |
| 全 (全)       | 二着 山田 茂樹  |
| 商業 (九月二十九日) | 一着 金子 義長  |
| 松任農 (十月四日)  | 一着 金子 義長  |
| 全 (全)       | 三着 高儀 京治  |
| 二中 (十月七日)   | 一着 中村 喜太郎 |
| 全 (全)       | 三着 金子 義長  |
| 工業 (十月十三日)  | 一着 中村 喜太郎 |
| 一中 (十月十六日)  | 二着 高儀 京治  |

師範 (十月十九日) 一着 中村 喜太郎  
 ○明治四十年十月二十日第二回庭球部大會の壯快なる記事は斯界のオーソリテイ金子君が麗筆を振つて奮闘の現況を詳述せらるべし

#### 痛惜山本長助君

君本釜口氏 繼爲山本家養嗣 石川縣鳳至郡阿岸村人 明治三十七年卒業後 在於金城病院 本年六月辭職歸故鄉山水間 偶人事不任意 終求永生天界而去。  
 君爲人温厚寡言崇信西教年二十有八可惜夫噫今秋風落葉雨淚落青燈下。

高島一二三君は新潟縣三島郡出雲岬町の人明治三十七年本校を卒業し、自宅にて開業中、不幸病魔の襲ふ所となりて、後年の發展を青苔の牀に埋む、時は四十年五月、行年二十八 謹んで吊す焉

# ○故東良平君

羽根田鬼佛生稿

▲東良平君竟に逝けり、一たび姑蘇に去りて復歸らず矣。悠々たり越洲三百年、陳跡たゞ高岡城端、寂寞として秋草に向へば、石上の青苔人を思殺す、痛嘆す、良平君去りて蕭條、悲風千里より來る、君が訃音の我が寓居に到れるは、春色暮れむとして落暉惆悵、半宵の細雨將に濃紅淡白を飄零し去るの時、檐前の蛙行く春を怨みてう鳴くらむ夕なりき、黒梓の端書を机上に奪ひたる刹那の我れ、愕然として驚き、悄然として恐れ、脈絡の呼動は波瀾の如く。倉皇狼狽爲す所を知らず、睽瞍として傍にはべる給仕のボテ蔓が、『何事にて候』と、怪しみも錯愕の我れ、潛伏して應へざるもの久しかりき。

▲『いづれゆく道とは兼て聞きしかど。昨日今日とは思はざりしを』、瘦骨稿然たる我が身なほ生きながらへて、強健鐵石と較ぶべき君先づ逝かむとは思ひがけきや、明治四十年三月十八日、高岡の城端、一基の墳塋、君が遠大なる志望を空しく埋めつくしぬ。雲影低く曳いて霏雨蕭々、ありし世の姿やいづこ玉だれの雫となりて空も悲しみ、新らしく彫まれたる『故陸軍二等軍醫從七位功五級東良平之墓』の文字を涙と滯らす、噫、年々の春色誰か

爲にか來る、爛熳たる櫻雲之は又忽ち摧けて血を吐く杜鵑の一聲、いと哀れを添へぬ、嗚呼悲哉。

▲何人も死しては惜しまるるを常とすれど、君の如く、何人にも惜しまる、は少かるべし、君が人に惜しまる、所以のもの、抑も又何の所以や、君が一期三十有五年間、五尺の身材を一世の狂瀾に操りて、邁扞直進、宛も利刃を振つて亂麻を截つか如く、胸懷寬厚、常に繚亂たる桃花を藏するか如く、到る處として、萬人の推重敬愛を享けたるは何の故や、而して遽然病魔に據りて催傾の計を傳るや、四方考妣に喪するが如く、悲痛哀惜する者、抑も又何の故や、君が雄才大略、氣宇一世を震撼するの概あるを以て乎、あらず、君が謹嚴剛直、學識時流に卓越するの故あるを以て乎、あらず、從容閑雅の風采ありて乎、抑も恬靜寡言の資質ありて乎、あらず、恭謙乎、穉落乎、あらずあらず、はた何もの乎、曰くあり矣、桃李言はず焉、いでや蹊を踏むで渺茫たる隴圃の裡に之を探らむ哉。

▲我れ之を古賢に聽く、人の世に處する維れ信、維れ誠なれば、天下之く所として適せざる無きなりと、味ふべき哉言や、二心無き之を誠と謂ひ、欺かざる之を信と謂ふ、至誠は神の如く鬼をも泣かしむ、信義は安寧を得幸福を伴ふ、然り至誠信義何人も之を慕ひ、何人も之を口



級五功等六勳位七從醫軍等二軍陸故  
君平良東

にす。然れ共之を行ふものに至りては甚だ少し矣、見よ  
滔々たる現代、誠信を以て一生を貫く之士、又何處にか  
ある、誇大に非らずむは則ち虚偽、虚偽に非らずむは則  
ち阿諛、汚濁世を擧げて鬼聲啾々たる者に非らずや、噫、  
竟に之を如何にせむ。

▲諸悲むを止めよ而して哭する勿れ、夫子教ふべき顔回  
あり、予は成竹己に定れり矣、胡哉東良平君乃ち之なり。  
自ら蹈晦して其鋒を現はさず、一見遇直にして爾も踟躕  
なく誠を以て世に處し、信を以て人に交はるの士、予は  
之を君に於て初めて見るなり、高雅清鮮、蘭柱となりて  
摧くるも蕭艾となりて存ぜざる至誠は、君に於て初めて  
見るなり、交りの道に二あり、一を心交一を面交と曰ふ、  
斷金莫逆を以て友に在むの信義は、君に於て初めて見る  
なり。宜なり君が才略も、學識も、風采も、一拳手一投  
足も、凡て維れ誠、凡て維れ信、胸裡些の虚偽なく雲翳  
なし、故を以て天下に敵無く萬人推重す、吁嗟至誠は千  
金の鼎よりも重く、信義は金石の硬きよりも堅し。  
▲東君を以て、流麗婉轉、縦横の長廣舌を以て、滿堂の  
聽者を恍惚たらしむるの雄辨家なりと謂は、予は之に  
左袒せず、君は寧ろ敦朴寡言、任俠を持するの隱士たれ  
ばなり、然れども眞摯なる大雄辨家なり矣、少くとも端  
然寰宇を睥睨して。鳴かは即ち坤輿に鳴くの大雄辨家な

り、何を以ててか謂ふ、見よ、至誠の一語は、人の肺肝  
を貫く、一たび唇を出づれば、必ず丹心決行を意味す、  
據て頼むべし、食言せざるなり、寧ろ縦横の多辨を要せ  
むや、一の實行は百の多辨に優る、君の寡言を以て、叱  
咤雲を呼ぶの雄辨よりも優れる大雄辨家なりと斷するは  
即ち維れなり、眞摯なる雄辨は、メツタに鳴かず飛ばず、  
鳴けば即ち感人矣。飛ば、即ち動天矣。

▲東良平君竟に逝く。年齢正よ三十四、人生五十に比し  
て短きこと幾年、人は君を以て早折せりと嘆く、予は之  
に左袒せず、君は寧ろ福壽千年、少く共龜鶴と齡を較ぶ  
べき長壽者なりと信ず、何を以てか謂ふ、見よ、子道を  
説いて千年、骸軀己に烟滅すれ共、萬世の後尙千の盜跖  
を恐怖せしめ、孟子賢を以て逝く、千載の後尙百の藏倉  
を驚嘆せしむ、聖賢逝いて道長へも残り、無窮に傳へて  
益々殷なり、誰か聖賢早折せりと云ふや。君の誠と信と  
は儕輩の模範なり、後進の師表なり、青年の墨繩なり、  
凡夫予の如き者にして、三更袴を蹴つて君の神靈に接し、  
眼を閉じて君の温き琴線に觸れたるの刹那、胸懷湧くが  
如き歡興を感受して、何物かを待たるか如き心地す、君  
は暝せり然れ共君の貴き靈神は千載滅びず、世と人と俱  
に寰宇に活躍せり矣。誰か君の壽を以て早折せりと云ふ  
や。

▲豊頰よして眼光奕々。口邊楚髮を貯へて身材魁偉、膏力人に絶して悠々擱歩するもの。維れ君の風貌にあらずや。靈界に於ける君は壽千年なり矣、然れ共風貌に於ける君は己に早折せり焉、世は春の夜の夢なれや、身は維れ槿花一日の榮を待たで、昨夜半宵の細雨に濡れて、草葉の卑露とは化しぬ、今はた呼べども、再會の期無き永別の悲愁、易水寒ふして風蕭々、悲痛何ぞ耐へむや、予は纒經を衣て地に伏す、哀れ庶羞の奠となし、君來りて此哀號を鹽げよ。

(一)

▲君の訃ありて後、ろの憤壁に哭すべく先づ嚴父を高岡に訪ひさ、停車場より右に櫻馬場を過ぎて、横新町に到れば邸宅あり、幾株の松樹厦壁を距て、帚根砂上に波の如く、翠陰寸埃無し、今は陸軍々醫正醫學士小林茂氏、君の經營を襲いて病院を開かる、數輛の腕車と十數の患者は、診を需めむとて待てり、堂屋の宏壯燦爛朱壁の麗なきも、輪奐の美、構造の大、そゞろありし昔を忍びては先づ腸を斷つ。

▲病院の隣り。さゞやかなる路次を繞りて刺を通ずれば、迎へて座に召されける東君の嚴父、寄る年波は五十に近き清癯なる骨格、眉間に皺を疊みて來意を問はる、忝しく東君の訃を吊ひけるに、嚴父の双眸早くも悲雲棚

引きぬ、如何にせばやと心を痛めつ、一語又一語、さまざまに慰めたれど、懷恨胸にや迫りけむ、語先づ啞して慘雨兩頰を濕しぬ、諸君乞ふ聞け、愀然として嚴父の唇を出たる一語を……『良平の事ですか、子を賞めるのは異な者ですが、悴のやつた事に今日迄、悪いと思つた事は一ツもありません』……一語何等の明晰をや、子を見ること親に若かざる嚴父の一語、明確に君の生涯を説破し盡したるもの、『悪いと思つた事』一ツもありません』再びす、一語何等の精透をや、此親にして此子あり、一句洗練して人を思殺す矣、徐洵語り終つて歎歎前の如く、予も亦暗涙を禁じ能はざりき、嚴父名を七之助氏と云ふ。

▲君に遺子二あり、長は六歳にして光平君、次は一歳にして二郎君、呱呱産聲を擧げてより、秀蘭丹桂玉の如し、生れて吞牛の氣あり、今や父を失ひて且暮に思慕す、試に『父上は何處に』と問へば、哀れ長君丹指を示して、寂寞たる城端隴圃の傍ら、悲風袖を撲つたる冷き墳壁を指しぬ。座に二郎君慈母の懷にありて眠れり、何に餓へてや突如として一聲悲しく哭しぬ、未亡の人は蒼皇蕾の如き愛子の口に、其白き乳房を啣すなり、七之助氏嗚咽して曰く、『思ひを此二兒の行末に及すごと、膏味も爲に喉に下らず』と、『悴が獨力一家の産を盡して經營したる

事業も、俄の災に忍ち挫折して、……』後は涙なり、嚴父の言々人をして熱殺す、之をしも斷腸の種となさずむば何をか言はむ、遺兒を思ふて美醜を欲せざる東一家の哀嘆はいかに、一族の支柱を失ひて悲愁困憊に泣く遺族の煩悶はいかに、感胸に溢れて手は以上を語る能はず。

▲墓前を訪ふべく隨ひたる途すがら、聽き得たる行事の片々を語らむか、君は明治六年七月、越中國東礪波郡北盤若村字吉杉(俗に盤若の郷と云ふ)に生る、家農を業とし富むにあらず、然れ共七歳にして小學の門に入るや、聰明儼畫を抜きて常に級の首席を占む、考試の度に賞を受けざるることなく、就中文書を善くして奇童の評あり、家に歸れば克く遊び克く戯れ、時に家人擾撫の花弁を掠折し、家器を破壊し、頑是なき腕白、家人を泣かしめたること幾時、然れ共又早天曉を破つて山河に奔り、群童に將となりて戰爭漁游遠足等を事とす、偶々漁に獲る者あるも君の指願を待たざれば、群童の恣に之を別つこと能はざりき、君の一擧一動群童又之に習ふ、噫、後年の大星は、實に此昆岡より起りて、嫩葉の裡已に群を抜きて薫し。

▲盤若村を去る里餘。春島村に富豪某氏あり、君一日例の如く大矢部川に漁游の後、襪襪に等しき衣を着し、足に破れたる草履を穿ち、瓢然家を出で、歸らず、日暮家人心を痛めて探れ共君を見ず、苦悶夜を輾して翌朝よ及

ぶ、何ぞ計らむ、八歳に滿たぬ垂髫一見慘憺たる無名氏は、富豪某子の校友を訪ふて、碧瓦宏壯の大廈に安眠し、食前方丈の珍珠に飽き、悠悠欣然として歸り來りぬ、窮兒氏更に身幅を飾らず、錦繡の友を訪ふて恬然里餘の遠きに行く、嚴父は此大膽の行爲に舌を卷かれぬ、蓋し君が一片の虚榮なき天真爛熳は、先天的天稟の感受性ならむか。

▲君が日露戰役より歸りて、『東病院』を經營するや、門前患者市をなす、越中に『博士小木村』の現出を見る、宜なり近傍の外科患者、以先生之治療不治者、死而尙爲本懷也焉、手術の妙伎、一世を壓する者あり、患者を待つに至誠、市人に對して信義、親に事へて至孝、定省怠るなく、父子淳篤相愛して緘介の間無し、噫、今や此人逝けり、……談半にして足は墓前に停りぬ、白楊已に辭して落葉離々、香煙縷々墓標に昇りて愁情切なり、蕭然として尊崇の念を起し、三拜涕泣して久しかりき、

(二)

▲明治二十五年盤若の郷に潛みたる蚊龍、池中を出で、金澤に來る、英悟正に十八歳、第四高等學校に醫學を修め、道に入るや精勵群に卓して、鐵中の錚々を以てクラスは君を推重しぬ。二十九年逸氣潑刺優等を以て校を卒へ、金澤病院に醫員たり、學校に講師たり、一轉して陸

軍に志願兵たり、動員して戰地に醫官たり、凱旋して郷里に院長たり、這般に於ける君の經歷に就て、予は傳ふべき多くを知れり、予は之を田上涉氏に聞けり、之を北川健三氏に聞けり、之を大澤五月氏に聞けり、之を田中市次郎氏に聞けり、藤井亥之吉氏に聞けり、之を三木恒男氏に聞けり、君の長官野口詮太郎氏に聞けり、君の恩師木村孝藏氏に聞けり、予は辭禮の何たるを知らざる愚直を以て、猥りに刺を通じて光りある君の後進知己先輩長官恩師に、洵なく君の經歷を聽かむ事を請ひしに、之は又響の聲に應じて歸するが如く、筆に口に争ふて君を賞讚し、机上忽ち積むて一卷を爲す矣、予は諸賢の情誼に厚きを深く感ずると共に、予は之を以て少く共大なる誇となす焉。

▲書生時代の君。眞摯にして敦朴、清麗にして儉素なり。故に貨利を顧みず、群小を近けず、友の寓居を訪ふ者あらば、則ち迎へて學を談じ術を語り、議論風發時の移るを知らず、然れ共嘗て友人に一腕の茶を饗せず、友の需むるあらば則ち起ちて厨に至り、宿主(當時笠間家)に乞ふて、大なる飯茶碗に一杯を盛りて來る、敢て婢僕を煩はさず、座に歸りて談論舊の如し、嘗て絹布を纏いたることなく、間食を爲したることなしと、噫現代幾千の書生、就中手を叩いて婢に酒を命ずる書生さん、金繪の茶器を座右に据へて綺羅を誇る書生さん、まつた美服を着

して學資にのみ注ぐべき金を、あらう事かあるま事かいに費す書生さん、東君を顧みて正に愧死すべし。

▲君常に謂つて曰く。學資は維れ父兄の肺肝より出たる熱涙なり、學資にのみ用ゆべし、只にのみ限られて用ゆべしと、平凡の一語翫味し來れば何等の痛快や、嘗て佳話あり、同宿の某氏(今は陸軍一等軍醫)、雷雨の夜書に倦みて君の書室を伺ふに、座右一盆の万頭あり、氏戯れて曰く珍らしき哉此佳品雷公爲に轟くと、君笑つて曰く今日郷里より従弟來れりと、氏膝を叩いて曰く夫子辭禮を解せり矣、従弟來らば則ち學資を抛つて饗す焉、君舉手遮つて曰く此佳品従弟より我れに贈りたるなりと、二人呵呵大笑す。

▲一佳話あり、在學中研學の志厚く、眼を洋書に晒し眼を惜みて勉學す、當時醫學の原書類る不廉なり、一寒生の克く購ひ得べき者ならず、君煩悶一策を籌して忽ち膨湃たる醫學全書を手にす、友大に驚く、蓋し君の醫書を羨望するや、苦悶して某氏に奔り辛ふじて數十金を得、長日月間の月賦を特約して購ひしなり、何々夫れ志す所額脱にして、行ふ處の高潔なる、庸人の得て窮脱すべからざる者あり、眞に之れ爲嗜慾戒一錢之浪費、爲志行抛萬金而不吝、古賢人の赴きあらずや。

▲校内鐵中の錚々たる者、嘗て矯風會を組織し、君一方



の重鎮たり、東奔西走諸友を游説す、徳普くして校内の風紀大に刷新す、偶々某寺に寓するの時、院主非禮の色に耽る、君苦諫すること再三にして改めず、則ち怒つて寺を去れり、以て人と爲りを知るべし。

▲君の校院に職を奉ずるの日、頗る勤勉夙に起きて外科室に精研し、終日推蠶星を戴いて家に歸るを常とせり、屹々として手巻を離さず、汲々として倦まず、鞠躬尋繹、他の遠く及ばざる所なり、明治三十七年、日露戦を開くや、君高岡病院を抛つて、勇躍國難に當り、第九師團第一野戦病院に屬して出征す、陣中拮据雖勉終に殊勳を奏す、時の長官野口病院長に就て、君の勳績を聞きしに、氏は欣然左の如く語られき。

(三) 野口院長談

▲明治三十七年五月十一日、第九師團動員下令と共に、第一野戦病院附仰付られ、待命間は第二區隊附として、應召下士以下の教育に任じ、且戦用諸品の受領委員を補佐して、山の如き諸材料の授受を些の遲滞なからしめ、殊に看護長以下の教育に就ては最も力を盡し、爾來下士以下の勤務上、敏活周到なりしに、實に當初の教育與つて力あり。

▲七月一日尾山の新緑に別を告げて、同十九日宇品を後に渺茫際りなき海に遠征の纜を解き、二十五日順風恬波

早くも舟は清國「柳樹屯」に着しぬ灼々燒くが如き炎熱を冒して、長驅して二十七日安子嶺の戦に参加し「岔溝」に野戦病院を開設し、急遽初陣の慘を盡しぬ、前方に衛生隊の作業する者なく、彈丸雨注の危險を冒して、敵に接近して開設するの止を得ざるに出で、傷者は殆ど戦線の救護地、若くば假綑帶所より直に後送したる者にして、病院の作業は茲に衛生隊と病院の業務を合併せるが如く當時敏劇の狀實に名狀すべからざる者あり、二晝夜間全く一睡の時なく、染血に塗れたるまゝ、手術室に握り飯を喫し、銳意奮勵二日にして實に六百六十八名の傷者を處置せり、豈驚嘆に價せざらむや。

▲八月二日「周家屯」に轉進、手術室及發着部を擔當し、患者の後送を計畫して實効を奏し、八月十九日「盤龍山」の激戦に際しては「長春菴」に開設し、二十三日戦況に依りて第一半部は別れて「王家甸」に轉進するや、君は止りて第二半部にあり、當時の高級醫官三木恒男氏と僅に二名となり、内外科の患者并に外來患者の診療を擔任し、君は専ら外科的治療の責任を一身に荷ひ、精勵愈々加りて九月十二日に至る間、日數に於て二十日、僅々二名の醫官を以て、實に入院患者九百六十八名、外來患者一千二百六十五名を診療せり。

▲「岔溝」開設以來三十八年三月奉天大會戦に至る迄、大

小の戦闘に參與すること十數回、收容の患者七千五百名の多きに達し、其間毎に手術室を擔當して、精勵刻苦徹宵數日に亘るも倦むなく、毎回数百名の傷者を施術し、其術や精確敏捷、其伎や巧妙極致、毫も蹉跌なく困憊なく、衛生部員の本領を發揮して餘蘊なし。三十八年二月二日北進の途に就き、二十六日に到る迄大滿洲を横斷する大旅行を終へて、『遼陽』の北『大沙嶺』に到着、寒氣峻烈削るが如く、いぶせき土民の倭屋に起臥して些の怨色なし、二十八日より奉天會戰に参加し、殊に當時院長不在(第九師團軍醫部長代理を命ぜらる)の爲、外科術上の責任は一層重きを加へ、高級醫官又不在(第一野戰病院院長代理)の爲、院內事務醫官の業務を担当し、『北三臺子』に、『造化屯』に、實に寢食を忘れて精勵し以て任務を完ふせり、蓋し之に據り救急恢復したるの傷者は、幾千なるを知らず、寔に以て野戰病院業務の過半は、其勤務の勉勵と、施術の巧妙とを相綜給して大成せる者と云ふべく。其功績頗る卓越なり矣。

▲語り終つて長官、往事を追懷して綿邈禁ぜざる者の如く、……『惜しい事をしたねい』……君を吊ふ野口院長の一語極めて沈痛、院長の門下錚々たる君を失ふ、心中の恨事知るべきのみ、最後に匣底藏する處の履歷書を示さる、感慨悲愴紙背に徹す、噫。

履歷書

本籍富山縣高岡市新横町壹番地

第九師團第一野戰病院附陸軍二等軍醫 東 良 平

一、明治三十年十二月一日 一年志願兵入營

二、同三十一年十一月卅日 現役滿期

三、三十三年二月六日 陸軍三等軍醫

四、同三十三年三月廿日 正八位

五、同三十七年五月十一日 第九師團第一野戰病院附

六、同三十七年九月八日 陸軍二等軍醫

七、同三十七年十一月一日 從七位

八、同三十九年一月廿四日 召集解除

九、同三十九年四月一日 明治三十七八年戰役ノ功ニ

依リ功五級金鷄勳章並ニ年

金參百圓及勳六等單光旭日

章ヲ授ケ賜フ

(四) 木村博士談

▲曩時北陸醫界の木鐸として、名聲卓越、明治三十五年金澤を去りて大阪に到り、夙に萬人推重するの士、夫れ木村博士乎、先生由來至誠高潔の人、嘗て吾人は先生の校院を去らるゝに臨み、滿都の士女と俱に慟哭しぬ、君は博士の蘊に私淑すること多年、最も關係深き故を以て、君を吊ふに際し博士を煩して、經歷行事を聞かむことを

乞ひしに先生直に快諾し繁務を抛つて縷々數百言を寄せらる、八田氏と共に之を拜するに、言々皆維れ誠信肺腑より出で、昆弟を懷ふの情、紙上に溢れて聲あり、うたい羨望に耐へず、乞ふ之を語らむ、木村博士曰く、  
 ▲故東良平君を、簡單に表示する語を予に求めらるゝも、予は淺學にして之れを知らず、先づ今世の稀なる聖人なり、猥りに故人を賞讃するに非らざるも、眞に君には惡点なし、清廉なり、至誠なり、君のヘルツには一点の汚れなし、邪氣なるものなし、怨み若くは憎むと云ふ如き念なし、物事に拘泥せず、猥りに人と論争せず、……博士の眼に映じたる東君、冒頭先づ「稀なる聖人なり」と云ふ、「稀なる聖人」の一語、何ぞ立意の卓拔なる、一句にして簡單爾も全く君の生涯を適切に表示し得て餘蘊なきにあらずや。  
 ▲師弟の情、友誼の上に於て、至誠信義實に驚くべき者あり、予(木村博士)は昨年八月高岡市に至り、君の斡旋にて上等の旅館に宿泊し、出發に際し其支拂を爲さむとせしに、君は遮り止めて曰く、實は自宅に迎ふ筈なるも、茅屋なる故此館に案内せり、響する處の粗肴は則ち僕の先生に呈する處、待遇の如何は知らざるも、快く飲み快く食せられ、先生に一言ムマイと言はるれば、僕は眞個の愉快なり、夫にて氣が濟むなりと君は語りたりき、之

れ些事なれ共此一言は、實に君の肺腑より出る處、決して唇間や舌尖にて出るの語にあらず、此時の味のムマキ事は實に忘る能はざるなり、當時眞心を込めたる熱情に對して予は感涙せり、此熱情は筆舌に現はすを得ず、君の淡白なる飾なき生きたる語のみが、眞に此熱情を現はし得るのみ、予は其時之が君との永別の語ならむとは、夢想たもせざりき、爾も自然涙の出る程に予の心胸に感じたるは、所謂「虫の知らせ」にてありしか、呼噓、  
 ▲君は信義に厚し、予は君を信して或る時一身上の、一秘事を話せし事あり、而して君は此秘事を公にするも妨げなき迄、全く他言せざりし、君は確實の人なり、君に物事を依頼し又は命するに、凡て安神を以て爲し得たり、君も多忙の時は人並に頼まれたる事の實施を忘るゝ事なきにあらず、然れ共決して之を隠すことなし、尤も淡白に「あ、アレハ忘れた」と云ふ、其時の君の顔貌は如何にも憂苦に耐へざる者の如く、心配然たる氣の毒然たる態度は、善く君の眞心を現はし、オコル事も出來ず、却つて君の至誠に深き感動を起したりき。  
 ▲君は淡白なり、朴訥なり、言語談話は上手にあらず、寧ろ沈黙寡言なり、阿諛の言語舉動等毫もなし、又常に眞面目にして、猥りに喜怒哀樂の情を表に現はさず、面白き事あるも、愉快の事あるも大に笑はず、之等の性狀

は君を知らざるものをして、失敬な奴なごう、想ひ誤らしめたる事もありません、然れ共君は決して人を蔑視するが如きことなし、只稍無愛嬌の如く見へしは、唯一の君の欠点なりしか。

▲君は長者に對するも、妄りに首や腰を屈せず、之君は軍人的教育を受けたればなり、然れ共誰か知らん君の禮式は整然たる軍隊的の者にして、決して禮を知らざりしにあらず、實遮此無愛嬌と見做さるゝ如きは、開業醫として不適當の性ならむ、然かも君が開業は直に門前市を爲さしむ、之れ抑も何の故ぞ、故あるなり一言にして云はゞ君の徳の大なるに歸す、見よ君に交はれば交はる程快くなるなり、君のヘルツは清さが上に温きを加ふるなり、予は嘗て予が大阪に轉任の事を、君に初めて語りたる時、君が著く感動の情を現はしたる事を初めて目撃せり。

▲君は職務に忠實なり、學事に熱心なり、而して何事も決行するなり、然し凝りて極論に走ることなく、常に中庸を得たり、然れ共此熱心あるが爲に、時として不攝生の患者氣儘の病者を無遠慮に大聲叱咤することあり、之れ君の誠意慈心より溢る者にして、實に君は仁術の施行者なり、患者に對して猥りに祖母の孫を慈愛する如き、仁術を實施するの道にあらず、苦を強ゆる事あり、痛を

忍ばしむる事あり、則ち君は嚴父の子を教育するが如く爲せり、故に君を知るの患者は君の掬すべき温情に浴して、君を深く敬慕するに至りしなり。

▲君は沈靜にして物に動せず、之君が外科醫として最も適材たりし所以なるべし、又君は不拔の勇氣あり、之れ旅順攻撃の際に彈丸雨注の間に、拮据勉勵して其本領を盡し、終に殊勳を奏せし所以にして、人の知る處なり、實に君は我國家の殊勳者なり。

▲君の品行は極方正なり、花柳の巷を踏まず、特に凝りたる道樂なし、隱藝なし、嗜好なし、稍無趣味の感ある如きも、君は醫學と仁術の實施に熱中せしなり、喫煙せず、平素飲酒せず、然れども君は酒に對してイン、ムーンにして、何程飲むも酔ふと云ふ事を知らず、從つて

醉ふて亂に及ぶべき理由なく、從つて考ふるに君の生涯中、特記すべき失策談は殆ど無からむ乎。

▲君の學事に熱心なるは、職務に忠實なるは世の定評あり、故に學生時代の成績の可なりは勿論なるも、特別に卒業後は予の助手となり、一年一日の如く不撓なるを強を以て、専ら外科の學理實地を研究し、大に實力を養成せり、如何なる難手術も沈靜なる腦と、確實なる腕を以て行ふなれば、其結果は安神にして確實なり、予は君に信頼すること多し、予が金澤病院在職中著き瑕瑾な

りしも、實に君の補佐宜を得たる爲なりとて、大に之を謝したるは、君が私立病院の開院式の祝辭に際し予の誠意を以て述べたる處なり。

▲予が金澤病院在職中、沃度エーテル注射療法なる者を案出して、今や此療法は外科的結核諸病に對し、良効を奏しつゝありと云ふ一事は、本年の日本外科學會に於て報告したるが如し、當時此療法の研究中、或は動物に試験を行ひ、或は病理的研究をなし、終に之を患者に實施するに至り、今日良果を奏するに到れるは、當初君が熱心周到なる補佐大に與つて力ありたる事も、同會席上に於て述べし處なり。

▲君は日本外科學會に於て、古加乙涅のデッラール、インフレーションに就て演舌せり、之れ本邦に於て同法を多數に實驗批評せる者の嚆矢なり、又同會に於て多數の開腹術の實驗談を演舌し、有益なる症候等を世に公にせり、其他君が外科的諸病の療法術式等に、變式改良等を行ひ自ら實施したることは數多あるも、一々之を公にせざりしは今更遺憾の極なり。

▲又昨年以來、本邦人を驚かしたる越中氷見町地方に流行せる佝僂病の屍體を解剖し斯界に利益を與へたるは、全く君の功績なり、君は予が同地方に出張するに同行し、凡ての方面に對し、研究上の便宜を斗り、大に予等の研

究を補佐し、自ら進みて同症患者を施療し且つ研究せり、安達某なる者最も貧且つ重症なりしが、君は病院内最良なる自己の室に収容し、懇切を盡さざるなし、然れども遂に死亡せしが、同人は君の好意に酬ひ亦公益の爲めを思ひ、死後解剖を志願せるなりと云ふ、所謂地方奇病の病体解剖が、本邦に於て初めて施されたるは、實に一個の私立病院内に於てせられたるなり、而して之れ實に君の病院なり、之君の誠心慈仁に深き篤學者たるにあらざれば何ぞ茲に至らむや。

▲君は明治三十六年金澤病院を辭し、私立病院を郷里に開くに當り、其準備として予に托して先づ獨乙國より特に上等の顯微鏡、ミクロトーム及其附屬品、其他研究用諸器械、並に獨逸の醫學雜誌を購へり、之れ實に君が私立病院を設計せる第一着手なり、此の如きを第一着手とする者世間幾人がある、君の篤學なりしを立証せる者なり。

▲君の抱負は近年如何なりしやを知らず、予の助手たりし頃は、猥りに若手の癖とも云ふべき、過大の抱負は有せざりしが如し、自ら大學者を望みしにもあらず、確實なる學力と眞摯の實力とを得て、自信すべき安神を以て、不幸なる外科患者を救ひ、仁術を行ひ少くとも富山縣の天地に雄飛せんとせるもの、如し。

▲君が病院を開くや、直に門前患者の爲に市を爲せり、

(通信)

幸か不幸か病院未だ整頓せず、孜孜として經營するの秋、日露戦争は始まれり、君は直に第九師團第一野戦病院の軍醫として出征し、今こそ奉公の秋なりと勇みて従軍し、旅順の朝奉天の夕、峻烈なる寒暑の異郷に起伏し明し、凱旋の後殊勳の行賞を賜り、名聲籍甚、直に郷里に歸りて東病院を再興して一層隆盛を極めたり、上等病室、傳染病室等の建築を設計し、工事己に其緒に就き、自然著財も出來たり、君は之に甘んぜず、近年中に進んで歐洲に遊び、斯道の蘊奥を研めむと、専ら期したりし事は君の懇友の皆熟知する處なり、此有爲の材をして天命をかせず、忽然逝かしむ、呼噎、悲哉。(了)

\* \* \* \* \*

通信

○續民賢雜觀

(森嶋彦夫 阿氏宛) (八田智証)

在民賢 界外隱士

八面鋒鋩世事一として通曉せざるなく、氣宇博大にして精力の旺盛なる、近時我醫界中飯森ドクトルの如きは罕也、夙に院を辭し樂を開く

事十年學に親しみ術を磨き不惑にして始て西遊の途に就かるゝや、南獨民賢より餘暇精緻なる觀察と豊富なる資料を以て縱横健筆、民賢雜觀あり渡歐日記あり英佛啞旅行あり今又續民賢雜觀あり、一氣立所に成る千萬言、吾人後學をして饑益する事最深し、蓋し本篇は前きに掲げし英佛啞旅行に次て到れるもの、ドクトルか歸朝に先つ一週日、新絲彌々濃ふるに際して着せし最後の通信なり、而して今や營爲病舎を新築し診察所を改修し機器用具等凡て理想的設備に一新紀元を劃し將に大に雄飛する所あらんとす、思ふにドクトルの如きは寔に我醫界に於ける北陸探題か、斯語不遜、敢て當らすと雖、今夫れ之を取つて謹て硯右に薦む、亦可ならん乎 (八田生識)

拜啓、東良平氏死去の御手紙昨日落手致候越へて一日子息光平氏よりも通知有之意外の感に打たれ候晨に紅顔ありて夕に白骨となる世の中とは申候へ人命の測り難き只々夢に夢見し心地致候

別冊續民賢雜觀一部差上候間御笑覽被成下度候文章中意義の通せざる所語法の間違も可有之候

目下伯林大學は尙「フエリエン」中にて來月五六日頃より開校の筈に御座候有名なる「ベルグマン」は十日前死去後任は未定なれども當分の内「ヒルテプラント」氏代理可致との事に候

伯林には來月未頃迄可留「ホーファ」氏の「オルトページ」を見學の筈に候

四月二十四日

伯林 (Pestalozzistr. 105II) によつて

飯 森 生

▲昨年七八月頃と思ふ、余は民賢雜觀六章を草し寄稿せしも記する處、漸く半年の觀察に止り、其半影をも捉へ能はさりき、其後同地に在る事尙ほ七ヶ月、更に見聞せし處尠からざるを以て再ひ之れを録し其足らざる所を補ふ事とした。

▲民賢には目下多數の日本留學生が居る、余が一昨年當地へ着せし頃は僅かに十六名であつた、其後日本船の着する毎に漸々増加し、今や四十二名の多きに達し前代未聞の盛況を呈する様に成つた、留學生の出身地は東京、大坂、岡山、千葉、名古屋と云ふ順序で仙臺と金澤が最も少ない、土地の關係もあるが、北國人の何事にも人後に落ちるは残念ではないか、余か愚にも付かぬ事を度々報するのにも、多少獨乙の事情を明にして、諸君の來遊を催す婆心に他ならないのである。

▲洋行と云ふと一般の人々は中々六ヶ敷事の様に思はれて居るか、來て見れば何もそう困難な事業ではない、交通機關の發達せる今日では「シベリア」を横斷すれば十六日間にして東京より伯林迄來られるのだ、成程學資、語學的素養、健康なる身体と云ふ三つの資本は是非必要

には相違ないか、之れも程度問題で、一定の制限かない、余の如きは此三者とも不完全なるにも不係やつて來たが、來て見れば矢張人並に出來ぬ事はないのである、余の一友人は學資及往復の旅費とも悉皆合せて三千餘圓でドクトル試験を濟した、だから五年以内に死せざる体格を有し一年も獨乙語を練習した人は内地でグズグズして居るより思切て來る方が、東京などへ見學に出掛るより餘程近道だ、多數の内には當地へ來て初めてABCを初むる人もあるか一年斗立ては相應に讀書力も、話も出來る様に成る。

▲何の道でも同じ事だが殊に語學なるものは一種の「タレント」を要するもので何程やつても上達せぬ人もあれは、二三ヶ月でグングン上手に話す人もある、總して日本語を能く話す人は其進歩も著しい様だ、勿論日本で充分語學的素養を付けて來るに増した事はないが、倘し洋行の爲め日本で語學の練習する位ならば、寧ろ其時間を獨乙へ來て使ふ方が餘程得策である、先づ日本で三年掛るものは一年で出來ると見て差支ない。

▲留學生の目的には今の處二種の區別がある甲は當初より自個の専門學を研究する人(少なくとも博士希望者)で直ぐに「ラポラトリウム」に入込み、病理なり、細菌なり、其志す所を専攻するので、乙は先づ獨乙の「ドクトル」試

問を受くるを目的とし、一般學生と同しく講義や「クルス」を取り、普通醫學の智識を取得するのであるか、其得失に就ては各人の目的にも依るから何にも云へないが、三四年も留學する事を得れば、初めD.「エキザメメン」を受け、次に専門的研究をした方がよい、併し二年位ならば初めより専門の事のみに従事するが得策である、單に「ドクトル」試験を受けても「いろは」の復習と一般で、専門的智識は一向發達せないから、國へ歸つた時分は洋行前より反て拙手に成て居るに違ない、此点より云へば余は確かに其方針を誤た者の一人である。

▲コンナ原因から日本の醫學社會では「ドクトル」と云へは一の山野の如く又無能無藝の好標品の様に思ふて居る人が多いか、何もソナナに人外視せずともよいのである、今更云ふ迄もなく獨乙の「ドクトル」は一の學位で日本の博士の如く國家試験以外に超然として獨立し所謂「ドクトル、エキザメメン」に及第せねは得る事か出來さないので、日本の『醫科大學卒業者は醫學士と稱する事を得』と云ふ種類とは全く違て居る、だから若し強て「ドクトルメヂチン」なる譯語を求むれば日本現今の制度に鑑み醫學士と稱するより、寧ろ醫學博士と翻譯するの適當かも知れない。

▲モー一ツ序に言て置くのは日本の醫師で獨乙まで來て

「ドクトル試験を受ける奴の氣か知れぬと云ふ人があるが、何も開業試験を受くる譯であるまいし不思議な事は決してない、前にも陳へた通り、學位は大學卒業以外、國家試験(開業試験)以外に存在して居るのだから大學を出たからつて決して「ドクトル」でないのだ、云は「ドクトル」は醫師の品位を高むる一の稱號である、當地でも普通の人是一般大學出身者を「ドクトル」とは云て居れども、開業醫中學位としての「ドクトル」を有せざるものもある、去れば日本の醫師かD.試験を受けたとて、毫も不思議な現象ではない、のみならず維、露、米の醫師にして當地で此試験を受けるものは澤山ある余か知れる處のみても此春以來己に四名斗あつた。

▲民賢に初めて日本人の入込だのは何時の時代か慥に分らぬが、約二十三年前位たろう、當地にも又古より日本人のみを下宿せしめて、營業として居るものがある、余の現住所 Mozartstrasse 9/II の Hillenbrand 嬢も所謂『日本婆々』の一で、十五六年前より斷へず日本人が居る、此處で草鞋ぬきをした人は決して少くはない、且嬢と云へは若い美人の様に聞へるが、其實四十五六の婆さんで、姉妹共同で日本人の世話を焼て居る、不思議にも此嬢(當地では結婚せぬ人を何時迄も嬢と稱する事は諸君先刻御存知の筈)に Villy Takahashi と云ふ當年十歳に成る



一人息子があるドーして生れたのか日本人其儘の容貌である。

▲此ヒルレンブランド嬢は多數の邦人に接し、日本へは二回も行った事があるから、會話なども日本的で我々の如き拙手な獨乙語でも能く了解し、米飯や、牛肉のすき焼、刺身、漬物なども出来、万事氣を付けて呉れるから、到着早々は中々便利な處である、婆さん曰く『日本人は温厚で切れか能くつて大好きだ』とイヤな褒めに預て恐れ入るが日本人だとして小言を云はない譯ではないが其實云ひ能はさるのである。

▲獨乙着早々は語の不充分の爲め誰れでも一度や二度は赤毛布を演せぬ者はない、此頃大坂より來た淵田と云ふ男がやつた滑稽は、其最たるものであつた、先生民賢へ着するや「カイザーホテル」と云ふ旅館に一泊し、翌日友人の世話で「アウクスブルケル」町へ下宿した、其夕方三町斗距りたる余の下宿へ日本食を食ふと思ふて、やつて來た、處か番地を忘れた爲め、自宅へ引歸したけれども、今度は自分の處も忘れ、途中にマコ付く事三時間、腹は減る寒くはなる、如何ともする事が出来ない『私の行く處は何處だ』と巡查に聞へても知れよう道理なく、仕方なしに到着の際一泊せし「カイザーホテル」を思ひ出し、其道を聞くと、言語不通の爲め要領を得ず、身体茲にタ

ニマツタと云ふ始末、不得已再度下宿の方に向ひ、似寄の家を一軒く訪ね廻り、漸く五軒目に之れを發見し、夜の十時頃下宿の「フロイライン」に送られて「モツアルト」町に着し、空腹を醫したる後、再び同嬢に導かれ、歸宅せしと云ふ失敗談、話を聞けば馬鹿げて居るか、誰れにても有勝の事だ、ナント面白い譯ではないか。

▲獨乙の學生は中々ハイカラ式で、段々墮落する傾向がある、体には日本の夜具縞の様な背廣或は「モーニング」を纏ひ、「ドッペルクラゲン」の高徑十仙迷、赤或は紫の襟飾、洋袴細く、靴は「ラックレーダ」の細長なるものを選び、指には金の指環二個以上、頭に赤、緑、白などの黨帽を戴き、鼻には「ツウイッセル」を挟み教場へ行ても講義は馬耳東風、大抵は新聞の研究で一時間を終り、午後は同級の女學生か下宿の「フロイライン」携帶で郊外散歩、夜は一二時迄「ビヤライゼ」、何時本を讀むか薩張分らず、學期の終りに近附けは、忽ち姿を隠して、旅行と洒落るなど以ての外の状態である、併し中には篤學の學生も少くはないが先づ珍しい方と云てもよい位だ。

▲獨乙の大學生は前通信にも述べた通り終始一大學に止る事は極めて少ない、大抵は有名なる教授の居る大學を歴訪する様だ、例へば外科では「コッヘル」内科は「ライデン」細菌は「グルーベル」皮膚病は「ヤコーブ」組織は

「ステール」と云ふ様に方々で一二學期宛止り其處にて各修學券を得、所定の年限に達すれば、最も容易な處を撰び國家試験を受くるのである、だから教授の良否は直ちに大學の盛衰に關するを以て各大學競ふて良教授を得るのに汲々として居る。

▲各教授の講義振りは日本と大なる差はないが成るべく聽た斗で、頭に殘る様な仕方である、講義は決して詳しくはないが澤山の標品や幻燈や圖畫を示し、親切に教へて居る、否當地の教授連は授業料の過半は自分の懐へ入るから、成べく澤山の生徒を呼ぶ様に勉強して居るのだ、民賢大學にて評判のよいのは「リュッケルド」「フォイト」「ミユルレル」「アンケレル」「エベルスフッシュユ」「グルーベル」の諸教授で大抵二三百人位の生徒が居る、一人平均三十麻克としても一學期(半年)六一九千麻克の收入がある其他「クルズス」や手術料を合算すれば、年二—三万麻克に成る、だから一度正教授になればウンド財産が出来る、ヨポくの爺さんに成ても、容易に其地位を去らぬのも、一分は此様な關係があるからではあるまいか。

▲學生間に於ける最も奇妙なる風習は「メンズール」(劍闘)である、大學生の三分の一乃至半分は左頬部に刀痕を有して居る、之れか即ち尙武の精神が富て居ると云ふ

看板で、我々より見れば癩痕の爲め目か引鉤たり、口か歪て居るなど、醜の醜なるものであるが、獨乙婦人殊に女學生などには、極意氣に見ゆるこの事也、尤も學生間に各黨派があつて、各固有なる黨帽を冠て居るが、此黨員か或一定の時に會して劍闘をやるのだ、併し決闘と違ひ善意的の者であるが、警察は厳しく之れを禁して居るから、會の時と場所などは定て居らぬ、其方法と云つは日本の擊劍道具の如き者にて頭、胸、上肢を堅め、只左頬部のみを露はし、甲乙丙に位置を定め左手を後に廻はし、右手に狭長なる劔を取り闘ふのである、尤も自分の位置は一步も動く能はざる規定であるろうだ、倘し一方が負傷すれば介添人は直ちに中止を命し、醫士(大抵は醫學生)の手當をなすと云ふ工合だから、致命傷などは勿論ない、余は一獨人の紹介で之れを見物する約束をして置たが、定期前已に警察の手か廻り遂に見る事の出來なかつたは頗る残念であつた。

▲民賢の日刊新聞中最も賣高の多きものは Münchener Zeitung と Allgemeine Zeitung の二つて、一ヶ月一麻克朝夕八乃至拾頁宛發刊して居る、記事の体裁などは先づ内地の者と同一であるが、只異なる處は所謂三面記事の極めて高尚なる事で、日本の如く個人の秘密を發くなど云ふ事は決してない、此點のみにても一般智識が如何

に發達して居るかを知る事か出来る、日本の如く一見嘔吐を催すが如き記事を以て讀者の歡心を得るに汲々たる記者の心も分らぬが、此種の新聞が最も社會より歡迎せらるゝのは、畢竟國民の志想が幼稚なる一証ではあるまいか、併し獨乙の新聞にも廣告欄には随分異り種かある、例へは「年○齡○十○八○歲○容○貌○美○麗○英○佛○の○語○を○解○す○家○庭○教○師○と○して○雇○は○れ○た○し」  
 「三○十○一○才○の○寡○婦○容○色○優○美○三○才○な○る○女○兒○有○り○持○參○金○二○千○麻○克○再○婚○を○望○む」  
 「年○齡○三○十○五○才○の○男○月○收○百○五○十○麻○克○二○十○五○才○迄○に○持○參○金○五○千○麻○克○を○有○す○る○處○女○若○く○は○寡○婦○と○結○婚○し○た○し」  
 「二○十○八○才○の○嬢○妻○な○き○人○の○料○理○女○と○して○雇○は○れ○た○し」  
 「五○十○六○才○の○妻○な○き○男○三○十○才○計○の○容○色○あ○る○女○友○人○を○求○む」  
 など云ふ鐵面皮の廣告が日々三四段を埋めて居る。

▲獨乙と實に鍵の國なり、鍵なくして一日も生活する事と出来ぬ、余等の如き一書生でも、七八個の鍵の不斷身邊を離す譯に行かぬ、例之は門の鍵、家屋入口の鍵、借屋入口の鍵、自室の鍵、机の鍵、着物掛の鍵、箆笥の鍵等を持たねばならぬ斯く戸締が嚴重であるから、一人の留守なしと雖も一家舉げて外出する事は珍しくない、個様な時に若し鍵を忘れて外出するとさう自分の室へさへも入る事が出来ぬ、日本の人はコンナ習慣がないから、屢々鍵を忘れ家の前に二三時間も直立して人の歸るのを

待て居らねばならぬ事がある。

▲獨乙人は一般に中々の饒舌である「レストラン」、瀛車内は云ふ迄もなく、道行くにも不斷喋て居るだから對話應答などは非常に上手である、日本では無駄口をせぬ教育の仕方であるから、自然語數がない彼等をして屢々「御不快ですか」などの問を發せしむる事がある、之れとは全く反對に邦人は談話が佳境に入ると大口を開て笑ふ癖がある、否毫も可笑からざる時でも所謂、豪傑笑、御世辭笑などをして話の調子を取るが、歐人は只微笑のみで、決して聲を立てる笑ふ様な事はない、我々が日本流に大笑をして彼等の感情を害する事があるして見れば笑ふ門には福來ると云ふ諺も當地では宛にはならぬ。

▲婦人の活潑なるは今更云ふ迄もない、其歩行の速なるには、御供をした我々は何時でも閉口する、大抵の女は自轉車にも乗れば「ポト」も漕ぐ、氷滑もやれば、遠征にも出掛ける、其他乗馬、高飛、「テニス」、「アウトモビル」何でも御座れて全くた話にならぬ程ね轉婆である、▲奇妙な事は獨乙でも日本の如く婦人の名が大抵極て居るお花、お初、かほると云ふが如く Marie, Rose, Hilda, Anna, Luise, Emma, Mizzi, Mina 等が通り名である。▲日本の「た前を待ち」蚊帳の外……』とか『飲めや歌や……』と云ふ様な極く俗なる歌を當地でも屢々聞く

事がある、今其簡易な者二三を御目に掛けよう

Gehe mach' dein Fenster auf.

Ich warte schon so lang d'rauf.

A einziges Bussel möcht' ich nur.

Vielleicht lass ich dir dann a Ruah.

\* \* \* \* \*

Trink wer noch a Tröpfchen.

Aus dem kleinen Henkeltröpfchen.

O Susana, wie ist das Leben doch so schön.

O Susana, wie ist das Leben schön.

\* \* \* \* \*

Ach's Doahn das is mein Leb'n kan's den was schöneres geben.

Ach's Doahn die ganze Nacht bis das un's Sonn' anbracht.

\* \* \* \* \*

Nach Hanse, nach Hanse, nach Hanse gehe wir nicht bis das der Tag anbricht, nach Hanse gehe wir nicht.

等が所謂「トリントリーツ」である、略字と形を變じた文字があるから其れ積りで、

▲我國の『君か代』の如く獨こにも國歌がある是れは英人 Henry Carey (1743) の原作を Heinrich Hartes (1790)

か獨譯せし有名の者だ、序だから之れも御目に掛ける、尤も「ハインヘマン」王國に於て Kaiser の位を König と改稱して居る

I Heil dir im Siegerkranz, Herrscher des Vaterlands, Heil, Kaiser dir!

Fuhl, in des Thrones Glanz die hohe Wonne ganz: Lieblich des Volks zu sein!

Heil Kaiser dir!

II Nicht Ross' und Reitsige sichern die steile Hoh', wo Fürsten stehen; Liebe des Vaterlands, Liebe des freien Mann's gründet des Herrschers Thron,

wie Fels im Meer.

III Heilige Flamme glüh', glüh' und erlösche nie für's Vaterland.

Wir alle stehen dann nützig für einen Mann kämpfen und bluten gern für Thron und Reich.

IV Handlung und Wissenschaft hebe mil Muth und Kraft ihr Haupt empor!

Krieger- und Heldenthat finde ihr Lorbeerblatt treu aufgeloben dort an deinem Thron.

V Sei, Kaiser Wilhelm, hier lang deines Volkeszier, der Menschheit Stolz!

Früh' in des Thrones Glanz die hohe Wonne ganz :  
Liebling des Volks zu sein, Heil, Kaiser dir !

▲歐洲各國には裸美人を天然美とか何とか云ふて非常に珍重する、市内の立像、繪葉書、博物館内の繪畫、彫刻、宮殿の裝飾等は殆んど裸の人より成て居ると云ても差支がない中には怪しからぬ圖も澤山あるが彼等の目にはソナ感覺を起さぬらしい、余等も初めの内こそ一種異様の感を感じたが此頃では何となく崇嵩の念を生ずる様に成つた。

▲民賢市内に公園と名くへきものか二ヶ所ある、其最も大なるは「エギリス」公園と稱し、兼六園の六七倍位もあるが、所謂大陸式とても云うか唯森の中に數條の通路を設けたるのみで極めて單調である、殊に常盤木の少ない國丈けに、秋冬の候には枯木のみで、燒跡を歩く様な心持がする、日本の様な山や、川や、石などの風致は少しもない、只イサル河の附近だから、園内に「クライン、ヘスロー」と云ふ池があつて夏時には盛に男女が「ポート」を漕て居る、一般に歐洲の公園は山水の美に欠けて居るから、我々には公園と云ふより、寧ろ並木原を散歩する様な感か起る、併し初夏の候には樹々の新緑滴るが如く一道の清氣心に浸み、得も云はれぬ快感を催すのである、公園の他には又市内各處に「アンラーゲ」と稱する小遊園

が澤山ある、市井の小兒は此處に來りて遊戯をなし、往來の人は園内の「ベンチ」に腰を降り憩ふなどは日本式と少しく趣を異にして居る。

▲冬期の運動として最も盛なるものは氷滑りである、其種類も澤山あるが *Schrittschuhlaufen* と云ふのは靴の裏に金屬よりなる氷滑器を螺定し、湖水の氷上や、預め牧場などへ、水を撒き氷らした處で滑るので、獨り子供斗でなく、大供も澤山居る、其方法は中々巧みな者で線、圈、螺旋狀、及之より變化したる複雑の種類があるが、多くは少齡の男女組をなし躍るが如く又舞ふが如く、見物する丈でも中々面白い、殊に日曜と水曜には音樂に合して巧みに滑るから、一層引立て愉快である、余も少し稽古を初めたが、自轉車の乗初めと同しく、一人前に成るには五六十回も饜餅を舂かねは上達せぬ、滑り場所には三十文の入場料を要し、五十文で滑靴(賣價三十麻克)を借るのだ、場内には例の「ビヤハルレ」があつて休息時にはガフ／＼やらかす便利がある、又 *Rodel-Bahn* と云ふ金屬よりなる橇がある、之れも男女二二三組斗で乗り、適當の斜面を有する山頂より、谷の内へ一瀉千里の勢を以て滑り降るので、大抵は郊外でなければ出來ぬ、其他 *Slie* と稱するのは二迷斗の長刀の様な、平たき二本の木を靴に固定し、雪の上を滑走するので、餘程熟練をせねは

我々には一寸出来ぬ藝である、要するに此等の運動者は男女一團をなし、器械を背負ひ流車の便にて近郊に出掛け或は遠く「シユワイツ」迄も行く者がある、日本ならば此時節には炬燵と組討と云ふ有様だがナント盛ではないか。

▲モ一つ冬期の運動として盛なのは舞蹈「Tanz」である、之れは運動と云ふより、寧ろ男女間の交際上必要なる娛樂と云てもよい、歐洲中では民賢が一番發達して居ると云ふ評判だが、實に盛んな者た、併し之れが爲めに風教を害する度合も他國より甚しかろう、「タンツ」は文明の花と云へどもコンナ者か盛に日本へ輸入されては、夫れこそ大變である、舞蹈の盛に初まるのは、十一月中旬頃から謝肉祭(二月―三月上旬)迄で、男女十六七歳に至れは先づ「タンツ、インスチチュト」に入り「クルズス」を取るのである、授業料は一學期上等の處は三十麻克位で、初學者は男女別々に躡る方法を教へるか一二週後に至り足並の揃ふ様になると適當の男女を一組とし Schottisch, Walzer, Rheinländer, Kreuzholka, Les Lanciers, Unterhaltung-Tanz, grosses Cotillon, Schuhplattler, Kusswalzer, Bolanes, Eisenbahnfahrt. 云々順序で一週二回午後三時より、午後十一時迄練習せしむるのだ、一ヶ月后は一人前に成れるから、其頃劇場、レストラン、寄せ、など

に盛に公開せらる處へ、相手の女を携へ出席し共に躍り或は其席へ来て居る女に踊を申込み、午前三時(定刻)甚しきは夜明迄踊り狂ふので、踊相手の女へは花束を送り、女よりは「リボン」を結びたる Orlean を返へすのか禮に成て居る、但し高尚な「ザール」では何の位自分の好きな相手でも二回以上踊を申込みのは無禮になると云ふ事だが通例の場合にはさうでもないらしい又踊の申込みは必ず男より口を開き、決して女より請求する事はないのである、踊の間には十五分斗の休息時間があるが、運動は咽か渴くから頻りに「ビーヤ」を傾け喋々雑談を試むるので、其間の男女間に於ける醜体は、コンナ事に慣れさる日本人の目には、殆んど見るに堪へざる程である、併し高尚の家庭に養育せられたる令娘などは、大抵母か姉か附添人として監視をして居る様な者の夫れも餘り宛にならぬ様だ、此に一寸滑稽なのは其監視人たる母や姉か仲間入をして踊り出すから面白い、一般に西洋の人は年を取ても氣か若いよ。

▲單に踊の會と云ふても種々雑多な種類がある Balparie と稱するのは上等の人のみて、男は燕尾服女は胸の明いた白服 (ausgeschnittes Kleid) でなければ入場を許さぬ位嚴格であるか Rednote と云ふのは貴賤混合で、色々の假面や假裝を用へる又 Domino と云ふのは普通の踊會で

ある、併し是等は絶對的に劃然たる區別がある譯でなく、時々混合して居る、只一週二回獨乙「テアータ」て行ふ「バルバリー」は貴紳淑女のみを撰ふ目的で、服装の制限が極めて嚴重である、だから此處は時々高貴の人も來り又態々伯林巴里より見物に來るものもあるろうだ、其他職業の種類に因し Studenten = Ball Jagor = Kunster = Pulner = Bauer-Ball など其數は一々枚舉し能はざる程澤山ある。

▲此踊中で最も面白いのは假裝會である、或は有名なる劇に因みて登場人物を假裝するものあり、或は男は女に、女は男を摸するあり、或は軍人、農夫、乞食、「ヒョットコ」た龜、希臘、印度、支那、日本人などに出て立ものあり鬚、附髭、附鼻、假面等千態万狀、中々の奇觀である、此等の服装及道具は大抵専門の損料やより一晚五—三十麻克位出して借り來るので、余等も知人より日本服の借用を申込まれた事が屢々ある。

▲公開の舞踏會は午后八時より三時頃迄であるが、其後は相手の婦人を擲して「レストラン」廻りを初め、翌朝ボンやり歸宅するものが多し、だから此時期には各料理店は終夜開店して居る、「カンチーボール」の間は大學生の出席數が半減するのを以て見ても其一端を窺ふ事が出来る、此處に一寸附記せねはならぬのはモ—一ツ民賢固有

の踊て Schallertanz と云ふのがある、之れは七年毎に踊る「タンツ」で一千七百四十三年歐洲大陸に「ペスト」が大流行せし時、人心を鼓舞する爲めに創製せしもので、云は、疫病除の踊だ本年は丁年其七年目に相當せしを以て我々も見事が出來た。

▲踊時期の最後には三日間例の馬鹿日(Narrtag)がある、此間は無禮講御免で、市内は丸て無警察の姿だ、多數の男女は皆異裝して市内を煉り歩き、互に「コンフエット」と云ふ五色の切紙を撒き掛け、「ルフトシュランゲ」と云ふ細き巻紙を投げ合ひ、「ブレッツェル」と云ふ張扇の如き者で頭や臀を所嫌はず打附けるなど、其知人たると否とは、問ふ處ではない、甚しきは查公に迄惡戯をなし、白晝而かも大道の真中で處女を捕へ、接吻を強行するなど乱暴狼籍至らざるなく、夜に入れば各「レストラン」内で盛に「ビール」を傾け、惡戯のある丈を仕盡すと雖も、最終日の午後十二時に至れば俄に酔より醒たるが如く「キチン」と止むのである、今迄の馬鹿は忽ちにして賢者となり、頗る眞面目顔をして居るから吹出し度なる。

▲一体此の馬鹿騒は何の爲めであるかと云へば、二月十三日(各年多少の差あり)より Fasching と稱し宗教上の關係で、肉を食せず品行を慎しまねはならぬ辭肉祭が初まるから、其以前に代償的に、充分遊で置くと云ふ譯で

そうです、此馬鹿日の終る夜には各「レストラン」内で、馬鹿を葬る Prinzgraben と云ふ式がある、即ち常客の一人が白き「テーブル」掛を纏て死人となり、他の一人は赤きものを以て僧正を氣取り、其他の會客は皆燭を手にして會葬者を擬し、席中を二三回廻り最後に僧正は死人に引導を渡すと、會葬者一同が聲を上げて泣くのである、文明國でも此様な馬鹿氣た事があるから面白い。

▲獨乙程宗教的祭日の多い國はない、年か年中休たらけて、學校は一年三百六十五日殆んど半分は休みてある、耶蘇が生れた、死んだ、蘇生した、「マリア」が天へ登つた、何たかたとして休の絶間がない、先づ新年の休日及日曜を初らし Charwoche, Carneval, Ostern, Pfingsten, Weihnacht 等は數週乃至一二ヶ月も續く、其上三ヶ月足らずの暑中休暇があるモー「ツ」バイエルン」には十月祭 Ochtoberfest と云ふ建國祭が一週間もある、此間は「バリア」牧場に淺草流の活動寫眞、大女、蚤の藝當、競馬、世界一周、地獄極樂、怪獸、奇魚などの見世物があつて中々賑だ。

▲日本の新年は莊嚴で、何となく新年らしいが、獨乙のは極めて單簡で新年には差して重きを置いて居ない、大晦日の晩は互に「レストラン」へ寄合ひ、「コンツェルト」を着に「ビール」を呑で居る、やがて時計の針が十二時で重り

合ふと、市内の寺々でゴン／＼と百八梵鐘を突き出す、之れを合圖に客は總立となり Post Neujahr. 一と叫ひ杯を上げて知るも知らざるも握手をなし、新年を祝するのだ、新年の回禮などは極めて少なく、只近親の間のみは往復する様なれど、大抵の處は葉書で祝詞を述ふるのみで、甚だ沒趣味な者さ。

▲之れに反して「ワインナハト」の方は中々賑です、三四日前より市内各商賣は「ワインナハト」賣を初め、種々の贈品にて店を飾り、各廣見には「タンテンンバウム」を門松を賣るか如くに並へ立て、到る處遊ひ道具の市場なども出来る、前日迄に親子、兄弟、親類、知友間互に贈答をなし「ワインナハト」を祝するのである、又當夜は一室内に「タンテンンバウム」を建て夫れに色々の裝飾と數十の燭火を点し其下に贈物を積み懇意なる人を招き御馳走をするると云ふ譯で一寸日本の雛祭に似て居る。

▲方言や語の訛は前にも少しく報したか、其後耳の慣るに従ひ、色々の「ジアレクト」を發見した、併し之を一々掲ぐれば數限りもないから、左に主要なるものを記す、但し南獨乙の「ジアレクト」と思召せ、

haben Sie. ハンヤム      komme her. キム ハ  
Ich bin fortgegangen.      Ich bin fortgegangen.  
Du bist hinaufgestiegen.      Du bist hinaufgestiegen.



Du bist untergestiegen. ビスト オウクスチーント  
 Komme herein. キム オワナ  
 Was glaubst du denn? ウォス グラプス ツン  
 Ich kann es nicht. イ コオス ニート  
 Das ist schön. デス イス セー  
 Was wollen Sie. ウォス メホテンス  
 Ich habe drei Liter Bier getrunken.  
 イホ ドライ モス ビア クスフワ  
 Brief geschrieben. プリッフ クシュリウム  
 Warten Sie ein wenig. オフツンス アー ビースロ  
 Wo fahren Sie hin? ウオ フォンス ヒー  
 Ich gehe in die Stadt. イ ゲイン ストート  
 Die Musik spielt. ムジ スアルト  
 Ich habe Blumen gepflückt  
 イホ プリアメンナ プリクト  
 Das ist schönes Mädchen.  
 デース イス アセース デアンロ  
 Ich bin ins Cafe' gegangen.  
 イビ インフ コオーフュー ガンガ  
 Was tun Sie. ウオス ドアンス  
 Ich tue nichts. イ ドア ニクンス(ニックス)  
 Ich habe wenig gegessen.

イホ ウェンク ゲスセン(geノ前綴ヲ言ハサルヲ多シ)  
 Wir haben es Ihnen gesagt.  
 ミル ホムス エア ナ クソクト  
 Ihr habt es getan. エス ホッブチス ドー  
 Das kann man unmöglich verstehen.  
 デース コン マ ウンメーゲー フェステー  
 Ja freilich. ヨー フラーリー  
 Natürlich. ノッチェリー  
 Gruss Sie Gott. グレアス エッナ ゴート  
 Grüssen Sie mir Fräulein .....!  
 グレアンス マー ツフラーンナ.....  
 Es hat sich die Nase gebrochen.  
 エル ホッツェ ノーゼン ブロッハー  
 Gebe mir das Buch! ギンマスブーフハ  
 Die Sonne scheint. ツンナ シャイント  
 Ich bin müde. イ ビン ミット  
 Die Fusse tun mir weh. ツェ ファイアス ドワン マウエー  
 Warum sind Sie nicht gekommen?  
 ウォルム サンス テート クンマー  
 Ich habe keine Zeit gehabt. イホ コア ツイト コット  
 Ich bin zu spät gekommen. イヒツェバート クンマー  
 Ich kann Sie nicht verstehen.

イコ エアナ ニート フェルステー  
Wollen Sie noch ein Glas Bier?

メグス ノー オグロース ビア  
Bitte, ich möchte zahlen. イ・メヒト ツォルン  
Ich weiss nicht. イ ワス チート

Setzen Sie den Hut auf. ゼッツンス エン フット アーフ  
Was kostet das Tuch. ウオス コスツ ドワッハ

Ich kann Deutsch sprechen. イコ ダイチュ レーン  
Wer läutet an der Glocke. ウア ライトダ グロクン  
Können Sie mir sagen, wie viel Uhr es ist.

ケンチスマ ソーン ウイフル ユール シース  
Wie spät ist es. ウィア スバート イス  
Fünf Minuten auf neun Uhr.

フィンフ ミヌーテン アーフ ナイチ  
Er hat zwei Knaben. エア ホット ツォア ポームマ

Der Knabe ist schlimm. ダ ボアイス ベース

Der Vater ist gut. ダ フォツターイス グァット

Die Mutter ist krank zu Bett.

ムアター イス クランク イン ベート  
Der Mann arbeitet. ダ モオー オアーウョツト

Die Arbeit ist hart. ドァパット イス ホワット

Ich bin mit der Eisenbahn gefahren.

イビ ミット ダ アイゼボーン クファアン  
Der Doctor hat es verboten.

ダ ドクター ホーツ ファボン  
Wann kommt er wieder?

ワン キンムト エア ウイーダー  
Morgen od. Übermorgen.

モアン オーダー イバーモアン  
Ziehe deine Schühe an! チア ダイチ シェア オン  
Sie sind zerrissen. シー サン ツリースン  
Machen Sie ein Feuer in den Ofen!

マッハス ア ファイア イン フォファア  
Ich muss einen Kranken besuchen.

イ ムァス アン クランカ プューフハ  
Gehen Sie heim? グンガス ホーム

Nein, ich mag noch nicht heim gehen.

ナー イ モーグ ノー チート ホーム ゲー  
Ich habe ihn auf der Strasse getroffen.

イ ホム アーフ ダ ストロースントロツファ  
Haben Sie mir alles gesagt?

ホンムスマ オイス クソクト  
Alles nicht aber etwas. オイス チート オバー エッパス  
Gill mir etwas! ギンマ エッパス

Ich habe nichts zu geben. イホヒ、キヌ シ、ケム  
Der Teufel soll dich holen. カム「カニ」様になるのだ。

ダ イ フ ル ソ ル デ フ ル ソ ン  
Du kannst mir den Buckel hinaufsteigen.

フ コ ン ス ト ヲ オ ン プ ヲ グ リ ア ヲ フ イ ス タ イ ダ ン  
Das ist schwer. デイ、ス、ツ、ワ、ー

Das ist nicht wahl. デイ、ス、フ、ー、ト、オ、フ、ー  
Willst du einen Apfel. ホツク、ト、ア、ン、オ、ウ、ン

Ich mochte die Birne. イ、メ、ヒ、ト、ビ、ア、ン  
Habe mich gern. ホ、ソ、ミ、ゲ、ア、ン

Haben Sie das gesehen. ホ、ソ、ム、ス、ダ、ク、セ、ン、グ  
以上の訛は教育なき人及田舎者の話す語で、身分のある

人は決してコンナ分らぬ事を言はぬのである。  
▲當地にも日本で云ふ『茶釜雨合羽』に類したる語遊

Wortspiel なるものがある、六ヶ敷のは中々聴ても覺わ  
られぬが、極單簡なるものを一二御覽に入れるから試み

て御覽  
In Uhm, um Uhm und um Uhm herum. (「ウラム」ハ處

ノ名)  
Metzger, wetze mir mein Metzgermesser!

Wenn ich komme, komme ich, aber ich weisse nicht, ob  
ich komme; ich komme kann.

之を例の訛でると中々面白し、例之は「ウエン イキム、  
キムイ オバー イワース テート、オビ キム イキム  
カム」カニ」様になるのだ。

Wenn macher Mann wüsste, wer mancher Mann war,  
gäb mancher Mann manchen Mann manchmal mehr Ehr.

▲美の觀念は各人の趣味に依て異にするから、美に一定  
の標準を立つる事は中々六ヶ敷し、今東洋人と西洋人と  
を比較し、何れか美であるかと云ふ問題は一寸解決し苦  
し、併し形態學的から云へば西洋人の方がドーしても美  
に近いらしく思ふ、軟きフロンドの髪、新月の如き眉、  
冴へたる目、小高き鼻、引締りたる口元、蔷薇色の豊な  
る頬などは確かに「モンゴリア人種」の及はざる處である、  
殊に皮膚の色澤に至りては黄色人種は何となく蠻風を及  
ひて居る、否現今世界に於ける文化の程度は實に皮膚の  
濃淡に比例して居ると云てもよし。

▲解剖學者は鼻と前額との角度に就て動物の賢愚を論す  
るか成程事實に近いらしい、併し西洋人の鼻の形には種  
々の變態がある今一二の例を掲ぐれば前額より限界なく  
ヌット提起せる Wuschnase 鼻尖のヨモコンと上向せる  
Hakenase、鋭尖に終る Spitznase 鈍端をなす Stupfnase  
下方に曲りたる Adlernase 酒客に特有なる Schnapsnase  
其他人種の特徴と見えし Romischenase, Griechische-

nase, Jaudischenase など奇妙なるものか澤山ある此内最も評判のよくないのか猶太鼻で人交りも出来ぬとははな／＼氣の毒な次第である。

▲五六年前と思ふか一時歐洲の學者間に癡娼論の喧しかつた時代があつた、當時日本でも其存癡を云爲する人もあつて、己に一二の縣では癡娼を斷行した様に記憶して居る、成程當地へ來て見ると癡娼論の起るも無論とは思へぬ点か澤山ある、併し歐洲の人が癡娼を唱導したとて、直ちに之れを國情を異にする日本に實行する事は早計ではあるまいか、況んや衛生學者と道德學者との争点は全く一致して居らないのである、余は當地に來て初めて其真相を悟つた、他の國はイザ知らず南獨乙は公娼の最も發達せざる國である、否な其必要を感じないのであろう、民賢六十五萬人の人口に對し、公娼の數僅かに百餘、*「ウッブルヒ」*の人口八万に對し三十餘、而かも遊客稀にして常に糊口に苦むと、省みて日本に於ける公娼の數と其生活の程を考ふれば實に霄壤の差がある、獨乙人果して道德堅固なるか、日本人果して墮落せるか、之れ蓋し大なる疑問ならむ、而かも余は公娼の需用か國風に逆比例するの事實を認む、一獨乙人の語に曰く『當地では結婚時代に至れば各人必ず「シヤッツ」なる者を有す、何を苦むてが公娼の必要を感せむ、公娼は唯旅客の需用のみ』と

此語を斷味せは獨乙に於て癡娼の不可能に非らざると、彼等か生活難を訴ふる所以を推し得べし

▲奥村五百子女史曰く「日本は半身不隨なり、殆んど女子の存在を認むる能はず」と歐洲へ來て見ると一層其感を深ふする、今極て臆近の例を掲ぐれば、一の宴會がある、にしても當地では必ず男女同數の客を招くか常である、たから日本の如く酒間を斡旋する藝妓なしと雖和氣洋洋として充分歡を盡す事か出来る、今更戀愛論者の説を引用する迄もなく、男女は天然的に離るへからざる關係を有するか故に日本の女子をして今少しく活動せしめむには彼本態不明なる藝妓の需用も自ら消滅するに至らむ、併し余は歐洲諸國の如く、女は敬すへき者に非らずして只愛すへき者なる事を一言し置く。

▲東西國を異にする丈け、疾病の種類も大分違て居る、日本では比較的なき甲狀腺腫、佝僂病、ギヒト、澱粉變性、結石病、狼瘡、精神病等は中々澤山ある、殊に骨疾患の多きは豫想外である、脊椎の前、后、側彎や、内、外翻足などは一寸外出しても常に四五人斗は目撃する、需用供給の結果、此等畸形者の爲め、専門の靴屋か澤山あるを以て見ても其一端を窺ふ事か出来る、反之當地で少なきは、腸チフス、蛔虫、十二指腸虫、マラリア等て氣候の關係もあるが上下水の完備は確かに其一原因であら

う。

▲獨乙で案外多きものは僧と尼である、何れの都市を問はず、わ寺は建築物中美なるもの、一て、僧侶の爲めに澤山の學校がある、殊に尼の養生所の多きには驚くべし、彼等の中には失戀の爲め中年にして尼となるものなきに非らされども、多分は幼時より尼となるべく養はれ、迷信の結果、生涯世界を見ざるものさへありと云ふ、現今尼は看護婦として利用せられ *Schwester* と云ふ名の下に親切に且つ眞面目に働いて居る、此等は適所に適任を得たるものと云はねはならぬ。

▲獨乙の醫師が、如何にして生活し居るかは、深く研究する機會を得なかつたから、詳細なる事は分らぬが、一般に甚だ憐れなる生計を營て居る、日本の様に一家を構へ立派に門戸を張て居るものは皆無で、大抵は二階或は三階の借家住ひ、門の入口に何々専門何某と云ふ看板を下け、診察時間(俗に談話時間と云ふ)は午前午後一時宛、其他は往診時間に充て、ある、診察料は、宅診一麻克往診二麻克と云ふ割合、手術料は一定の規約を設け、貧富に應じて請求するか、其の當否に就て屢々訴訟が起る、這麼有様だから、開業醫として成効するものは極めて少ない、だから醫師は其報酬で生活すると云よりは在來の財産で生活せねはならぬので、當地の諺にも「醫者は

命持てなければ勤まらぬ」と云ふて居る、反之、大學の教授となると非常な収入がある、其代り國務大臣に成ると一般で容易に其椅子を得る事が出来ぬ、無給、三等、二等、一等助手、ドツェント、アウセル」と順序よく進級しても、正教授迄には二三十年を要する、僅か百麻克斗の一等助手で十年位務めて居る人は少くない。

▲獨乙の病院制度殊に施療機關は充分完備して居る、其結果として個人的醫師は漸々壓迫せられ、退行變性を來すと云ふ有様である、日本の如きも文化の進むに従ひ、這般の現象を呈するに至るは火を視るより瞭である、開業醫は自衛上、今より適當の防禦策を講せされは不遠慮の悔をなす時期も來るであらう。

▲醫士に反して比較的よいのは藥劑師である、市内到處赤十字の看板を出して、立派な店を持つて居る、醫師が門前の雀羅を啣つに係らず藥劑師の店頭は何時でも繁昌して居る、之れか兩者間に衝突の起る原因で、素人が自ら診断し、自ら處方するの慣習は別問題とし、大抵の場合には藥劑師自身か醫業を營むのみならず、醫師の一回與たへる處方箋を、何度でも調劑する悪習がある、文明の忠とも云ふべき獨乙でさへ這麼有様だから、理想的醫藥分業も一寸考へものだ。

▲獨乙で奇妙なるは賭博の公開である、富籤の盛なる事

は云ふ迄もなく、各「レストラン」内て「トランプ」や「ピリアド」は皆賭博の具に使用せられて居る、而かも皆現金で公然やつて居るから、日本人の目には異様な感か起る、併し獨乙では法律上一定度迄之れを許可してあるとの事だ。

\* \* \* \* \*

▲余は昨年「ドクトル、エキサーメン」の景況を通信したが、着後早々の又聞だから、多少事實に遠つて居た点もあつた様に思ふ、重複の嫌はあるか、今自分の経過した有様をモロ一度報告する事とする。

▲D. エキサーメン」を受くるには醫師入學后一學期(半年)を過れば資格か出来る、ソコデ第一に學位請求論文を提出せねはならぬ、其「テーマ」は教授より貰ひ「リテラツール」研究事項(患者ならば病床経過、剖檢記事、鏡檢的記載等)結論及著者の學歴を記述し、學長の手元へ出すのである、(余の見本は已に十全會雜誌へ掲載せし筈)一寸考ふれば一ヶ月位でも出来さうな者だが「テーマ」の種類に依り半年一年の時日を要す事がある、縦令速成を主とする極簡易な者ても「リテラツール」の蒐集や、標品の作成斗でも三ヶ月斗見積らねはならぬ之を書き上げても日本の獨乙文では、一向役に立たぬから、獨乙人をして校正せしめ、擔當教授の檢閲を得るのであるが、教

授の氣に入る迄には更に二三回の訂正を要するが當て、其度毎に腦漿を絞らねはならぬと云ふ危介な仕事だ。

▲愈論文が出来上れば受験料四百五十麻克を拂ひ其領收書、キムナヂーム卒業証、開業免狀(獨文翻譯公使証明附)及論文を「デカン」の手元へ差出すのである、形式的にもせよ論文は各教授の處を廻り其承認を経て初めて受験証書 *Protokoll über die Doktorprüfung* を下附せらるゝのだ。

▲受験課目及其順序は初め臨床試験 *Praktischklinische-Prüfung* 内科、外科、産科、婦人科を終り次に學術試問 *Theoretische Prüfung* (解剖、生理、病理總論及各論、衛生、細菌)に掛るのだ、只便利なのは試験の時は自分で取極めるのだから、一ヶ月でも乃至は一年でも勝手次第である。

▲余は豫ての約束に従ひ内科の正教授 *Barer* 氏の處へ行つた、直に病床へ伴れ、此患者に就て病名、現症、區別診斷、豫后、療法を答へよとの事て、一時間の猶豫を與へられた、患者は當年九才の小兒であつたが、両親が附添て居る譯でもないから、既往症など薩張分らず大に閉口した、種々檢索の後、三十分斗で答ふべき腹案を拵へ待て居ると、先生ニコくし乍ら病室へやつて來て以上説明以外に向は脊髓の病理的變化の二三をも尋ね、試

驗は直ちに終つた、「プロトコール」には Bestanden と書し、月日と署名をして呉れたので、ホット一息した。

▲翌日直ちに外科の Angerer 教授を訪ねた、今直ぐ試験をしてやるこの事で一寸面喰たが、まこよヤッケローと病室へ附て行くに患者を診察して居た、余の患者は五十才の老婦に頻りに患者を診察して居た、余の患者は五十才の婆さんで、左上膊骨頭の鎖骨下脱臼であつたが、此患者に就き可成精細に記述せよとの嚴命、結局拙に喋るより増なりと、既往症から問ひ初めると、婆さん中々「ジアレクト」を話して仕抹に終へず、漸く看護婦の通譯で診察を終り、答案を書き他の獨乙學生と共に試験室に誘はれた、自分一人で受験するときは、縦令語が拙くてもソ一困らぬが、他に獨乙人が四人も居るから、日本人の体面を汚す様な事をしてはならぬも、心臓鼓動は自ら高振て來た、A氏は一々答案を調査し、先づ獨乙人に「テタヌス」と「ピエミー」に就き頻りに問ひを發したか、獨乙人だから語の上手な事は言ふ迄もないが、餘り勉強して居らぬと見ゆ、答の出來ぬ事が澤山あつて、流れくつて余の處迄三回斗轉がつて來た、最後に余の答按を讀み schön, schön の二語の他、別に何にも問はれなかつた。

▲一日隔てて産科へ行た Winkler 先生、聲は猫の様に優いか、中々意地が悪いとの評判だから、大に警戒を加へ

て居た、患者は妊娠六ヶ月の婦人で、胎位、胎向、月數及區別診斷を述べよとの事であつた、確實地にやつて見ると産科に經驗なき者の悲しさ、頭部と臀部の位置さへ見分か付かぬ始末、W氏は傍にありて眼力を光らし、丸で春藤玄蕃と云ふ敵役、漸く胎兒心音を臍下の左方に發見し、ヤレ安心と診察を終り所見を述べると、一々語尻を取り、修字の間違を訂され丁度文法の試験を受けた様な目に逢うた。

▲以上三科で實地の方は先づ通過したが、云はば臨床的診斷は我々のた得意物である、併し學術の方は語のみで説明せねばならぬから中々大役だ、先づ一休みと二週間の後恐るゝ解剖の Fuchel 教授の處へ趣いた、有体に云へは是迄友人の一人、余より十日斗前に試験を初めたから、其男より試験の容子が知れ、大變都合かよかつたが、同人は一週間斗病床に臥した爲め、今度は余が先鋒となつた、殊にE氏と「ファイト」氏は嚴格を以て有名なる人であるから、事實の難易は別問題とし、語學の上に五分の弱身を持てる余等は、大にピク附かざるを得ないのである、併し案する子は産み易しとの諺の如く、此處でも schön の言を繰返されて難なく通過した、問題は觀骨、下顎關節の構造、筋及乃帶の名稱起止、唾液腺、胃腺の種類及構造、外頸動脈の分枝、顔面神經核の所在、經過、

分枝、及分佈の場所等で中々精密であつたが、問題が問題であるから、都合よく「ベスタンデン」した。

▲Vot. 老人の生理は難物中の難物で、先生の一喝は獨乙學生中の評判物である、余は又二週間を隔て、試験を受くる事となつた、屠所の羊と云ふ姿で、試験室に入つた、初の問題か尿の常在成分及其%數、蛋白より尿素に至る迄の階級、第二か胆汁の作用、成分、化學的構造、第三か脊髓の反射中樞で、地響のする様な大鳴を屢々頂戴したが試験だけは無事に成立した。

▲越へて一週間 Bollinger 先生の病理へ出掛けた、余は首始同教室へ出入をして居た故か非常に親切で只萎縮腎の病理的變化、心臟肥大を起す原因、中毒性腎炎の特徴など二三を聞き平々凡々の内に濟んだ。

▲其後又七日を経て最終の衛生及細菌學の試験を Gruber 教授より受けた、此時も一人の獨乙學生と一所であつた、待つ間程なく教授室に導かれ、各二個の籤を摘むた、獨乙人には空氣と結核菌、余には工場衛生と虎菌が當つた、答案の要旨は煙の衛生上關係、工場内有害瓦斯の種類及人体に及ぼす關係、虎菌の性状、培養基上に於ける特徴、類似菌との鑑別、虎列刺便消毒法等て其間は中々細かく大に心を勞せしめた。

▲試験終了後「プロトコール」を大學の事務に差出した、

約一週間後、學長「ボルリンケル」氏より單簡なる學位授與式を以て學位證書を授けられた。

▲要するに「ドクトル」試験は決して六ヶ數ものではないが、語學の關係上隨分心配な者である、事實の説明に困る事はないが、複雑なる間には反て要領を得ない事がある、兎に角受験者は語學の煉磨か最も必要た、余と同時に受験せしもの總て六人、一人は中途に蹉き、二人は次學期に延はし、三人は己に結了せしを以て其程度の一般を知るに足るべし。

▲或る日曜日に余の部屋へ四五人の學友が遊びに來た、談偶々俳句の事に及び、民賢に於ける「恨」と云ふ題にて一句宛呻る動議が出た、何れを見ても山家育、俳句などは一度も試みた事のない連中である、併し非俳人の俳諧も時に取ての一興ならむと各左の如き迷句を吐いた。

落花情あり流水心なき恨かな

シャンパンに屠蘇の香なき恨かな

リンデンに御佛まさぬ恨哉

思ふ事口へは出せぬ恨哉

民賢に美人少なき恨かな

故郷の使少なき恨かな

碧眼蜂腰唯貞なきの恨哉

アルバイト目鼻も附かぬ恨哉



ヒーヤ飲て小便繁き恨かな  
讀む程に跡よりぬける恨かな  
月今宵語る友なき恨かな

\* \* \* \* \*

本日(五月九日) Wender に二三の友人及 Zwei Japanische Damen と共に櫻の花見に參り候僞俳人歌て曰く

我ひとり大和心の花見かな

加賀守

外國の花の姿はなかりけり大和撫子色なきそへば益子  
友さちと浮かれて出てし櫻狩いつこにとはんみよし野の花

間野とよ子

花なくは思ふ心もやすからむ春や大和の春にあらねは

新藤相模守

### ○松原三郎氏北米繪端書便

金子上坂桂田諸博士を出せし遠き以前はイザ知らず、明治廿年第四高等中學校内醫學部を設け更に卅四年金澤醫學專門學校となりてより年茲に二十に滿ち、鹿島立いさましく醫學科卒業の驛程を過ぎりし者大頭小頭正に六百八十一、軍醫あり開業醫あり奉職する者研究する者雲の如く花の如くまた盛ならずとせず、而して其間學生の心血を瀝き裕々迫らず致々として螢雪を友とし斯道の爲め奮進して倦まざるものに至ては寧々膏に晨星の觀なきにあらざるなり、先輩松原三郎氏は余と全郡之人也、人と爲り濃厚篤實頭腦頗る明晰にして強記博覽加ふるに

(通信)

志鐵石の如く之を鑽れば彌々堅く事に當りて益剛健なり、思ふに學を好むの篤き其不撓不屈の眞意氣に至ては我校あつて以來未だ曾て見ざる所あり、夙に校に在るや本誌創刊の任に當り出て、東京醫科大學病理室に入るや期年にして精神病室に移り止ること四年、蛟龍空しく池中のものにあらず、獲爾たる孤鳥遂に其素志を展ふるに由なく、三十六年十一月北米に向ひ更に英佛獨を歴遊し斯學專攻に全力を傾注すべく奮起せられたり、偶今夏亦旅行の途に上られ至る所の各地より珍奇麗彩ふる狂院癲癩病院等の繪端書を寄せられ其視察せる實況を報して身自ら此に臨むの感あらしめらる、すなはち其人を揚ぐると共に遂に他日の大成と其健康を祝し併せて衆と之を樂む微衷より、茲に全通信を一括して投載し、廣く氏を知ると知らざるに論かく親しく其風貌に接するの感あらしめん事を期せり (仲秋月下 八田生識)

### 第一信

長しと云ふ春の夜の夢もさめやらぬ中にハヤ暑假と相成申候、此夏は例の風流な否蠻般な旅行をドコカへなさるべく候や、當地も暑假にて先生は瑞西、小使は英國へ歸郷せり何分各國人の寄合のこと故歸省と云ふも所謂日本の洋行にて万事世界的に感せられ申候、當病院の患者約五千人、三分の二は他國生れの者に御座候日本人は三四人あり支那人は固より尠からず

小生之來十四日より約一ヶ月の豫定にて暑假旅行に上り「エール」「ハーバート」大學及數多の狂院を巡視し又御互に忘ること能はざる例の「ポーツマウス」をも一つ吊ふ積に御座候、此度の旅行約千三四百哩、一つ風變りに瀛車

を廢し全く電車と汽船とにて押通す積りに候、東京なれば丁度萬世橋の電車から振り出し早ひ汽車があるのに係らず東海、山陽等を電車か人力かで押通し九州から汽船で歸路に就き途中諸勝地へ上陸して一泊しながら歸京すると云ふ寸法にて、此模様では來年は西洋の膝栗毛と云ふ順番に御座候馬鹿な日米戰爭談も今日此頃稍下火となりたるも一時は新聞も騒ぎ申候

千九百十七年七月十一日 紐育にて 三 郎

第二信 (七月十五日 New Haven 發)

昨七月十四日午前八時半研究所を發し驛から驛へと電車を乗換ながら九十五哩を走りて夕刻七時半當 New Haven 市に着、夜市内を散歩し翌朝案内者に伴はれて Yale 大學を參觀す、建築は蒼澤にして全く大理石を以て疊み上げたる建物少からず此大學には例の富豪 Vanderbilt の寄贈たる大建築多し、醫學部は小建築にして設備完全せず随分失望したり、昨日は日曜の爲め各電車非常に雜沓し手荷物ある余は甚だ困難致せり、電車旅行は汽車旅行と異り甚だ困難にして失敗も多く亦多くの時間を費さざるべからず其代り興味も多く丁度日本なれば東海道を人力車で行く様なものなり

第三信 (七月十六日 Connecticut 州 Middletown 發)

前便の如く昨日午前案内者に伴はられて Yale 大學を一覽せしに共覽者の大多數は婦人なり是れ米國の一特長ならん歟、午後二時半 New Haven 市を相變らず電車にて出發し途中 Meriden 町にて乗換の際偶然にも此町に感化院あることを知り行きて見るに州立男兒感化院にして三百人近くを收容す、午後五時なりしに付一寸見たばかりにて辭し七時半 Middletown 市に到着して宿る、本日前州立精神病院に行く、患者二千五百人を收容し紐育在院よりは小なれども日本の病院に比すれば非常に大にして廣莫たる耕作地ありて牛肉鶏卵の外食物一切を病院にて産出し乳牛百頭、豕四百頭あり其他皆之に準ず、研究は思ひしよりも盛にして特別の病棟を有し二人の病理専門醫員あり丁度小生の行きたる時は一助手は狂者に於ける眼球運動を寫眞にて曲線に描寫し他の助手は一定の精神病者の糞尿を定量分析し殊に Indol, Skatol, Aceton 等を精密に定量しつゝありたり、一大食堂ありて千六百人を一室に收容し毎日晝夕に中央の音樂堂にて奏樂し乍ら食事するを見たり、又特別の一棟ありて犯罪せる狂者三四十名を收容するを見たり、紐育には二ヶの特別なる犯罪精神病院ありて五百名斗を收容す

此「コンテクチカート」州には二ヶの州立狂院と數多の私立狂院あり

午後は此町に於ける州立女兒感化院を訪問せり女兒約二百五十人ありて普通學校の外に料理及縫裁等の學校あり別に異りたる所なきも万事清潔にして整頓し所長等の献身的に従事するを見たり

午後四時次の宿泊地に向て電車を飛ばす

第四信 (七月十七日 Hartford 發)

十六日午後五時例に依り電車にて Middletown 市を發し七時 Hartford 市に着す、Connecticut 州廳の在る所にて人口八九万あり、今朝早くより私立狂院 Hartford Retreat を參觀す患者百六七十名あり小規模なれども大工、鐵工、洗濯等一通りの建物ありパンを自製す只州立狂院と異り患者を役することなし、植物温室、娛樂室、會堂等も備はり又贅澤なる患者の爲に五六の Cottages あり一棟に一人乃至三四人の患者を容れ入院料は一週間二十五圓乃至百圓以上に至り百圓の患者十五六人ありたり、一女患者あり一週間百圓にて二十年以上在院中なりき、此種の患者は自己専用の應接室、寢室、食堂、看護婦室、浴室等を有し頗る贅澤なるものなり、此病院は八十二三年に設立せられ診斷法は最新の學問を用ひつゝあるを見たり。

午後は他の私立狂院 Dr. Crocher's Sanitarium を見る患者三四十人を收容し室内の裝置等單簡にして日本にても

ありそ一な病院なり、其他學問的のこと一向に見るべきものなし失望して歸りたり  
電車にて一通り公園及州廳等を見物し午後五時次の驛なる Springfield に落ち行きたれども此處には小生に興味ある病院等なし依て夜に入りたれども再び電車にて Palmer に向ふ

第五信 (七月十八日 Palmer 發)

十七日午後五時電車にて Hartford を出發し途中 Springfield 市に一時停止りて夕食等をなし夜八時當 Palmer 町に着して宿る小さき町にして見る程のこともなし

今朝當「マサチューセツ」州立癲癇病院を參觀す、患者六七百名を收容し紐育州立のものに比すれば半以下なれども夫でも無數の建物あり茫茫たる山野ありて農業及牧畜等大に盛なること日本の病院に見ること能はざる所なり、目下尙益擴張新建築中なり病理的研究は豫想せし程に盛ならず

米國の諸州には州立狂院の外に州立癲癇病院ありて日本の様に癲癇患者を普通病院又は狂院に收容することなし全く施療にして特別の病理室あり又専門の病理家を置きて解剖的及化學的研究のみに従事せしめ其研究の盛なることは日本の病院に類例なき所なり

一体米國にては普通病院、狂院、癲癇病院等には悉く專

門の病理家を置き、別に患者を擔當することなくして専ら解剖的及化學的研究に従事せしめ且つ尿、糞、血液、腦脊髓液、胃液等の検査に従事せしむるは誠に宜しき模範的ヤリ方と思惟す

資産ある者の爲には私立癲癇病院あり日本にも所々に斯る専門の癲癇病院を設け患者をして農牧業に従事せしめ乍ら治療したきもの思はれ候

第六信 (七月二十日夜 Worcester 發)

去十八日午後二時 Palmer 町を不相變電車にて出發し四時半 Worcester 「ウスター」市に着す、此市は「マサチューセッツ」州中にて「ボストン」に次げる大市にして人口約十三四万あり、見るべきもの甚た多く三種の精神病院、一大學等あり、三種の狂院とは急性狂院、慢性狂院、Colony 院是なり

十九日州立急性狂院 Hospital を見る、小生の先生 Meyer 博士がもと此病院の病理醫たりしことありて小生等とは因縁淺からざる病院なり、患者千百名ばかりを收容し万事學問的にして新築の病理棟あり専門の病理家をして研究に従事せしむ、病室は清潔なれども室内の裝飾及花卉等は紐育の州立狂院より劣れるもの、如し、病床日誌の記載は大分精細なり

二十日午前は全市の慢性狂院 Asylum を觀る、患者千名

近くを收容し初めは前の急性病院又は他の急性病院に收容せられ夫より此慢性院に移轉せらるゝものとす、斯く前の急性狂院と密接の關係あり且つ全市内にあるにも拘らず其研究は前者よりも著しく劣れるを見る、此院にて小生を案内せる一等助手の兄弟が目下仙臺に在りと云へり

全日午後「ロニー」Granton Colony に行く電車にて半時間にして違す、廣莫たる山野八百エカを有し四五年前より新設に着手せりと云ふ、其故万事尙整頓せず患者も百五六十名のみ悉く前の慢性狂院より移轉せられたるものなり、病棟遠く互に距たり馬車にて往來す、林檎、櫻實、桃等甚た多く乳牛も尠からざるも患者の作業は普通の狂院より別に著しく異れりとは見えず治療の望なきものゝみにて研究も盛ならず

引續きて市立普通病院に赴きて之を觀る別に異りたることなし、外科大手術室は頗る宏大なる様に思はれたるも他の一般の組織は精神病院よりも頗る小なり、此病院にも病理専門家あり二醫之を助け澤山の標本を見たり急きて Oberlin 大學に行きたるは五時過にして一寸外觀を見たるまゝ引返せり、而して當市には尙一私立狂院ある由なりしも訪ふ暇なかりき

此「ウスター」市では或知己の家に止りたる爲め毎夜諸方

へ招かれ遂に市内の他の興味ある場所を見る時なかりしが科學及美術博物館は頗る整頓せるものなりと云へり、かねて盲啞學校等を見る豫定なりしも之も時間なき爲め行かず、一夜公園の俱樂部に招かれたるに窓は大なる湖に臨み丁度日本にある様な好景色にして湖上に多くのボート往復するを見る、中に一ボートあり提燈など點し大に裝飾せらるゝものあり其名を「東郷」と云へり  
 此次は州立結核病院に向ふ豫定なり

第七信

(七月二十一日 マサチューセッツ州  
 ラトランド町「Putland」發)

「ウスター」市を去ること僅に十一哩斗にして當「マサチューセッツ」州立肺結核病院あり、此種のもの米國の諸州に在り、昨夏は紐育州立のものを訪はさりしにより今日は自働車にて當院の參觀に赴きたり、最高燥の地に位置し夏も涼しく後方に山を負へり、十年以前に設立せられ土地八百「エーカー」もある故廣袤頗る大なるものなり、患者三百四五十名を收容し全治療と實費の半額を納むる二種の患者あり、其他狂院にも全治療及半治療等の患者あれども之によりて病室等を異にすることなし、當院一ヶ年の經費四十四万圓にして患者一人に對し一週間十八圓の實費なりと云ふ、建物は此端書に見ゆる全病室の外に後方の山林中に十二個の小屋あり、多數の患者は山中に

憩ひ食事時のみに下山す其他の患者も悉く窓外の廊下に憩ひ書見等するを見る、普通の精神病院にも澤山の結核患者ありて大抵特別に木造で窓の多き日本式の病室を設け、或は冬季にても天幕病室を用ゆれども此病院には天幕を用ゐず、専ら新鮮の空氣と營養とに重きを置き藥物及種々の注射療法等を意に介せざるもの、如し、而して悉く初期結核患者のみを收容し進みたる結核患者を入院せしめず、又入院を一年以内とせる爲め患者の交代は割合に頻繁なり

冬にても可成室内を寒冷に保ち晝間は「ストーブ」の蒸氣を絶つと云ふ、晝食後一時間半患者をして晝寝せしむ、是れ他の病院に無き習慣ならんか

略痰は二寸四方位の金屬箱の内に厚紙製の内箱ありて此内箱を毎日二回取換へ焼却す、其他患者の衣類等を消毒する装置あれども別に異りたる所なし

此結核院にも病室の掃除、食堂の整理、給仕等に患者を使役すれども精神病院の様に患者をして大工、鍛冶、靴、洋服、土方等に從事せしむることなし、夫故一体の規模は普通の精神病院よりも遙に小なり、農業、牧畜等を少し盛にせばヨサナーナ様に感せられたり、半治療患者は一週間八圓半を納む  
 當院にても初期結核患者のみを收容し且つ入院期限一ヶ

年以内なるにより一年間の死亡者十人以下位にして病理的研究は盛ならず

第八信 (七月二十四日 Westborough 發)

二十一日午後二時半結核病院を辭し電車等の便なきまま自働車にて「パーマ」村 (Palmer) に行きて一泊し此地に轉地療養中の先生の妻君の令妹を見舞ひ一日留まりたり二十二日午後二時馬車にて出發し三時再ひ「ウスター」市に歸り直に電車にて「ウエストボロー」町 (Westborough) に行きたるも三軒の宿屋共に明室なしとて( )斷られたり或は支那人と誤認せられたるならん歟、兎に角止むを得ず再ひ電車にて七哩を走り次の驛「マルボロー」町 (Malborough) に行きて宿りたり、此邊は田舎にて日本人の來るべき所にあらず併し支那人は普及す

二十三日朝電車にて「ウエストボロー」へ引返し州立男兒感化院を參觀す Lyman and Industrial Schools for Boys 此處には男兒約三百五十人あり種々の職業を教授す、二三年前日本人某氏は斯道研究の爲め一ヶ月餘も此院内に止りて精細に視察せられたりと云ふを小生は二時間餘りで切上げたり

全午後は州立「ポメオパチー」精神病院に行く、患者千人数を收容し廣大なる敷地は湖を圍み森林深くして眺望絶佳なり、多くの病棟ありて急性、慢性精神病者及畑野に

勞働する患者等の爲に各特別の病室あり、或病室は全く自由に開放して普通病院と同様なり、病室大に清潔にして且つ整頓す、病理部を新築して獨乙より歸りたる病理専門家あり、顯微鏡寫真器等一切を備へ神經原纖維、血液等の面白き標本多し、浴治療法頗る盛なり、小生は以前「ポメオパチー」と云へは馬鹿に見クピツタ様に思居りしも之を實見するに中々馬鹿にすへきものにあらず、此療院にて異なる點は看護婦約十八名毎に完全せる一寄宿舎ある贅澤に在り恰も一私家庭の如し、他の病院には二大寄宿舎ありて男女の看護人を寄宿せしむ、此日は「ボストン」市へ行く豫定なりしも病院の勸に従ひて院内に一泊せり

第九信 (七月二十六日 Boston 發)

二十四日午後四時當「ボストン」市に着す、一週間滞在の豫定に付市の中央交通に便なる所に貸間家を見附けて此處に入り、公園に近く毎朝夕此處に行くを常とす、發足以來使用せるものを束ねて洗濯屋に送る

昨廿五日午前「ボストン」見物、電車にて田舎者と一所に市内を駆け廻り一通り眺めたり、午後 Massachusetts General Hospital 普通病院を參觀するに思ひしよりも小さくして神經部あれども取立てる云ふ程のことなし、病理部には

二三人の専門家あり殊に「ライト」氏 (Wright) は血液染色法にて有名なる人なり目下血液小板に就きて研究中なりと云ふ

本日午前「ハーバート」醫科大學病理教室を參觀す、宏大なる多數の建物を悉く白大理石にて築きたる米國流の贅澤には今更乍ら驚きたれども内部の裝置は左程に驚かざりき、此大理石の費用で内部の裝置を今少し贅澤にした方が一層宜しかりしならんと思はれたり、特別の動物舎ありたれども餘り感じたる構造にあらざりき、此病理部にて最見るべきものは顯微鏡寫眞の手際が如何にも見事なることなり、神經組織も大分ある様子なれども生憎其専門の助教授か暑假で歐洲漫遊中なので見ることはざりき

午後は「ポストン」市立病院を參觀す、千人斗りの入院患者ある普通病院にして特に注意すべき點を發見すること能はざりき、此病院の病理部は稍不潔なれども見るべきもの甚だ多し、一人の長と四人の助手醫及他に幾多の雇女等ありて標本を造り一ケ年の解屍は前の普通病院と全様にて二百屍餘なれども其檢査等は一層精密にして多忙に働きつゝあるを見たり、此所の病理師 Mallory 氏は神經膠質及結締組織染色法を發明したる有名なる人なり、且つ此病理部にては實地上便利なる器物を種々考案し見

るべきもの尠からず、黴菌檢査も盛にして毎手術及解屍毎に黴菌檢査をなし居れり

第十信 (七月廿九日 Boston 發)

廿七日午前「ポストン」市立精神病院を參觀す患者八百餘人余あり、診斷等は最近の Kraepelin 氏法により、且つ解剖室等の設備あれども専門の病理家を置かず亦臨床上の研究も盛ならず

午後州立血清研究所を參觀す、所長は「ハーバート」大學教授 Theobald Smith 氏にして豚の疫病菌を發見したる人なり目下諸建築の工事中にして諸事未だ完全せず次で一私立神經病院を觀る患者四十名餘あり、「ノイラス テニー」「ヒステリー」等の類にして研究的病院にあらず廿八日は日曜につき病院等の見物を止め美術博物館に行く規模甚だ大ならざれども日本の彫刻、繪畫、骨董等甚だ多し、次で圖書館に行く規模頗る大にして建築も贅澤なり

夫より電車を走せて海邊に遊ぶ市民群集雜沓す、又電車によりて「ハーバート」大學に行き其構内を散策す今朝 Tufts medical College を觀る學生四百人斗あり、規模小なれども多數の助手が研究しつゝあるを見たり、次に「ハーバート」大學衛生教室に行きて小生の研究に關係ある或標本を鏡檢して十二時に至れり

午後「ハーバード」大學心理學教室を見る、種々の實驗室ありて面白きもの多し、其より「ハーバート」科學博物館に行く比較動物博物館は最整頓し紐育の普通博物館よりも陳列品多し、次て植物博物館に入る陳列品多からざれとも澤山の花卉を硝子にて作り熟視するも、天然花なるか人工花なるかを知るに困しむ程に上手に出來て居るには驚きたり、人類學博物館に行く相當陳列品あり、地理學博物館は閉戸せり、依て美術館に行く規模大ならず

第十一信 (七月卅一日 Boston 發)

廿九日午後「ハーバート」大學を去りて Boston University Medical College に行く、百人斗の生徒あるのみ、万事規模小にして見るべきものなきも獨り病理室の天然色標本は異彩を放てり、當該教授の發明に係る Gelatin 標本にして透明に凝固せる Gelatin 中に標本を埋包して硝子板上に固着せしめ別に硝子等を以て蓋ふことなし、實に該教室獨特の標本にして甚た美なり、次て附屬病院を見る異りたる事なし

三十日午前 Mc Lean Hospital 狂院(七哩)に行く「ハーバート」大學に連關する狂院にして二百名余の患者あり、化學的及實驗心理學的研究盛なれども病理助手欠員中にして爲に病理研究は目下頓挫中なり、自費患者のみにして一週間の入院料二百圓のものあり従て頗る贅澤なるも

のなり

午後州立白痴院(八哩)を観る、一千人以上の白痴を收容し規模大なれども別に研究的方面には感心したるものを見ず、白痴を教育するに用ゆる種々の物品は頗る興味を惹けり、各國の人の形ありて日本の雖もありたり

本日は午前女子監獄(二十哩余)に行く、二百人斗を收容し規模小なれども万事整頓し四人の取扱方大に緩大にして普通監獄と甚しく異なるを見たり、二人の日本専門家が近年來訪したりと聞けり、所長を始め悉く婦人にして田畑に働く僅少の者が男子なるのみなり

午後再び「ボストン」市に歸り男子監獄署を見る、九百人餘を收容し製靴、洋服縫裁、靴下製造、大工、機業等盛なれども東京巢鴨監獄よりは万事の規模小なり、次て盲學校を見る三百人斗を寄宿教授し此邊にて最大なるものなり、教授用の種々の模型等は大に完全す、又盲生徒の製造したる机等種々の美術品を實見するに甚た精巧にして驚くに堪ぬたり

夜は船と瀟事を走せて遊覽場に行く、海邊にして市民雜沓し種々宏大なる見世物小屋頗る多く一面に電燈にて「イルミネーション」を爲し、宛然佛壇内を散歩するか如き感あり

明八月一日 Boston を出發すべし



第十二信 (八月二日 Concord 村發)

昨日午後電車にて「ボストン」市を發し二時間にて二十一哩半を走り當マサチユセッツ州「カンカルド」村に着す、此地は米國獨立戰爭の幕明け(一七七五年四月十九日)をしたる有名の地にして小生の宿屋は當時英軍の司令部たりしなり、夫故當時の遺物多く、當時兩軍が一小橋を挾んで對戦したる古橋の破片を或家族より得たり、又此村よりは Emerson, Hawthorne, Alcott の三大文學者を偶然よ輩出せしか各住家今尙存す、一々之を見物せり、實に文武の名所舊蹟にして小生は今迄斯の如く趣味ある土地を見たることなし、紀念の爲め戰場の松葉及各文學者の庭の花片を書中に莖んで歸りたり、當地は眞の田舎なる爲め人心淳朴にして知らざる者も互に言葉をかけて挨拶し甚だ親切なり

本日早朝瀛車にて感化的監獄に行く、少年者及初犯輕罪者一千人以上を收容し規模甚だ大なり、當地は器械靴及綿毛布の製造大に盛にして生綿を衣とするまで宏大なる機械力のみを用ゐる日本のヤリ方と全く其趣を異にす

午後馬車にて再び「カンカルド」村に歸り、電車にて「ニューハンプシャイヤ」州の「カンカルド」町(六八哩)に向ふ

第十三信 (八月四日 Concord 町發)

二日午後零時半「マサチユセッツ」州「カンカルド」村を電車にて出發し途中諸所にて乗換へ夕刻六時此「ニューハンプシャイヤ」州「カンカルド」町に來りて宿屋に入る、此町には州廳、精神病院、監獄等あり、此夜散步に出掛け劇場に行きて活動寫眞を見たり

三日朝監獄に赴く規模小にして僅に二百名を收容す、次て州廳に行き精神病課及衛生課を訪ひ、去りて州立圖書館に行き多くの統計書を得たり

午後精神病院に行く、此州唯一の狂院にして八九百名を收容す、一体に此州は紐育及「マサチユセッツ」州より劣り此院も研究餘り盛ならず、然れども其風景甚だ佳く建築並に敷地は随分大なるものなり、五哩を距てたる山間の湖に臨んで Cottages 病室あり、五十名斗の信用すへき狂者を此所に移し全く患者の自由に放任して生活せしむ、此地に Christian Science (クリスト科學)の始宗者 Mrs. Eddy の住宅を見たり

第十四信 (八月五日 Littleton, New Hampshire State 發)

四日午後一時半「カンカルド」州立精神病院を發し瀛車にて百四十二哩を走りて Vermont 州に入り Waterbury 村に宿る、人口千六百の小村にして見るべきものなし、是れ小生が紐育出發以來瀛車を用ゐたる嚆矢なり、一体に

米國の北部諸州は連山のみにして丁度日本の如く各町に電車あれども各町及村落を連結することなし、依りて止むを得ず瀛車を用ひ三四日後よりは再び電車の厄介となり紐育へ歸る積なり

本日早朝州立精神病院を訪ふ、此州の文化は紐育より大に劣れるにより病院亦然るべしと豫想せしに豈圖らんや特別の病理部ありて解剖材料は尠けれども随分完全に一々研究し顕微鏡寫真をも撮りつゝあるに驚きたり、患者漸く五百七十名斗りにして規模万端小なれども能く整頓す、此州には特別に犯罪精神病院を設けず此病院内に相距りたる建物ありて犯罪狂者四十名斗を收容す、又開放病室ありて看護人を附せず患者をして自由に出入散歩せしむ

午後瀛車にて Montpelier 町に行く、Vermont 州廳のある町なれども人口僅に六千三百に過ぎずして見るべき所なし、只州廳を訪ひて種々の統計書類などを得、止るごと三時間にして再び瀛車を取り五十哩を走りて再び New Hampshire 州内に歸り、當地にて有名なる White Mountain 連山中を走り Littleton 町(人口四千餘)に着きて宿舎に入りたり、此邊は山中にして夜間殊に寒さを感じ、此等一帶は所謂米國の瑞西と云ひ風景絶佳、旅行者甚た多し

第十五信 (八月六日ハンプンシャイヤ州 Washington

山頂の雲の上發)

今曉 Littleton 村を瀛車にて發し有名なる「ワシントン」山麓に達し特別の登山瀛車に乗換へて登山す、高さ六千三百尺に過ぎされども東部米國にては最高の山にして一帶に此邊を米國の瑞西と稱し夏季遊覽者甚た多し、登山瀛車は一八六六年に出來此種のものにては世界最古のものなりと云ふ、常に著しく傾斜し三十七八度に及ぶ山上には完全なる旅館あるのみならず山頂にて一日二回新聞を發刊し、午前十一時十五分頃着きたるに十二時過の新聞には既に小生等の姓名を印刷して之を二十錢にて賣附ける等万事ヌカラざるヤリ方に候、往復瀛車代八圓、一泊料九圓は此田舎にては一吋高し、溫度華氏三十八乃至四十七度、濕度七十五乃至百%、風力一時間十五乃至三十七哩なり、冬は零下六十度、風力二百哩に達すと云ふ、今宵山上に一泊すれども不幸にして霧深く少しも遠望すること能はざるを憾む

第十六信 (八月八日 Portland 發)

七日日出之壯觀を見んとて三時半に起きたれども霧深くして其意を達せず、六時五十分例の登山瀛車にて「ワシントン」山頂を發し八時四十分山麓にて普通列車に乗換へ New Hampshire 州より Maine 州に入り百五十三哩を走

りて首府 Augusta 市に着き州立精神病院内に宿りたり、此「メーン」州は人口僅に七十万の小州にして二個の州立精神病院あり、此病院は患者七百五十名斗を收容し米國の最東北方の田舎なから診斷等には最近の「クレペリン」氏法を用ひ居れるは意外なりき、別に異りたる點なきも五十哩余を距りたる一海島上に分院を置き回復期等の患者四五十名を夏期の間送りて保養せしめつゝあるは大に宜しき所置と云ふべし、目下犯罪精神病院の建築に着手中なり

今朝「トーガス」町 (Togus) に行きて米國廢兵院を觀る、其間七哩なり、千八百「エーカ」の廣地に無數の建築ありて南北戦争又は米西戦争により廢疾となりたる老兵士約二千五百名を收容す、米國には斯の如きもの八九ヶ所ありと云ふ、内に病院あり二百名餘の患者を入院せしめ軍醫五名にて擔當治療す、肺結核患者十名餘の爲に天幕病室を設けあり、普通病院と其趣を異にし大に興味ありき、正午十二時半の電車にて歸る

午後二時精神病院を辭し電車にて當市に在る「メーン」州廳に行き衛生課、教育課等にて統計書類を得たり、此處にて次の驛に州立女子感化院あることを知り二時半電車にて「ハロウエル」町 (Hallowell, 二哩) に行き感化院を參觀す、女子百名餘を收容し主として嚴格に家庭的仕

事を教授し小生の行きたる級は地理の教授中なりき、瀛車時間の都合により早々にして辭し歸り四時半の瀛車に乗り六十一哩を走りて六時「ポートランド」市 (Portland) に着き旅宿に入る

此「ポートランド」市は人口五万余ありて「メーン」州中第一の大都會なれども首府は第五位の「オガスタ」町に在り、米國の各州廳は只州の中央に在りて第一位の都會にあることなし、即紐育州廳か紐育になくして小さき「アルバニー」町にあるか如く、又「カリフォルニア」州廳か「サンフランシスコ」市に在らずして小さき「サクラメント」町に在るか如し

第十七信 (八月九日 Portsmouth 發)

昨夕 Portland 市に着くや直に米國一番の詩人 Longfellow の生れたる家及生活したる家を見且つ市内の勝地を散歩す  
本日より再び電車旅行に復舊し、朝「ポートランド」市を出發し電車は常に大西洋岸に沿ふて走り到る處の町村悉く海水浴場なる爲多くの贅澤なる旅館、見世物等ありて大に雜沓す、所々の海水場にて二三十分間止り遊び乍ら午後一時例の有名なる Portsmouth に達す、直に海軍鎮守府を訪ひ海軍病院を見れども規模小にして特別の興味なし、去て談判のありたる建物に行き其室を實見す、目下

五六名の書記執務しつゝありて當時の状況を説明す、其時の机の脚のありたる點及小村、「ツキッテ」の椅子のありたる床板には日露國章を顯はせる金板を打附け其中央に握手せる鑄物あり、其他當時の寫真あり、二年前の今頃の事を思出して感慨更に新なり、去るに及び近くに咲ける花二三片を携へて紀念となし軍艦の修繕等を見て歸りたり

第十八信 (八月十一日 Tanton 發)

九日午後三時例の「ボーツマウス」町を電車にて發し南下すること五十三哩にして「ベバーリー」町(Beverly, Mass)に着す、人口一萬二千の小街にて更に見るべきものなし、此日の旅程百十二哩なり

十日朝八時半また電車にて發し走ると九哩にして「デンバルス」(Danvers)に行き州立精神病院を見る、患者千四百名を收容し病理室に三名の専門家を置き一人は「ハーバート」醫科大學病理の助教授にして他の一人は黴菌學專門なり他の一人は病理を助手す、研究甚だ盛なり、此病院にて一寸目新らしき事は腦脊髓液を患者より採り之に酒精を混して遠心器にて細胞を固定且つ沈澱せしめ之を「バラフオン」或は「ツェロイデン」に包埋し切片を造りて研究しつゝあるに在り、是迄五〇人は單に該液を遠心器にかけ「デッキグラス」乾燥標本を造りて染色したる故細胞

成分を鮮明に研究すること能はざりしに、此法により包埋するとき甚だ鮮明に染色するを得明なる Plasma-nile を腦脊髓液中に見ることを得

此病院には又腦脊髓液及腦の黴菌學的研究も盛なり、且つ此病院には二個の獨立せる男女の結核病室ありて此病室には近來發明せられたる水銀燈を用ひ電燈を用ひず、水銀燈の光線が結核に多少作用すると云ふ話あるにより試験的に用ひつゝあるなりと云へり、此病院にては各助手か日新の智識を抱き研究盛んなりしは大に興味ありたり、此夜は病院内に一泊せしが尙此病院には一哩斗を距つて Colony あり、慢性の狂者三百名を移して全く開放的に治療し只十六人斗の看護人を附するのみなり

今朝電車にて該病院を發して遙に南下し途中「ホストン」市を素通し走ると四十六哩にして「フォクスボロー」町(Foxborough)に着き、州立慢性酒精中毒病院を見る單純の酒精中毒者九十名斗あり其他酒精中毒性の精神病者及他の慢性狂者百八十名余ありて總計二百七十名斗を收容し規模小なり、特別の裝置なければども水治療法及体操療法は他の普通精神病院よりも著しく盛なり

再び電車にて南下し「タントン」(Tanton)に着き旅館に入る、此日の旅程正に六十二哩にして瀛車旅行と異り乗換繁くして實に厄介なれども瀛車と違ひ到る所の町の大

通りを走ること故各町の様子分り大に面白し  
明朝は此町にある州立精神病院を訪ふ積りなり

第十九信 (八月十二日 Bridgewater 發)

十一日夜「タントン」町に着きて旅館に入り、十二日早朝  
當市にある州立精神病院を訪問す、患者九百名餘ありて  
相變らす規模宏大万事整備し曠漠たる畑地ありて牛肉及  
鶏卵の外一切の食物を自ら産出し百頭餘の乳牛ありて牛  
乳を自給す、診断及治療法等も最新法を用ゐる病理部あり  
て二名の醫之を擔當す目下専門の病理主任「シカゴ」市の  
精神病院研究所に轉任して欠員中なれども女醫病理助手  
ありて總ての病理的検査に従事せり、而して此病院にて  
稍奇異に感じたるは院内最も臨床的研究に熱心なる者は  
中年の女醫にして最も病理的研究に熱心なる者は妙齡の  
他の女醫なるにあり、此二女醫が所謂牛耳を握り他の男  
醫は研究所に於て女醫より教へられ乍ら女醫の助手をな  
しつゝある事なり、流石は米國にあらざれば見られぬ現  
象なりと思はれたり、  
此の病理主任代理の女醫は中々熱心に標本等を製り或は  
「カイゼルリング」氏法の標本を製りて熱心に余に示せ  
り、米國の法律にては各精神病院には少なくとも一名或  
は以上の女醫を置かざるべからざることを規定し主とし  
て婦人科的検査及女患者治療に従事せしむるも、此の如

く病理研究に熱心なる女醫は衆からず、當日は牛乳の結  
核菌検査に従事しつゝあるを見たり、當夜余は院内に一  
泊せり

今朝九時半瀛車にて當地を出發し十時次の驛「ブリッチウ  
スター」州立犯罪精神病院を參觀す、監獄署と全一敷地内  
に在り、夫故此全一敷地に普通監獄(囚徒千三百余名)、  
監獄普通病院(患者二百名斗)、及犯罪精神病院(狂者五百  
三十名斗)の三種のものあり、普通及精神病院は全一院  
長の配下にあれども助手醫は勿論各別なり、紐育州には  
二種の特別の犯罪精神病院ありて一には犯罪時既に精神  
病者たりし者を收容し他の一には犯罪時には精神健全な  
りしも入監後發狂せる者を收容し爲に Criminal Insane 及  
Insane Criminals を區別し之を普通精神病院内に收容  
することなし、然れど此 Massachusetts 州にては右二種の  
患者を全一の犯罪精神病院内に收容し女子の犯罪精神病  
者をば他の普通精神病院内に混合して收容し又此犯罪精  
神病院には男患者のみを收容すれども紐育にては女子に  
ても犯罪精神病院内へ收容す、而して此犯罪精神病院に  
ては他の普通精神病院より特に異りたる點なきも只患者  
を自由に開放せず院の周圍に高き土塀あること東京巢鴨  
精神病院と全様なり、米國にては普通狂院に塀等を用ゆ  
ること更に無し、此夜此犯罪精神病院長の邸内に一泊す

第二十信

十三日夕食後は Bridgewater 犯罪精神病院長の家族と打連立ちて三時間斗り散歩し歸りて其邸内に一泊す十四日早朝院長自ら馬車にて余を電車停車場まで送り甚た懇切を極む、一体に當地の病院は參觀者を遇すると甚た親切にして辭するときには必ず馬車にて停車場まで送るを常例とす、此日南下すること二十七哩にして十時半 New Bedford 市に着き船渡場に行きたるに今汽船の出た斗りの所にて次の出發迄四時間餘を待たざるべからず、コンナニ馬鹿を見たること出發以來初めなり、止むを得ず無意味に市内を散歩し晝食をなし繪端書を求め、二時半の汽船にて出發し四時 Woods Hole 町に着きたり此町には二個の研究所あり Marine Biological Laboratory は米國諸大學の共同設立にして United States Fish Commission は國立なり、共に夏期間海産物及植物の解剖並に生理を研究し研究生二百名近くありて丁度東京理科大学に附屬する三崎研究所と全性質のものなり、此所にて日本人三名あるに驚きたるが一人は貝の卵に就て研究中にして他の二人は此研究所に雇はれ肉眼的或は顯微鏡的圖を書きつゝありき、此夜當地の旅館に入り明早朝出發する積りなるが尙三ヶ所を見て十八日紐育へ歸着する豫定なり

來十九日より一週間「ボストン」市にて萬國動物學會あるにより日本よりも東京大學の飯島氏外一名近日中に來着せらるゝとの事を當地にて聞きたり、又今日も研究所にて該學會の爲め來米の序に來訪せる獨乙の動物學者を見たり、動物學界にては米國にも相當の大學者ありこの話なり、今日此研究所を參觀したるも小生の興味と方向を異にし魚類等の神經に就きて研究しつゝある者あらざりしは大に遺憾なりき、唯一人ありて下等魚類の脊髓及末梢神經の再生機能を研究せる者あるを見たり、夕食後日本人と共に海邊を散歩し久し振りにて日本人と遊ひたり

八月十四日「ウツホール」にて

松原

今朝早く起きて七時の汽船にて歸らんとし用意既に終り發船時間を宿の主人に聞く主人曰く七時十五分なりと、依て七時十分頃に波止場に至る波止場の雇人曰く七時に既に發船せり次の汽船は十時なりと乃ち空しく三時間を待たざるべからず、此の如く此半島に往復共に馬鹿な目に逢ひ不愉快を極むれども致方なく汽船あれども半島なる爲め甚しく迂回せざるべからず、止むを得ず手紙等を書き初め新聞を讀み暫くにして三時間を消費したり、十時此半島を發船し十一時半對岸に着き直に電車を取りて

New Bedford を發し Fall River 市を過りて午後二時半 Providence に着す

八月十五日 Rhode Island 州 Providence にし 二 郎

第二十一信 (八月十六日 Providence 發)

十五日午後二時半當「プロビデンス」市に着して私立精神病院 Butler Hospital を參觀す、私立丈ありて万事贅澤にして二百名斗を收容し相當に日新の智識ある醫ありて私立ながら時々解剖をやれども専門の病理家なき爲め解剖後の研究盛ならず

本日は當市を相距れる州立精神病院を見る、患者一千人以上を收容すれども建築疎末にして研究盛ならず前の私立狂院より劣ること數等なり、次て養育兒(五百名)に行く別に異りたる所なし、午後懲治院(Workhouse)を見る二百名斗を收容し規模小にして見るに足るべき者なし、次て監獄署(四百五十名)を訪ふ建築の工合は他の監獄と全様なり此監獄にては衣類の裁縫盛なるを見る、去りて男兒感化院(三百六十人)に行きたれども近頃一名の猩紅熱患者を發したる爲め一切の參觀人等を謝絶中なりき、只男兒の訓練を見て歸り、夫より途中にて女兒感化院へ行くへき道筋を荷馬車の上の男に聞くに丁度其荷馬車が該感化院の方へ行く途中とこのことにて其の勸に従ふて荷馬車に乗りたり、生來初めての經驗なれども往來の人な

きにより体裁の善シ惡シは問ふ所にあらず、既にして女兒感化院に着きけるに漸く五十名斗を收容し規模小なれども整頓して見るに足るべきものあり、之より電車にて州廳に行きたれども五時過なりしを以て入ると能はず、夜に入り巡査に尋ねて電車を取り二公園に遊ぶ雜沓すること甚たし、此夜公園に日本人の店あるに驚きたり相變らず日本人一手專賣の玉轉がしと云ふものにて東京淺草公園に在る鉄砲、弓等を射て點數によりて種々の物品を得る様になりあり、米國にては此種のもの日本遊興と一般に云ふ程なり、又日本の庭ありて日本婦人が日本服にて茶を運ひつゝあるを見たり、此等の日本人を見て今更の如く肩身狭くなれるを感じたり

第二十二信 (八月十八日 New York 發)

十五日夜例によりて夕食後市内を散歩し何處かへ遊に行かんとすれども何處に行くべきやを知らず、人に聞くことは容易なれども一ツ盲目的に尋ねずして遊ぶへしと決心し遊びに行くろくな人間が澤山乗れる電車に飛乗りたり、而して其電車か何處へ行くやを知らず只何處か遊場所の方へ行くならんと想像するのみ、然るにイクラシテモ車掌が賃金を取りに来らず、加之乗車者は悉く一種異様の切符を持てるもの、如し、飛んでもない電車を取つたものだと思ひ乍ら泰然自若として腰を据へつゝ電車の

走るに任せたり、豈圖らんやそは或俱樂部様の者の買切電車にて公衆電車にはあらざりき、何か幹事メキタ婦人か小生に近く居つたので其から切符を買ひ別に閉口することなくして或海岸の遊場所に持て行かれたり、歸り電車にて「プロビデンス」に着きたるは夜十二時過なりき十七日早朝 Brown 大學敷地内を散歩し九時州廳に行きて精神病課、衛生課、教育課等を訪ひて統計年報等を得たり、尙藥劑課、齒醫課に至り十一時迄も待てども役人來らず時は金の米國に似合はざる呑氣なこと、云ひ乍ら待てども更に戸の明く氣合なし、止むを得ず書記官らしき者に逢ひて其意を通し圖書館より其を得て歸り途中通運會社によりて此等の統計書類を紐育へ送り直に宿に行き荷物を携へて電車を取り十二時十五分全市を出發し三時半過に Newport 市に着きたり、此市は海邊に在りて米國即ち世界の富豪家が競て夏季別荘を建て夏の米國の交際社會は此地に移る所にして贅澤なる別荘甚だ多く紐育にては見られざる程の者多し、然れども如何にも金をかけて建てたと云ふ様な別荘か澤山あるのみにて瀟洒的に出來上つた者は思ひしよりも尠きに驚きたり、是れ東洋及西洋の美術眼の異なる所なり、如何にも威カメシイ無風流殺風景なる別荘多し、此地は米國獨立戰爭前は米國第一の貿易市なりしが戰爭當時大災害を被りて今に至るも

回復せず其貿易的繁盛は遂に紐育へ取られたるなり、此地には日本の吳の如く海軍兵學校ありて軍艦の碇泊するもの甚だ多し、二三時間散歩して別荘を一覽し夜九時瀛船に乗りて、紐育へ向へり、月夜ならざりしにより暗中の航海にして別に見るべきものとてもなく只睡眠を貪りたるのみ

今朝八時半瀛船は小生の病院及研究所にて占領せらる、Ward's Island 島に沿ふて走り、九時過紐育市に上陸し電車にて十時半研究所に歸り身は再び孤島に蟄居する境遇となれり、天外に流浪して山川を友とし孤村に起伏したることも夢と過き今は顯微鏡の視野を覗き初めたり、左様ナラ (了)

(因云、松原氏宿所は渡米以來同一にして本誌第四十二號九十頁に記すか如し)

### ○敷波重治郎氏端信

(金城療病院皮膚科) (山田孝太郎氏宛)

一 (鳥城發、七月廿四日着)

過日は細々御手紙頂戴多謝、小生不相變ツマラヌ仕事に時日を費して居ります併し頗る健康で自分ながら安心して居る、小生も随分ツラの皮が厚くなつた去四月解剖學會が當地に開會しましたから早速全く結了もしない仕事



の半分丈の「デモンストラチオン」をなした、併し自分の標本の前に半日立チン坊をなしたには閉口した、又 Webb の教授 Schaffer 氏が小生に向て反對の意見を吐露シヤガツタカラ大に閉口した、併しイツカ敵を打つ積りさアハハ……

二 (九月四日着)

其後は頼と御無沙汰……小生の轉學は九月の初でなければ出來ぬ……ツマラヌ仕事に多くの時日を費した、之も無能の致す所とアキラメルより外致方なしさね、轉學地の住居が分らずともドシ／＼貴簡を御送り下さい、乍憚藤井岡本島田の諸兄へ宜しく、何れへも御無沙汰致して居る、忘れずと又令夫人へも宜しく頼む、

○加藤寛氏通信

(六月七日 小川教授宛)

其一

拜啓、先生如何御起居被遊候哉奉伺候小生義無事消光罷在候間乍他事御安心被下度候愚母の病氣に就き態々御往診御願申上候由御厚情深く御禮申上候老後の事なれば豫後不良とは存候得共出來得べくんば今一度生きたる母を見んと欲するは小生の希望の最大なるものに御座候若し爲し得べくんば手術其他何れの法に因りても此希望を充

さしめられん事を奉悃願候遊學と母の病氣とは從來常に並行致居り誠に閉口仕候山海万里亦如何とも爲し難し只々天の吾が上に罪するの酷烈なるを愚痴こぼし居申候小生は先日「ゼメステル」の初に於て伯林を辭し只今「グライフスワールド」大學に研究致居候御存知の通り本校は四百年來の大學にて完備充實致居候内科の Prof. は臍臓の檢鑿者として有名なる「ミンコフスキー」にして外科は「ペ、フリードリック」産婦人科は「マルチン」病理學は「グラビッツ」生理は「ブライプトロイ」細菌學「リヨフル」に候而して「グラビッツ」先生は風と云ひ口調と云ひ全く村上先生其儘にて常に村上先生を連想致居候只少し丈高き方にて、其諸教授の生徒に對するの謙遜なるは日本に於て極て罕に可見得かと存候

橋本監次郎氏は「ミュンヘン」に在り時々文通致居甚た心頼母敷候獨乙留學生中言葉の點に就きては洵に氣の毒な寧ろ可愍の御方々の多きには驚申候勿論小生の如きは此方々と列を全しくし而も席末を汚す者たることは云はずもがなに候此手合に限り三年一語も鳴かず蜚はず蜚べは則ち何とか來るのは歸朝後と存候阿々、小生目下の生活状態は日夜赤毛布の實踐躬行中に候

其二

(八月廿二日發西比利 亞經由九月十九日着)

拜啓、御親切なる御手紙を戴き遠き故國思はれて昨夜も

愉快なる夢結ひ申候愚母の病氣に就て種々御配慮に預り御蔭様にて再ひ快復の期に運ひ申候は御禮の程筆紙に盡し難く何れ再會の時を待ち縷々御禮可申上候早速御手紙可差上の處地慣れぬ所へ參り候事とて彼此雜事に驅られ遂々御無沙汰仕候尙長々の御病氣も知るに由なく御見舞も申上候はで欠禮致候段不惡御思召被下度病後の御保養專一奉祈候小川先生には兩三度書狀差上置候へども山海万里到着も如何あらんと存候宜敷申上被下度候

處換れは品變はるとは如仰事實に御座候得共小生の如き淺見の輩には一向觀察力を逞くするの餘地を許さず爲に茫然として日々徒消致居候面白き話種もと存じ百方苦慮致候へども更に捕捉する所なく其れこそ頭を垂れて回想すれども更に知らず頭を擧げて追想すれども更に覺悟すと云ふ体裁にて誠にお耻かしき次第に候只小生は寢言も獨逸語を言はねばならぬのが心から厭きく致し殊に七ツ八ツの小供が既に小生より遙に巧に合理的に獨逸語を話すのが癪に障り申候

一寸教授の講義振を評せんに母校の教授の講義とは其風變り居り候は事實に御座候如何様に變居り候かは明に言ひ顯はしかたく候も御承知の通り人權主張一點張の國故教授も日本の夫の如く氣取らず全く平民主義で學生に對する態度は紳士に對する態度從て學生は教授に敬服する

と云ふ譯誠に見良く斯様な風は輸入されても一向差支なかるへしと存候然し洋行歸の教授殿が此風を輸入なされ候を御覽に相成候や如何が幸に小生は不快なる長さ西比利亞の旅をしたのでドーダツカ全く忘れ申候事何よりの仕合せに候文部省及私費留學生の内幕を御報申上度候得共チヨイト Meine Höflichkeit schweigt darüber.

小生は今「グライースワールド」大學に在り當校内科の教授は新陳代謝病研鑽者として有名なる「ミンコフスキ」先生ですから轉校致した譯併し氣候少々寒いのに閉口致居候先づ夏服は小生が金澤で初冬着用せし黒服にて左のみ暑しとなさず尙肌寒く覺候當地は夏の間は晝夜殆んど暮なしに明かるい先日小生下宿の婆々曰く「オヤ／＼モ－ハヤ八時で日が暮れかゝる様になつた復た秋かな」と歎息致候事香氣至極の小言に御座候然し未だ經驗無之候得共冬は午後三時四時に至れば讀書に點燈を要するとか申し寒サは攝氏零下十二三度が嚴寒の由に候

奇態に感ずるは教授の「クリニク」に於て手術にても致し居る内、教室を平氣で「バッパン」を噛むことにて我等日本人には見苦しく思ふも彼等にはチツトモ構はぬと見ゆ申候學生は日本と異り聽かんと欲する科目を聞き講義時間には教授により之を異にし早さは朝七時遅きは晩の七時始まり洵に香氣に候

専門學校は固より大學にても然りと(或學士は云ふ)聞くが如く實に其實習の少なきに反し獨逸の大學には何んても實習が甚た多い例へば日本にては生理實習など極少ない尤も之には一理あり獨逸にては普通の授業料の外實習授業料等凡て年俸以外に自己の懐を肥し得る故教授は持合せの「店草」を陳列して買手の注意を引くと云ふ譯にてもあるへきかと被存候猶學期の初め己の聽かんと欲する科目に向て講義料を拂ひ學期の終に至り教授の自筆にてAnmeldungsbuchに署名を乞ふの規定なり其署名を乞ふや大概の教授はDanke schönと云ひ自分の講義を聽き聽講料を拂つて呉れたるを謝すると云ふ意味に外ならず丸で「アキウド」根性に御座候婆は何んでもGeldsacheに相違なきも獨逸は至て嚴しさを感じ申候

bei Fr. Buschkötter  
Fisch str. No. 2  
Greifswald  
Deutschland

bei Herrn Okawa  
Kleinbeeren str. Nr. 9  
Berlin  
Germany

(通信)

其三

(八月廿六日發亞米利加經由十月二日着)

(前畧)先日西比利亞經由にて封書一通差上候が蠻的の露國到着も如何あらんと案せられ申候只今は詳細御報知に相成難有奉謝候小川先生よりの御端書も正に落手宜敷御傳被下度候小生は到着の翌日小川先生佐々木先生山崎先生等へ以端書到着御報知旁御挨拶申置き特に上田先生へは出發前旅行券に就き御厄介に相成候へば西比利亞旅行記の大畧を綴り封便を以て御挨拶申上候得共遠方且つは屢不着の事有之由に付若し到着致さゞりしとすれば甚た禮を缺くの恐有之候に依り御序の節一寸御問合可被下願上候

三年鳴かず蜚はす主義少々意味の御取違にあらざるか小生の意味は獨逸語が話せないから鳴く事も蜚ふ事も出来ないとの意味に外ならず候其にも係らず御敬服と來ては甚た恐入候コンナ事は何でもよいが本日の御封書は何よりの愉快に候又母よりの手紙によれば入院中は特に御厚志に預り候由にて本人も大に喜居り小生よりも尙厚く御禮申上べく様申來候に付茲に改めて御禮申上候  
追々獨逸でも日本人の留學謝絶がソロ／＼頭擧げ出したらしく候此は格別國際上から割出した譯にてもないらしい例へば一教授の下に二人以上の日本人が「アルバイト」をなす場合に於て教授が「アルバイト」研究方針に就き懇

々説明指導すると留學生中の大部分は小生の如き連中だから何時何時でも亦何が何でも只「Ja, Ja, Ja, Ja,」とのみ云ふて居る其筈何を云ふのかチツトモ分らないダツテ沈黙も至つて氣のさかない話だから一寸獨逸風の裝飾までに「<sup>Ja</sup>」を附けた丈けの談し實に滑稽なものに御座候之が日本へ歸ると洋行歸とか何とか文句が附くから可笑しい斯様な始末なれば先づ一々目で了解する様に導かねばならぬから教授も其煩に耐へざるは御尤千萬と存候若し校友の方にして「ミュンヘン」へ向て「ドクトル」目的に御出の方あるとすれば如此豫期は必要に候彼地は日本人急に増加し満員(?)にて先つ一教授の下に働かんとして頼みに行くと臂頭第一獨逸語が出来るかとヤツツケられる而して先つ外科へ或は内科へ行て見よと柔かにハチツケらるゝダカラ各科をグルゝ廻つてドウモ要領を得ないと云ふ様な譯之は或實驗した人の直話に候

當地は金澤に比較せば人口五分の一の小都會に候得共醫會の演舌は甚た敬服の外無之日本の如き何々の一例何々の「デモンストラチオン」と云ふ様な風でなく何だか法螺かは存し不申候も「自ら思ふ斯くあるべし」と自信力強くヤツツケルからユライ

先日下平先生より御訪ね下さいましたが先生は「ベルン」に御研學又橋本監次郎氏よりは其便と同時にドクトル請

求論文を送つて頂きましたが今兄に送らんと思ふも一應御本人に問合はした後にしようよ

當地は田舎ですから日本人の受けがよい時々有位の人から交際を求めらるゝが其意味は難有い御思召? 將た又見世物的禮遇? 言はぬが花に候

先日筑波千歳の両艦「キール」へ参り中々大モテに候へき「スウィチムンド」に於て露帝と獨帝との海上會見は人の注意を引き申候も危険だから上陸が出来ないそうで御氣の毒様に候

小生は至つて觀察力鈍的なれども何んでも御存知になりたき事共御問合に預らば喜んで極力こゝ觀察力を集注し能ふ丈け誤謬なき様御報可致候間何なりとも御用仰附被下度殊に故國よりの通信は最懐しく又最待たるゝ所に候各教授の御方へ宜敷!!! 堀田君細田君其他辱知諸君へよろしく

○ 在天 津 月原秀範君通信 (諸教授宛)

拜啓時下殘暑さびしく御座候處皆々様如何御消光被遊候やさて其後は誠に御無沙汰申上候小生儀何事も無之暮し居り候へば乍憚御休心願上候

さて當地本年の暑さは七年ぶりの由にて七月中頃より下

旬にかけては日中室内九十四、五度屋外百十度内外に昇り申候然し乍ら空氣頗る乾燥いたし候ため、たとひ屋外を歩行いたし候も流汗を覺候事殆んど無し且つ朝夕は所謂大陸的特徴として涼味膚に宜しく候爲め存外凌きよく有之候先月末より近日迄は日々降雨有之丁度内地の五月雨の様子にて之亦近來無き事と人々申合せ且つ所々水害の報も有之候

當地元降來雨少なく候爲め天子天壇に昇りて百姓の爲め甘雨を天に乞ふ事年に數度有之候由近來の雨も其結果に候や

習慣は恐る可き物に御座候初めて渡清いたし候折は天然の風物實に殺風景にして一も遊子の心を慰むべき物とては無之候ひしに近來は濁水の白河々岸楊柳の下又一日の勞を醫するの地と相成申候隨て支那人の汚さ、くさ、も漸く感じ薄く相成見るからいやな感じいたし候饅頭うどん杯も口にする様相成申候此分にては兩三年を經過いたし候は、半ば支那人化する事疑ひ無之と存候

支那人程矛盾なる國民は無之當天津の如きは街衢の整々たる交通機關の整頓せる大小學堂の設立等あらゆる物質的文明の形態を備ひ候にも不柄、其思想の古物的なる、迷信の多き、虚禮の盛んなる、人間として見られざる(動物的生活をなすより斯申候即支那苦力杯夜中大道を散歩

いたし候は、裸体にて路傍にごろり〜寝むり居候其他彼等の生活は之れに準して極めて單純に御座候)下等社會の多き事杯之を前者に對照するに面白きコントラストに御座候

又支那國民は極端なる利己主義にして朱緇の利を争ふに全く人間の躰面を忘れ公職にある物の賄賂を袖にして耻ぢざる事誠に吾人の想像以外に有之候にも不柄冠婚葬祭には數百千金を投じてれしまざるの狀有之候

徳富蘇峯氏嘗て支那を漫遊して曰く支那は研究すればする程理解に苦むの國民なりと誠に適言に御座候小生の如きも漸く本年五月以來支那人に接し候機會を得たのみ未だ言語の不通等にて人情風俗の眞想を捕ふる事不能候何れ逐々御通信申上べき機會も可有之と存候

日本租界の如きは居留民壹千七八百名に候昨年以來醫師の渡航増劇いたし従て從來の病院は二ツに候ひしも今は四ツと相成開業に従事いたし候は醫學士一、得業士四、内務三の多數徒らに猫額大の地に門戸を張りて少數の患者を吸収するに腐心いたし居り候様子内地よりは反てうるさく御座候

其他袁氏設立の軍醫學堂には平賀、高橋兩學士其他兩三名及北清駐屯軍々醫等にて醫士は中々の多數に御座候(廿人内外は有之候はん)北京には下瀬學士(公使館使)其



- 藥學雜誌 三四、五六、七八
- 治療藥報 二四、五六、七
- 醫談 10011
- 日本婦人科學會雜誌 二ノ三
- 同窓會雜誌 一九
- 鎮西醫報 一〇六、七
- 同仁 一四、五六、七
- 北辰會雜誌 四七、八
- 衛生談話 七ノ八九
- 北越醫學會々報 一五九、六〇
- 中央醫學會雜誌 七五、六
- 東北醫學會々報 四五
- 京都醫學會雜誌 四ノ三
- 好生館醫事研究會雜誌 一四ノ四
- 躬行會叢誌 三四、五
- 研瑤會雜誌 大九、八〇
- 臨床藥石新報 二五六、七八
- 静岡縣醫學會々報 一八、九
- 校友會雜誌 四〇
- 校友會雜誌 四〇
- 校友會雜誌 四〇
- 日本助產婦新報 一三、五六

- 日本藥學會
- 發行所
- 日本婦人科學會
- 愛知縣立醫學專門學校
- 全雜誌社
- 第四高等學校全會
- 日本通俗衛生會
- 全會
- 仙臺醫學專門學校
- 全會
- 全會
- 長崎醫學專門學校
- 藥石新報社
- 千葉醫學專門學校
- 京都府立醫學專門學校
- 東京開成中學校
- 全發行所

- 校友會雜誌 二ノ七
- 東洋醫事新報 七八
- 莊內醫學會々報 五、七八
- 眼科臨床醫報 一九三、二一
- 北海醫報 七ノ三
- 校友會雜誌 八
- 校友會雜誌 六
- 富山縣奇病論 一冊
- 肺の攝養 一冊
- 火傷后ノ敗血症ノ一例ニ就テ 一冊
- 獨乙讀本 一冊
- 獨乙讀本 前後二冊
- 獨文讀本 一冊
- 新和獨辭典 一冊
- ウキルヘルムタル 一冊
- 怠惰者の生涯 一冊
- 電音計診斷雜誌 一四

- 滋賀縣立第一中學校
- 私立東京醫學部
- 全發行所
- 北辰病院研究會
- 石川縣立工業學校
- 石川縣立金澤第二中學校
- 緒方正清君
- 竹中繁次郎君
- 橋本監次郎君
- 故山本長助君紀念書籍トシテ實見釜口市太郎君ヨリ寄贈
- 全
- 全
- 全
- 全
- 全
- 全
- 全
- 松村四郎君
- 松村
- 上
- 上
- 上
- 上
- 上

○自明治四十年六月廿四日校外十全會費納付調書  
至全十一月二日

金額 期限 氏名  
 金參圓 (自三十九年度五ヶ年分) 松村 魁君  
 (至四十三年度)

(會告)

第十全會雜誌第四十八號

金參圓	全	(自三十八年度至四十二年度) 六ヶ年分	平澤嘉圓君
金參圓	全	(自三十九年度至四十三年度) 五ヶ年分	國分金城君
金參圓	全	(自四十年度至四十四年度) 五ヶ年分	高野宗重君
金參圓	全	(自四十一年度至四十五年度) 五ヶ年分	布村祥君
金參圓	全	(自四十二年度至四十六年度) 五ヶ年分	太田長作君
金參圓	全	(自四十三年度至四十七年度) 五ヶ年分	谷中正勝君
金參圓	全	(自四十四年度至四十八年度) 五ヶ年分	吉川砥直君
金參圓	全	(自四十五年度至四十九年度) 五ヶ年分	原田悅五郎君
金參圓	全	(自四十六年度至五十年度) 五ヶ年分	平賀東吾君
金參圓	全	(自四十七年度至五十一年度) 五ヶ年分	河野勇君
金參圓	全	(自四十八年度至五十二年度) 五ヶ年分	石橋四郎君
金參圓	全	(自四十九年度至五十三年度) 五ヶ年分	梶川藏重君
金參圓	全	(自五十年度至五十四年度) 五ヶ年分	仙塲松齋君
金參圓	全	(自五十一年度至五十五年度) 五ヶ年分	井上只次君
金參圓	全	(自五十二年度至五十六年度) 五ヶ年分	植木信親君
金參圓	全	(自五十三年度至五十七年度) 五ヶ年分	增井榮太郎君
金參圓	全	(自五十四年度至五十八年度) 五ヶ年分	池田秀雄君
金參圓	全	(自五十五年度至五十九年度) 五ヶ年分	吉田繁二郎君
金參圓	全	(自五十六年度至六十年度) 五ヶ年分	小黒仁太郎君
金參圓	全	(自五十七年度至六十一年度) 五ヶ年分	高木琢磨君
金參圓	全	(自五十八年度至六十二年度) 五ヶ年分	西村銀太郎君

○三十九年度十全會校外特別  
會員會費收支決算報告

三十九年度金澤醫學專門學校校外特別會員會費收支決算  
ノ結果

本年度收入金額ハ 一、二〇七、一八一

ナリ内

自四十年度會費前納金額 六八〇、八〇〇

至四十五年度會費前納金額 四八、一九〇

前年度剩餘金ニシテ維持資金ヘ組入額 四七八、一九一

ヲ扣除シ殘金

ハ本年度實収入金額ナリ 三二〇、五三〇

本年度支出濟額ハ

ニシテ収入額ニ比シ 一六七、六六一

ノ殘餘ヲ生シタリ此金額ハ會則第十六條第四項ニ依リ資

金ニ組入スヘキモノナリ

現在資金ハ三十七年度ニ於テ同年度以後ノ前納會費ヲ繰

替第三回國庫債券額面貳百五拾圓ヲ價格金貳百參拾圓五

拾錢ニ應募購入シ毎年度ノ剩餘金ヲ以テ漸次償還ノ處今

尙金九拾四圓九拾錢九厘償還未濟ナリ依テ繰越現金八百

壹圓七拾四錢貳厘ナリ内金百拾參圓六拾貳錢壹厘ハ本年



度春季陸上運動會へ貸出ス  
右報告候也

明治三十九年度金澤醫學專門學校校外  
特別會員會費收入決算表

科	目	豫算額	收入濟額	豫算額ニ比シ 收入濟額差	備者
第一款	金澤醫學專門學校十全會	一、二六・元三	一、〇七・六二	〇・七・三二	未納者アリ シニヨル
第一項	校外特別會員會費	九元・〇〇	七五・八〇〇	四三・八〇〇	未納者アリ シニヨル
第一目	三十九年度會費	四〇・二〇〇	三三・〇〇〇	〇・八・二〇〇	未納者アリ シニヨル
第二目	前年度未納會費	二二〇・〇〇〇	二二〇・〇〇〇	〇	未納者アリ シニヨル
第三目	前納會費	三三〇・〇〇〇	四三・八〇〇	〇	未納者アリ シニヨル
第二項	預金利息	三〇・九三三	四三・九二一	一四・九八八	預金多キニ ヨル
第一目	預金利息	三〇・九三三	四三・九二一	一四・九八八	預金多キニ ヨル
第三項	繰越金	三〇・二〇〇	三六・一九〇	七・九九〇	前納會費 六〇・〇〇〇 内三六・〇〇〇 前納會費 六〇・〇〇〇 度剩余金
第一目	繰越金	三〇・二〇〇	三六・一九〇	七・九九〇	前納會費 六〇・〇〇〇 内三六・〇〇〇 前納會費 六〇・〇〇〇 度剩余金
合	計	一、二六・元三	一、二〇・二八一	〇・七・三二	

明治三十九年度金澤醫學專門學校々外  
十全會支出決算表

科	目	原豫算額	流用増減 額印ハ減	豫算現額	支出濟額	不用額
第一款	金澤醫學專門學校々外十全會	四六・八四	〇	四六・八四	三〇・五〇	一六・三四
第一項	校外特別會員會費	三三・〇〇〇	二・五五	三〇・四五	二四・五四〇	一〇・六六
第一目	雜誌費	二二・〇〇〇	〇	二二・〇〇〇	一八・五五	一四・四七
第二目	通信費	〇・〇〇〇	〇	〇・〇〇〇	四・五〇	一・六九
第三目	雜費	二・〇〇〇	二・五五	一・四五	一四・五五	〇
第二項	豫備費	三・〇〇〇	△二・五五	〇・四五	一七・八〇〇	二・六九五
第一目	豫備費	三・〇〇〇	△二・五五	〇・四五	一七・八〇〇	二・六九五
第三項	維持資金へ組入維持資金へ組入	四〇・八四	〇	四〇・八四	四八・二六	△七・五五
第一目	組入	四〇・八四	〇	四〇・八四	四八・二六	△七・五五
合	計	四六・八四	〇	四六・八四	三〇・五〇	一六・三四
會費年別	人員	金額	人員	金額	人員	金額
三十四年度會費	二	二・〇〇〇	〇	〇	二	二・〇〇〇
三十五年度會費	二	二・〇〇〇	〇	〇	二	二・〇〇〇
三十六年度會費	一三	一三・〇〇〇	〇	〇	一三	一三・〇〇〇
三十七年度會費	三	三・〇〇〇	〇	〇	三	三・〇〇〇

三十九年度中校外特別會員會費收入內譯

(會告)

三十八年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
三十九年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
四十年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
四十一年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
四十二年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
四十三年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
四十四年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
四十五年度會費	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇
合計	西	西・〇〇〇	〇	西	西・〇〇〇

○卅九年度十全會費收入決算報告

三十九年度金澤醫學專門學校十全會費別紙ノ通り決算ヲ遂ケ候結果收入増金六拾圓六拾六錢支出殘金百拾參圓九拾五錢參厘合計金百七拾四圓六拾壹錢參厘剩余ス而シテ該金額ハ會則第拾六條ニ依リ資金ニ組入スヘキ處本年三月二十三日ノ協議會ニ於テ第一回春季陸上運動會費不足額悉皆償還迄毎年度ノ入會金及豫算額殘余金ヲ以テ漸次償還ノ決議ニ基キ資金ヘ組入金ナシ  
 春季陸上運動會費豫算額金八百八圓拾貳錢ニ對シ支出額金七百八拾貳圓九拾五錢五厘(別紙決算書ノ通り)ヲ要シ候ニ付原豫算額金貳百九拾五圓ヲ扣除實際不足額金四百

八拾七圓九拾五錢五厘其支出内譯左ノ如シ  
 金九拾參圓六拾四錢貳厘 ピアノ購入基金ヲ借入  
 金百四拾九圓四拾四錢八厘 本年度歲入歲出剩余金  
 金百參拾壹圓貳拾四錢四厘 現在資金ヨリ借入  
 金百拾參圓六拾貳錢壹厘 校外特別會員會費前納會費ヨリ借入  
 現在資金ハ國庫債券額面八百五拾圓及金百參拾壹圓貳拾四錢四厘春季陸上運動會ヘ貸出ニ付現在金ナシ  
 右報告 候也

明治三十九年度金澤醫學專門學校十全會費收入決算表

科 目	豫算額	收入濟額	豫算額ニ比シ 收入額差	備考
第一款 金澤醫學專門學校十全會費	一、六四・三三	一、七九・七七	一五・四四	〇
第一項 特別會員寄附金	一四・七五	一四・三三	六・六三	〇
第一項 職員寄付金	一四・七五	一四・三三	六・六三	〇
第二項 通常會員會費	九四・〇〇	九三・八〇	二・〇〇	〇
第二項 醫學學生會費	八四・〇〇	八五・六〇	九・六〇	〇
第二項 藥費	九・〇〇	一・二〇	一・九〇	〇
第三項 預金利息	四・五〇	六・五九	二・〇九	〇
第四項 繰越金	五・〇〇	五・〇〇	〇	〇

明治三十九年度金澤醫學專門學校  
十全會支出決算表

科 目	原豫算額	流用増減額		豫算現額	支出濟額	不用額
		△印入	△減			
第一目 繰越金	50.000				0	0
第五項 雜收入	0.840			0	0.840	0
第一目 物品拂下代	0.840			0	0.840	0
第六項 借入金	53.110			0	53.165	0
第一目 借入金	53.110			0	53.165	0
計	1,640.331	1,779.777		339.445		
經常部						
第一款 金澤醫學專門學校十全會	1,180.921	53.310	640.331	1,500.759	1,239.555	
第一項 春季陸上運動會	295.000	53.310	606.310	72.555	25.255	
第一目 春季陸上運動會	295.000	53.310	606.310	72.555	25.255	
第二項 講話部	3.000		3.000	27.955	3.000	
第一目 大會費	29.000		29.000	27.955	1.875	
第二目 通常會費	2.000		2.000	0.990	1.210	
第三項 雜誌部	482.000		482.000	477.377	7.773	
第一目 雜誌費	482.000		482.000	477.377	7.773	
第二目 通信費	17.600		17.600	23.000	5.200	
第三目 消耗品費	7.000		7.000	5,740	1,300	
第四目 製本費	10.000			0	10.000	3.300
第五目 雜費	1.000			0	1.000	1.000
第四項 ロンテニス部	40.000			0	40.000	0.000
第一目 ロンテニス費	40.000			0	40.000	0.000
第五項 劍道部	3.000			3.000	3.995	0.000
第一目 劍道大會費	3.000			3.000	3.995	0.000
第二目 獎勵費	2.000			2.000	3.875	0.000
第六項 柔道部	3.000			3.000	4.671	0.000
第一目 柔道大會費	3.000			3.000	4.671	0.000
第二目 獎勵費	2.000			2.000	2.619	0.000
第七項 弓術部	4.000			4.000	7.190	0.010
第一目 大會費	10.000			10.000	14.100	0.000
第二目 備品費	19.000			19.000	43.330	0.010
第三目 南山修繕費	5.000			5.000	14.400	0.000
第八項 會務費	6.600			6.600	7.255	0.265
第一目 備品費	3.800			3.800	3.360	0.000
第二目 印刷費	0.800			0.800	0	0.000
第三目 消耗品費	5.000			5.000	4.850	0.000
第四目 雜費	6.300			6.300	5.370	0.000
第五目 茶話會費	4.000			4.000	4,995	0.005
第九項 學術實習部	8.000			8.000	7,991	0.009

(會告)

第一目 藥品材料費	五〇〇〇	〇六四六	五〇六四六	五〇六四六	〇
第二目 備品費	三〇〇〇	二八五〇	三三八〇	三三八五〇	〇
第三目 雜費	一〇〇〇〇	三四九六	六三〇四	六四六五	〇〇三元
第十項 豫備費	七五〇四	六〇〇六	九四三六	九四三六	〇
第一目 豫備費	七五〇四	六〇〇六	九四三六	九四三六	〇
第十一項 端艇基金	一〇〇〇	〇	一〇〇〇	一〇〇〇	〇
第一目 端艇基金	一〇〇〇	〇	一〇〇〇	一〇〇〇	〇

明治三十九年度金澤醫學專門學校十全會  
支出決算表第一項內譯書

一金七百八拾貳圓九拾五錢五厘 春季陸上大運動會費

內 譯

金四圓九拾八錢

審判掛費

內

金貳圓五拾錢

決勝旗五旒竿共壹旒ニ付五拾錢

金壹圓貳拾錢

決勝点境界木綿繩

金壹圓

空砲百發代壹發ニ付壹錢

金貳拾八錢

石灰壹俵

金貳百貳拾九圓八拾六錢

競技掛費

內

金拾參圓

旗百本壹本ニ付拾參錢

金五圓七拾錢

戴籠三十個壹個ニ付拾九錢

金貳圓八拾錢

木綿旗貳拾枚壹枚ニ付拾四錢

金九圓五拾錢

番示板掛札鉄板箱共壹組

金貳圓六拾錢

柳行李壹個

金八圓貳拾錢

長持壹個

金六拾錢

スポン貳拾個壹個ニ付參錢

金壹圓

同 玉貳拾個同 五錢

金貳拾六圓四拾錢

運動シャツ三十枚一枚ニ付八拾八錢

金拾六圓

同 帽子參拾個一個ニ付參拾貳錢

金貳拾五圓四拾錢

同 障礙物斜面壹組

金六圓五拾五錢

同 橫柵壹組

金四圓五拾五錢

同 攀索演綱付壹組

金九圓五錢

同 丸木橋壹組

金六圓貳拾錢

同 拔輪參個壹組

金拾六圓

同 網壹組

金參圓九拾錢

重荷貳拾六個壹個ニ付拾五錢

金貳圓七拾錢

同 用棒拾五本壹本ニ付拾八錢

金貳圓五拾錢

同 槌投貳個壹個ニ付壹圓貳拾五錢

金貳圓拾錢

一哩競爭札貳百拾枚壹枚ニ付壹錢

金參拾六錢

同 籬竹六拾本壹本ニ付六厘

金五圓五拾錢

同 卷尺壹個

金參圓

同 振鈴同

金八拾四錢

同 木綿旗六枚壹枚拾四錢

金貳拾錢

同 籬竹箱壹個

金參圓貳拾錢

同 帽子拾個壹個ニ付參拾貳錢

金八圓八拾錢

同 シヤツ拾枚壹枚ニ付八拾八錢

金四拾五錢

同 木札三枚壹枚ニ付拾五錢

金五拾八錢

同 スタンプ壹個



金拾貳圓六拾錢

金七圓六拾錢

金七圓七拾錢

金九錢

金參圓拾四錢

內

金拾貳錢

金拾參錢

金參拾九錢

金貳拾四錢

金拾壹錢

金九錢

金八拾六錢

金壹圓拾錢

金拾八圓五拾錢

內

金七圓八錢

金九錢

金參錢

金四圓

金壹圓貳拾錢

金貳圓八拾錢

金七拾錢

金壹圓五錢

金七拾五錢

上等賞品四拾貳個 參拾錢

並賞品參拾八個 貳拾錢

番組表千百枚壹枚ニ付七厘

洋紙代

衛生掛費

昇永ガ一セ壹反

脫脂ガ一セ壹反

大白砂糖貳斤壹斤ニ付拾九錢五厘

五列繩帶三個壹個ニ付八錢

脫脂棉花百瓦

貳十倍石炭酸水一斗

傷創膏壹枚

葡萄酒貳本

赤十字旗壹旗

庶務掛費

腕章百十八筋壹筋ニ付六錢

列紙列洋紙五十枚十枚ニ付壹錢八厘

大奉書貳枚壹枚ニ付壹錢五厘

號砲四發壹發ニ付壹圓

招待狀配達人夫三人壹人ニ付四拾錢

廣告料

徽章貳個壹個ニ付參拾五錢

招待狀三百枚壹枚ニ付參厘五毛

同 袋三百枚同 貳厘五毛

金八拾錢

金四百六拾六圓四拾貳錢五厘

內

金貳拾四圓

金壹圓八拾九錢

金貳拾圓拾錢

金九拾六圓八拾錢

金拾壹圓五拾錢

金七拾八圓貳拾錢

金五拾七圓

金壹圓貳拾錢

金壹圓八拾錢

金八圓五拾錢

金參圓五拾錢

金拾壹錢

金壹圓九拾錢

金四拾八錢

金四圓五拾錢

金五拾六錢

金貳拾錢

金拾五圓

金拾七圓五拾五錢

金六拾六錢

金拾六錢

金拾圓

入場券八百枚同 壹厘

會場掛費

會場周圍杭百五十本壹本ニ付拾六錢

麻繩四拾五間(細キ分) 壹間ニ付四錢貳厘

同 三百三十五間(太キ分) 六錢

パンテン各國旗四拾四旗 壹旗ニ付貳圓貳拾錢

同國旗壹旗

天竺木綿製幔幕四拾六間 壹間ニ付壹圓七拾錢

天竺木綿製國旗五十旗(光玉等共) 壹本ニ付壹圓拾四錢

カケヤ壹個

地盤壹個

長持壹個

大光玉壹個

麻繩八間ノモノ壹條

旗棒用杵壹個

同 車貳個壹個ニ付貳拾四錢

柳行李貳個同 貳圓貳拾五錢

光玉八個 同 七錢

塗筆貳本壹本ニ付拾錢

小屋掛損料壹式

打揚花火三十九發壹發ニ付四拾五錢

茶白梅壹斤

マツチ四打

貳錢包菓子五百人前

金拾圓

金壹圓參拾五錢

金四圓七拾五錢

金拾圓

金參圓

金九圓

金拾圓

金壹圓六拾錢

金八拾錢

金壹圓四拾錢

金壹圓貳拾錢

金拾五錢

金四拾八錢

金參圓七拾六錢五厘

金六圓六拾錢

金五圓拾錢

金貳圓四拾錢

金壹圓六拾錢

金拾圓

金拾壹圓貳拾錢

金壹圓拾四錢

金拾壹圓四拾錢

金貳圓貳拾八錢

金貳圓貳拾八錢

金壹圓五拾貳錢

金壹圓七拾五錢

來賓用盛菓子三皿壹皿ニ付四十五錢

巡視小使手當

樂隊履上ケ料

松標札拾五本壹本ニ付貳拾錢

花門壹ヶ所

委員辨當代

粟繩代

會場測量用繩八束代

爆竹貳度分壹度七拾錢

樂隊書辨當拾壹人前

測定用杭五十本代

摺糖四俵壹俵ニ付拾貳錢

當日生徒餘興不足額

幔幕拾壹張洗濯代

天幕六張修理代

物品運搬用車借上代

麻繩二十間ノモノ壹條壹間ニ付八錢

旗棒代

會場草取地均シ八夫參拾貳人分

埒杭打込八夫參人分

小屋掛用人夫參拾八人分

開會當日雜用人夫六人分

小屋建等跡仕抹入夫六人分

木植替及會場跡仕抹入夫四人分

旗棒運搬用人夫五人分

同

金六圓五錢

病院ヲニスコート修繕代

(八夫十人川砂五合)

### 就任辭

前委員野村義雄君藤井一雄君が盡悴の後を追ふて、不肖我等編輯のことに従ふ、已むを得ずと云はむは、不忠實の言にあらずして、深く燕才を省みればぞ!!

部員誌

### ○廣告

長町一番丁五番地へ轉居ス

小川勝陳

